

国富町文化財調査資料

第 4 集

いの み
井水地下式横穴墓群

いち せ
市の瀬地下式横穴墓群

かみ はる
上ノ原遺跡

昭和 60 年度

宮崎県東諸県郡国富町教育委員会

国富町文化財調査資料

第 4 集

いの み
井水地下式横穴墓群
いち せ
市の瀬地下式横穴墓群
かみ はる
上 ノ 原 遺 跡

昭和 60 年度

宮崎県東諸県郡国富町教育委員会

序

町には、国指定文化財（本庄古墳群）を始めとして、数々の遺跡が存在していますが、埋蔵文化財包蔵地も昭和58年度の遺跡詳細分布調査により町内各地に分布していることが明らかになっています。この報告書は、農業の近代化、機械化や作目の多様化、土づくり等農業生産性向上の諸施策と、その実施の過程で次つぎに発見され、専門調査をお願いした調査資料（第4集）であります。

特に市の瀬地下式横穴墓群出土の古墳時代の小児骨は、出土例が少なく保存状態が比較的良好で古墳時代の幼小人骨の形質を知る貴重な資料であるという事から長崎大学医学部解剖学第二教室で詳細な人類学的観察及び計測が行なわれ結果報告がなされています。

また、上ノ原遺跡の縄文土器の出土など貴重な調査報告もあり、国富町の歴史的環境も明らかにされた調査資料でもあります。

調査して頂きました御専門の先生方や御協力頂きました皆さんに深く感謝申し上げます。

昭和61年 3月

国富町教育委員会

教育長 上杉 哲夫

例 言

1. 本書は、国富町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 掲載しているのは、国富町の歴史的環境ほか弥生時代関係1、古墳時代関係3の計4件についてである。
3. 調査関係者は次のとおりである。

調査主体

国富町教育委員会

教 育 長 上杉哲夫
 社会教育課長 日高由伴
 文化係長 永吉勝昭（昭和57年度）
 （調査担当） 与倉武憲（昭和58年度）
 吉野 勉（昭和59年度）

調査員

宮崎県教育庁文化課主幹 田中 茂
 〃 主任主事 永友 良典
 〃 〃 長津 宗重
 〃 主事 北郷 泰道
 〃 〃 日高 孝治

宮崎県総合博物館

埋蔵文化財センター主任主事 岩永 哲夫
 〃 主事 菅付 和樹

4. 執筆者名、調査期日等は下記のとおりである。なお、本書の編集は宮崎県教育庁文化課が行った。

番 号	遺 跡 名	調 査 期 日	執 筆 者
I	国富町の歴史的環境		長津宗重
II	井水地下式横穴墓群	昭和57年6月3日～6月10日	永友良典、北郷泰道
III	市の瀬地下式横穴墓群	昭和58年1月10日～1月22日 昭和59年7月25日～8月1日	田中 茂、岩永哲夫 長津宗重、日高孝治 菅付和樹
IV	上ノ原遺跡	昭和59年2月14日～2月18日	長津宗重
V	市の瀬地下式横穴墓群 人 骨 編	昭和58年1月16日 昭和59年7月28日	松下孝幸、分部哲秋 中谷昭二

総目次

I. 国富町の歴史的環境	1
II. 井水地下式横穴墓群	5
1号・2号地下式横穴墓	
III. 市の瀬地下式横穴墓群	29
5号～10号地下式横穴墓	
IV. 上ノ原遺跡	111
V. 市の瀬地下式横穴墓群 人骨編	143
5号・9号・10号地下式横穴墓	

I. 国富町の歴史的環境

I. 国富町の歴史的環境

当地域の旧石器の発掘調査は行なわれていないが、開拓でナイフ形石器・尖頭器1・畦原型石核1、亀ノ甲で尖頭器1、法華岳で畦原型細石核1が表採されている⁽¹⁾。

縄文時代

当地域の縄文時代遺物は13ヶ所で表採されていたが⁽²⁾、遺跡詳細分布調査によって31遺跡の線引きが行なわれた⁽³⁾。当時代の発掘調査は行なわれていないため、集落の内容は不明である。早期の遺跡としては、押型文土器を出土した前畑遺跡⁽⁴⁾、塞ノ神式土器を出土した源六原遺跡⁽⁵⁾、上ノ原遺跡がある。今回報告する上ノ原遺跡では溝の断面で早期集石遺構が確認されている。

弥生時代

当地域の弥生時代遺物は40ヶ所で表採されていたが⁽⁶⁾、遺跡詳細分布調査によって38遺跡の線引きが行なわれた⁽⁷⁾。当時代の発掘調査は行なわれていないため、集落・墓地の内容は不明である。重弧文の長頸壺である免田式土器が六野原遺跡で出土している⁽⁸⁾。石庖丁は方形と半月型両方出土している。今回報告する上ノ原遺跡の土壌の落ち込みから瀬戸内系の矢羽根透し入りの高坏や凹線文系の高坏がくの字口縁の刻目突帯甕と共伴していたのは注目され、後期初頭に比定される⁽⁹⁾。

古墳時代

当地域の地下式横穴墓群は、九州山脈から流れる一ツ瀬川の支流である三財川と大淀川の支流である本庄川に挟まれた大小五本の台地・丘陵上に分布する。北から元知原地下式横穴墓群・六野原地下式横穴墓群（31基）が存在する台地、栗巣地下式横穴墓群（1基）が存在する小丘陵、井水地下式横穴墓群（2基）、大坪地下式横穴墓群（2基）が存在する台地、市の瀬地下式横穴墓群（9基）・高田原地下式横穴墓群（2基）が存在する台地、森永小地下式横穴墓群・飯盛地下式横穴墓群（3基）・本庄塚原地下式横穴墓群（2基）が存在する独立丘陵がある。地質では、木脇塚原・本庄台地地下式横穴墓群が低位段丘第1の面、高田原地下式横穴墓群が中位段丘第3の面、その他の地下式横穴墓群は中位段丘第2の面に分か

れる⁽¹⁰⁾。

本庄古墳群は前方後円墳17基・円墳37基・地下式横穴墓31基・横穴墓で構成されているが、前方後円墳は調査されていない。六日町1・2号地下式横穴墓、宗仙寺2号地下式横穴墓から甲冑・鏡を出土しており、5世紀後半には造営が始まっている。六野原古墳群⁽¹¹⁾は前方後円墳1基・円墳9基・地下式横穴墓27基で構成されている。粘土槨を内部主体とする直径約12mの円墳（第6号墳）から衝角付冑・短甲・乳文鏡が、8号地下式横穴墓から眉庇付冑・短甲・珠文鏡が、10号地下式横穴墓から眉庇付冑・短甲・仿製獸形鏡が出土している。8号・10号地下式横穴墓は有屍床の妻入り長方形プランである。5世紀中頃～後半の時期に造営が始まっている。町内最古の地下式横穴墓は、三角板革綴短甲・長方形革綴衝角付冑を出土した木脇塚原A号地下式横穴墓⁽¹²⁾の5世紀前半に遡りうる可能性も指摘されている⁽¹³⁾。

今回報告する井水地下式横穴墓群と市の瀬地下式横穴墓群は深年川を挟んで東西の丘陵にそれぞれ立地している。

註

- (1) 茂山護・大野寅夫 「児湯郡下の旧石器」 『宮崎考古』第3号 1977
- (2) 田中熊雄 「宮崎県、縄文・弥生期考古遺物地名録」『宮崎県文化財調査報告書』第3輯 1957
- (3) 国富町教育委員会 『国富町遺跡詳細分布調査報告書』 1984
- (4) (2)に同じ
- (5) 茂山護・長津宗重 「六野原地下式横穴30号・31号調査報告」 『国富町文化財調査資料』第2集 1982
- (6) (2)に同じ
- (7) (3)に同じ
- (8) 瀬之口伝九郎・樋渡正男 「日向の重弧文土器」 『古代文化』第14巻第10号 1943
- (9) 長津宗重 「上ノ原遺跡」 『国富町遺跡詳細分布調査報告書』 1984
- (10) 鳥原寿夫 「国富町の地質と地形の概要」 『国富町遺跡詳細分布調査報告書』 1984
- (11) 瀬之口伝九郎・石川恒太郎 「六野原古墳調査報告」 『宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告』第13輯 1944
- (12) 田中 茂 「国富町塚原地下式横穴A号出土遺物」 『宮崎考古』第3号 1977
- (13) 小林 謙一 「地下式横穴の甲冑と大和政権」 『日向の古墳展』図録 1979

Ⅱ. ^{いのみ}井水地下式横穴墓群
— 1号・2号地下式横穴墓—

例 言

1. 本報告は国富町教育委員会が実施した国富町井水地下式横穴1号墓、および2号墓の緊急発掘調査報告である。
2. 調査は昭和57年6月3日から6月10日まで実施し、宮崎県文化課主事・北郷泰道、同主事・永友良典が担当した。
3. 本書の執筆・編集は北郷と永友が分担し、文責については文末に明記している。
4. 遺構実測図の方位は磁北を示している。

本文目次

第1章 序説	9
1. 調査に至る経緯	9
2. 遺跡の立地	10
3. 調査の概要	10
第2章 調査の結果	12
1. 1号地下式横穴墓	12
2. 2号地下式横穴墓	20
第3章 まとめ	20

図 面 目 次

第1図 井水地下式横穴墓群周辺地形図	9
第2図 井水地下式横穴墓配置図	11
第3図 1号地下式横穴墓出土玉類実測図	12
第4図 1号地下式横穴墓実測図	13~14
第5図 1号地下式横穴墓出土鉄器実測図	18
第6図 1号地下式横穴墓出土土器実測図	19
第7図 2号地下式横穴墓実測図	21

表 目 次

表1 1号地下式横穴墓出切子玉計測表	15
表2~4 1号地下式横穴墓出土小玉計測表(1)~(3)	15~17
表5 地下式横穴墓玉類出土一覧表	22

図 版 目 次

図版 1	井水地下式横穴墓遠景	23
	井水地下式横穴墓近景	23
図版 2	1号地下式横穴墓竪坑および閉塞状況	24
	1号地下式横穴墓玄室内部	24
図版 3	1号地下式横穴墓玄室内玉類出土状況	25
	1号地下式横穴墓竪坑内出土土器	25
図版 4	1号地下式横穴墓玄室内出土遺物	26
図版 5	2号地下式横穴墓竪坑	27
	2号地下式横穴墓玄室内部	27

大 正 流 行

大正時代の流行は、明治時代の流行と異なり、欧米文化の影響が顕著である。特に、西洋のファッションや音楽、文学などが日本に広く普及した。この時期には、西洋のファッションが流行し、女性たちは洋服を着用するようになった。また、西洋の音楽や文学も人気を博し、多くの日本人が洋楽や洋書を楽しむようになった。大正時代の流行は、日本の文化に大きな影響を与え、現代の流行文化の基盤を築いた。

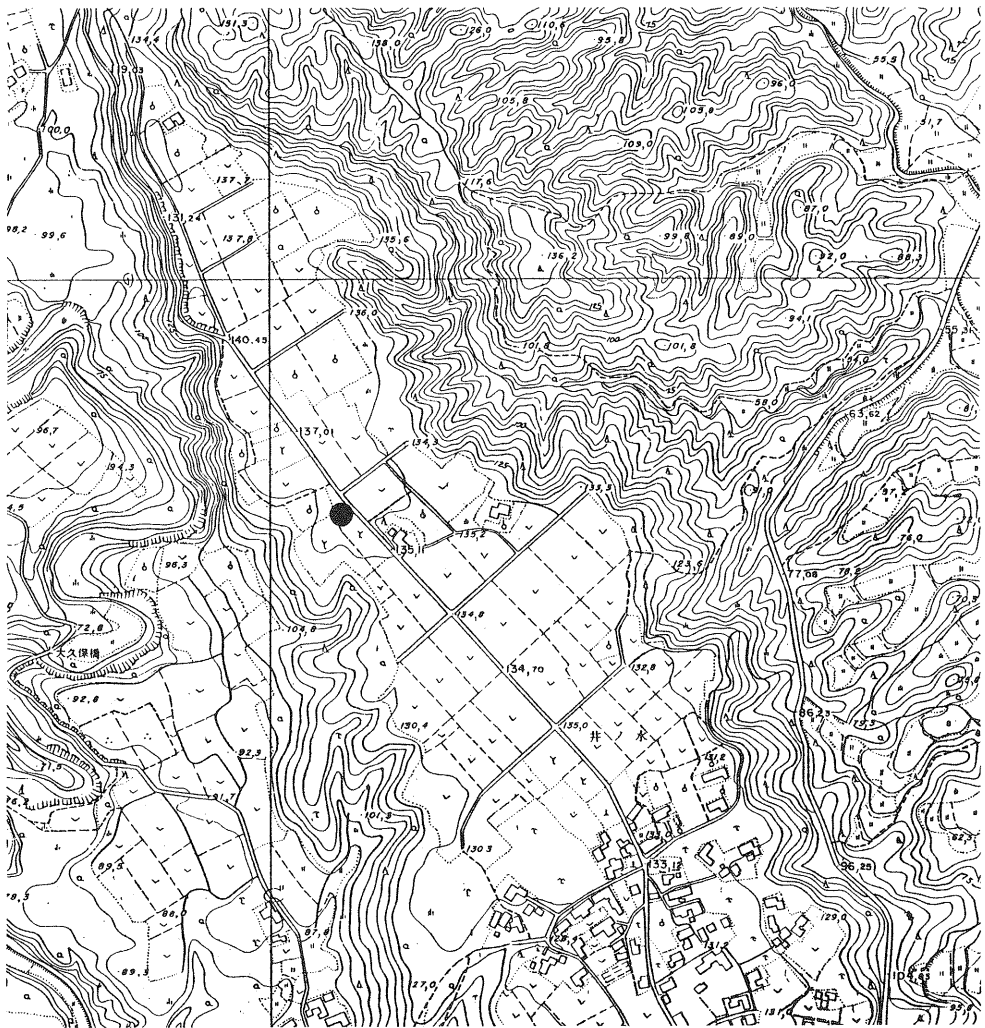
大 正 流 行

大正時代の流行は、明治時代の流行と異なり、欧米文化の影響が顕著である。特に、西洋のファッションや音楽、文学などが日本に広く普及した。この時期には、西洋のファッションが流行し、女性たちは洋服を着用するようになった。また、西洋の音楽や文学も人気を博し、多くの日本人が洋楽や洋書を楽しむようになった。大正時代の流行は、日本の文化に大きな影響を与え、現代の流行文化の基盤を築いた。

第1章 序 説

1. 調査に至る経緯

昭和57年2月21日、土地所有者である 氏（国富町大字八代北俣字井水）がゴボウの播種のためトレンチャーで深耕作業中に畑の2ヶ所で地表に陥没が生じた。そのため、国



第1図 井水地下式横穴墓群周辺地形図(1/10,000)

富町教育委員会では県文化課に連絡をとり、3月11日に県文化課主事・面高哲郎が現地調査を実施した。その結果、地下式横穴墓と判明した。そこで、国富町教育委員会では県文化課の全面的な協力を得て、昭和57年6月3日から6月10日までの6日間にわたって本調査を実施した。調査は県文化課主事・永友良典と同・北郷泰道が担当した。(永友)

2. 遺跡の立地

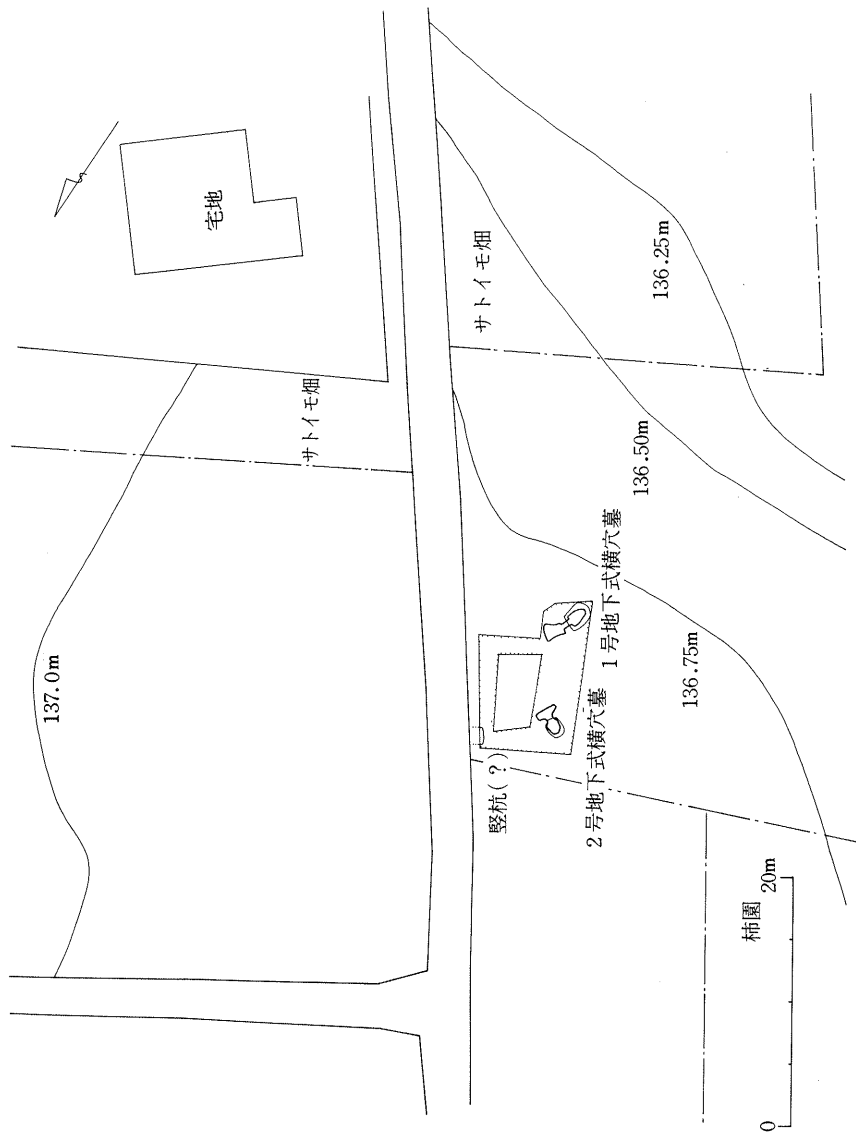
井水地下式横穴墓群は、本庄川の支流である後川と三名川とはさまれた標高120～130mの八代南俣台地の北西端に所在する。所在地は国富町大字八代南俣字廻尾で谷をへだてて南側は深年地区と接する。同台地は国富でも西の台地にあたり、西方には九州山地がせまる。周辺には廻尾遺跡をはじめとする縄文時代～古墳時代にかけての遺跡が密集する⁽¹⁾。また、西には中世の礼ヶ城跡⁽¹⁾も所在する。一方、地下式横穴墓群の分布もくられ、大平地下式横穴墓群⁽²⁾が台地東部に分布する。また、南には後川の対岸にあたる高田原台地には市ノ瀬地下式横穴墓群⁽³⁾をはじめとして、高田原地下式横穴墓群⁽⁴⁾などが分布する。(永友)

註

1. 国富町教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」(『国富町文化財調査資料』第3集)昭和58年
2. 石川恒太郎「国富町大坪地下式古墳調査報告」(『宮崎県文化財調査報告書』第15集)昭和45年
3. 石川恒太郎『地下式古墳の研究』昭和48年
4. 面高哲郎・北郷泰道・菅付和樹・山中悦雄「高田原地下式横穴発掘調査」(『国富町文化財調査資料』第2集)昭和57年

3. 調査の概要

調査は、まず、南北方向に12m×3.5mのトレンチを掘り、2基の地下式横穴墓の竪坑検出を行った。耕作により赤ホヤ層の近くまで削平されていたため赤ホヤ層上面で、それぞれの竪坑のプランが検出できた。そこで、竪坑部から調査を行った結果、1号地下式横穴墓は、妻入長方形プランの玄室をもち、鉄剣、鉄鏃、鉄鎌、匂玉、切子玉、小玉が副葬として出土した。また、2号地下式横穴墓は、平入長方形と思われる玄室をもつ小規模な地下式横穴墓で無遺物であった。さらに周辺部に確認のためのトレンチを入れたところ北東角の道路際に竪坑の一部と思われる落ち込みが確認できた。これら3基はほぼ対角線上に分布する。(永友)



第2図 井水地下式横穴墓配地図

第2章 調査の結果

1. 1号地下式横穴墓（第4図）

1号地下式横穴墓は調査区の南側に位置する。発見時の状態は、ゴボウの播種用トレンチャーが羨門近くの玄室天井を掘削するだけの破損で比較的良好な保存状態であったが、天井部は永年の耕作のためかほとんど崩壊していた。

竪坑はほぼ南北方向に主軸をもつ。長軸264cm、短軸200cm、確認面からの深さ約115cmの台形状を呈する。竪坑埋土は、側上部から羨門入口の床面へ向って斜めに堅く踏み締められた状態であった。埋土中より須恵器片1点と土師器片2点が出土しているが、特に土師器の椀は閉塞石付近で出土している。

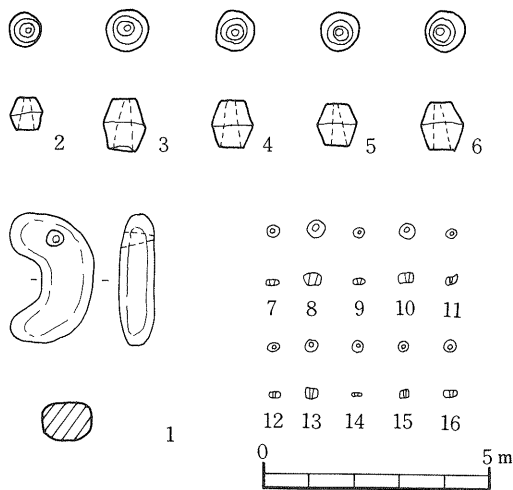
玄室は、竪坑主軸に対し東へ約30°偏している。玄室の構造は両軸を有しており、天井部は崩壊するが切妻造りの妻入り構造であると思われる。羨門部側幅約130cm、天井の高さ約90cmを測る。副葬品は奥壁角に鉄剣1、刀子1、左壁中央角に鉄鎌1、刀子3、右壁中央角に刀子2と玉類を出土している。また、左壁角の副葬品をはさんで、奥壁側に2個、入口側に1個の人頭大の川原石が置いていた。副葬品の出土状況等から、被葬者は2体と思われる。1体は奥壁側に、もう一体は川原石にまさまれた形でほぼ中央部におかれていたと考えられる。いずれも奥壁を対して平行である。(永友)

玉類（第3図、表1～4）

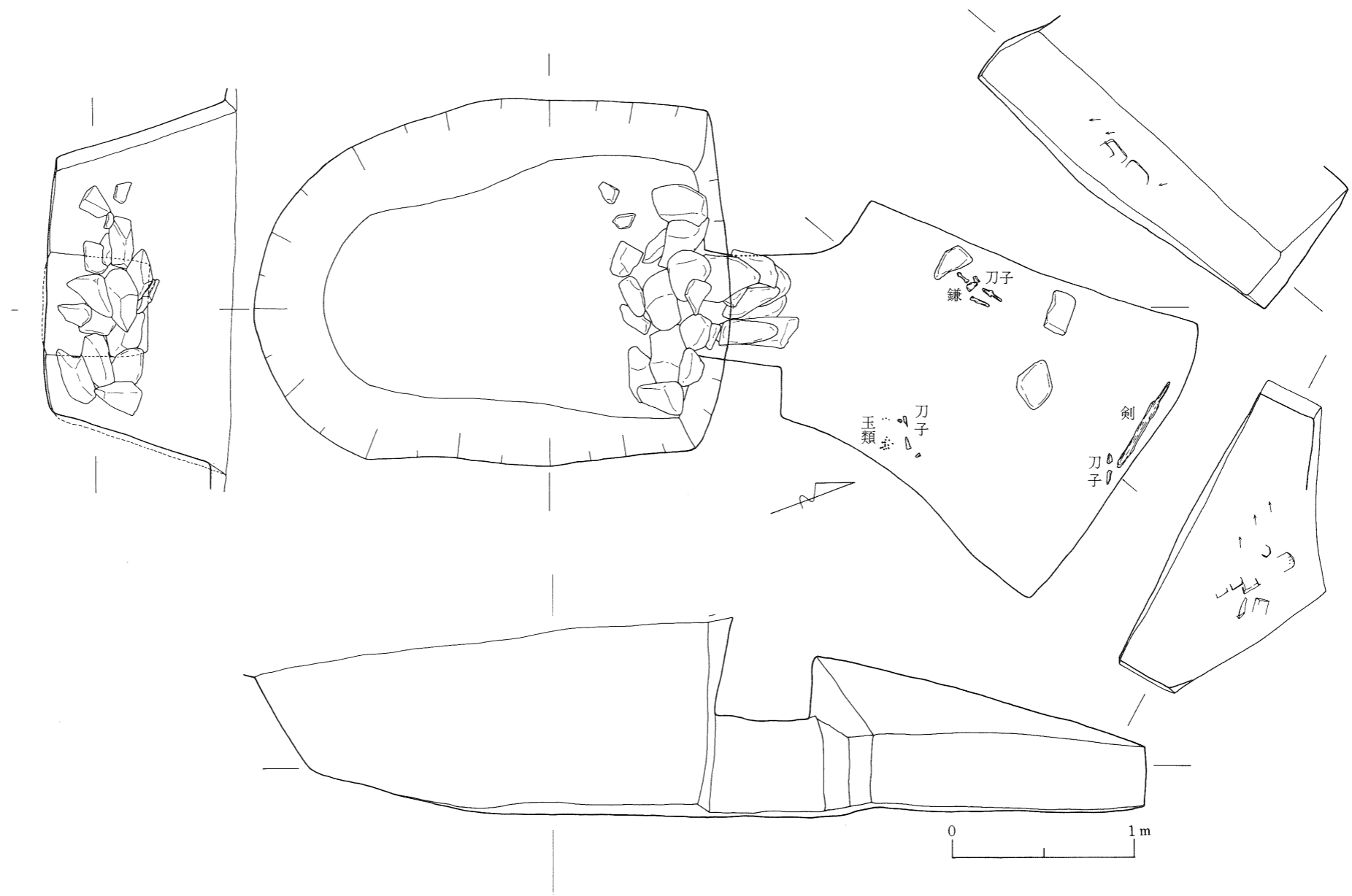
玉類は玄室右壁角より勾玉、切子玉、小玉が出土している。

勾玉(1)は、水晶製と思われる。長さは2.74cm、幅1.73cm、厚さ2.65cmを測り、穿孔は片側からのみ行っている。孔径は0.27cm。

切子玉（2～6）は総数47個を数える。勾玉と思じ水晶製のものである。大きさは最大のもので径1.10cm、厚み0.88cm、最少のもので径0.60cm、厚み



第3図 1号地下式横穴墓出土玉類実測図



第4図 1号地下式横穴墓実測図

表1 1号地下式横穴墓出土切子玉計測表

No	径	厚み	内径	色調	No	径	厚み	内径	色調
1	1.040	0.845	0.305	半透明	25	0.918	0.826	0.285	半透明
2	0.889	0.845	0.250	〃	26	0.902	0.800	0.245	〃
3	1.040	0.845	0.270	〃	27	0.720	0.672	0.255	〃
4	0.863	0.820	0.238	〃	28	0.715	0.688	0.250	〃
5	1.055	0.835	0.280	〃	29	0.940	0.810	0.277	〃
6	0.990	0.820	0.265	〃	30	0.769	0.812	0.240	〃
7	0.700	0.675	0.265	〃	31	0.810	0.760	0.260	〃
8	0.882	0.825	0.275	〃	32	1.100	0.882	0.283	〃
9	1.055	0.843	0.263	〃	33	0.863	0.825	0.230	〃
10	0.830	0.800	0.255	〃	34	0.840	0.770	0.245	〃
11	0.885	0.790	0.275	〃	35	0.960	0.873	0.252	〃
12	0.600	0.640	0.245	〃	36	0.675	0.710	0.268	〃
13	0.805	0.758	0.235	〃	37	0.924	0.790	0.270	〃
14	0.655	0.705	0.225	〃	38	0.945	0.820	0.260	〃
15	0.827	0.730	0.255	〃	39	0.848	0.838	0.220	〃
16	0.960	0.850	0.298	〃	40	0.913	0.775	0.248	〃
17	0.905	0.796	0.285	〃	41	0.940	0.853	0.265	〃
18	0.783	0.700	0.230	〃	42	0.703	0.668	0.240	〃
19	0.845	0.828	0.288	〃	43	0.922	0.832	0.270	〃
20	0.950	0.825	0.250	〃	44	0.934	0.822	0.280	〃
21	0.725	0.778	0.256	〃	45	0.821	0.730	0.265	〃
22	0.720	0.745	0.245	〃	46	0.720	0.742	0.250	〃
23	0.733	0.700	0.275	〃	47	0.590	0.650	0.265	〃
24	0.785	0.770	0.25	〃					

表2 1号地下式横穴墓出土小玉計測表(1)

No	径	厚み	内径	色調	No	径	厚み	内径	色調
1	0.225	0.125	0.070	灰緑	14	0.216	0.120	0.035	灰緑
2	0.230	0.146	0.070	〃	15	0.190	0.105	0.037	濃紺
3	0.215	0.115	0.025	〃	16	0.212	0.113	0.030	灰緑
4	0.231	0.146	0.048	〃	17	0.215	0.105	0.045	〃
5	0.205	0.100	0.056	〃	18	0.196	0.130	0.030	〃
6	0.270	0.120	0.080	濃紺	19	0.230	0.105	0.065	〃
7	0.205	0.140	0.042	灰緑	20	0.214	0.123	0.055	〃
8	0.200	0.125	0.050	〃	21	0.224	0.128	0.055	〃
9	0.205	0.110	0.065	〃	22	0.225	0.130	0.045	〃
10	0.213	0.115	0.040	〃	23	0.215	0.141	0.050	〃
11	0.206	0.100	0.035	〃	24	0.235	0.110	0.060	〃
12	0.215	0.105	0.065	〃	25	0.230	0.131	0.050	〃
13	0.210	0.114	0.050	〃	26	0.212	0.105	0.037	〃

表3 1号地下式横穴墓出土小玉計測表(2)

No	径	厚み	内径	色調	No	径	厚み	内径	色調
27	0.214	0.100	0.060	灰 緑	72	0.210	0.106	0.048	灰 緑
28	0.245	0.143	0.060	〃	73	0.205	0.129	0.025	〃
29	0.210	0.106	0.050	〃	74	0.270	0.157	0.070	〃
30	0.210	0.105	0.046	〃	75	0.215	0.110	0.040	〃
31	0.222	0.130	0.040	〃	76	0.203	0.150	0.038	〃
32	0.221	0.120	0.037	〃	77	0.230	0.161	0.065	〃
33	0.210	0.135	0.048	〃	78	0.205	0.131	0.067	〃
34	0.225	0.118	0.041	濃 紺	79	0.232	0.150	0.042	〃
35	0.210	0.090	0.055	灰 緑	80	0.220	0.128	0.058	〃
36	0.215	0.130	0.040	〃	81	0.220	0.135	0.050	〃
37	0.236	0.128	0.060	濃 紺	82	0.203	0.105	0.023	〃
38	0.205	0.106	0.054	灰 緑	83	0.213	0.120	0.048	〃
39	0.225	0.135	0.063	〃	84	0.210	0.108	0.045	〃
40	0.226	0.145	0.050	〃	85	0.220	0.095	0.032	〃
41	0.225	0.100	0.070	〃	86	0.220	0.126	0.060	〃
42	0.275	0.170	0.055	〃	87	0.240	0.095	0.068	〃
43	0.195	0.100	0.040	〃	88	0.206	0.110	0.050	〃
44	0.216	0.110	0.053	〃	89	0.207	0.145	0.049	濃 紺
45	0.205	0.116	0.036	〃	90	0.250	0.130	0.052	〃
46	0.230	0.130	0.050	〃	91	0.237	0.176	0.043	〃
47	0.210	0.120	0.043	〃	92	0.230	0.120	0.042	〃
48	0.210	0.122	0.025	〃	93	0.212	0.113	0.055	灰 緑
49	0.220	0.120	0.054	〃	94	0.211	0.100	0.052	〃
50	0.220	0.126	0.050	〃	95	0.195	0.112	0.058	濃 紺
51	0.230	0.110	0.058	〃	96	0.236	0.085	0.058	〃
52	0.214	0.113	0.070	〃	97	0.225	0.160	0.065	〃
53	0.208	0.115	0.043	〃	98	0.240	0.095	0.055	〃
54	0.213	0.110	0.051	〃	99	0.215	0.132	0.041	〃
55	0.283	0.125	0.068	〃	100	0.240	0.167	0.042	灰 緑
56	0.230	0.135	0.040	〃	101	0.222	0.130	0.045	〃
57	0.225	0.127	0.055	〃	102	0.223	0.152	0.043	濃 紺
58	0.231	0.120	0.045	〃	103	0.238	0.140	0.062	灰 緑
59	0.220	0.090	0.070	〃	104	0.210	0.107	0.043	〃
60	0.205	0.110	0.055	〃	105	0.182	0.165	0.049	濃 紺
61	0.222	0.115	0.042	〃	106	0.205	0.107	0.045	灰 緑
62	0.215	0.106	0.038	〃	107	0.225	0.175	0.050	濃 紺
63	0.205	0.117	0.045	〃	108	0.210	0.098	0.042	灰 緑
64	0.223	0.210	0.050	〃	109	0.216	0.120	0.052	〃
65	0.266	0.090	0.052	〃	110	0.210	0.098	0.066	〃
66	0.265	0.105	0.032	〃	111	0.208	0.147	0.037	〃
67	0.210	0.100	0.043	〃	112	0.200	0.108	0.043	濃 紺
68	0.215	0.141	0.035	〃	113	0.216	0.120	0.035	灰 緑
69	0.202	0.115	0.050	〃	114	0.238	0.156	0.032	濃 紺
70	0.231	0.156	0.048	〃	115	0.253	0.095	0.082	〃
71	0.230	0.156	0.030	〃	116	0.245	0.120	0.073	灰 緑

表4 1号地下式横穴墓出土小玉計測表(3)

No	径	厚み	内径	色調	No	径	厚み	内径	色調
117	0.265	0.133	0.075	濃紺	162	0.215	0.118	0.072	灰緑
118	0.200	0.128	0.055	灰緑	163	0.221	0.109	0.072	〃
119	0.221	0.115	0.039	〃	164	0.200	0.135	0.033	〃
120	0.220	0.142	0.050	〃	165	0.216	0.120	0.062	〃
121	0.240	0.135	0.061	〃	166	0.370	0.242	0.080	濃紺
122	0.272	0.149	0.060	濃紺	167	0.206	0.140	0.051	灰緑
123	0.203	0.141	0.048	灰緑	168	0.215	0.115	0.048	〃
124	0.196	0.140	0.050	濃紺	169	0.365	0.255	0.062	濃紺
125	0.207	0.136	0.048	灰緑	170	0.222	0.125	0.045	灰緑
126	0.325	0.145	0.045	〃	171	0.201	0.120	0.061	〃
127	0.362	0.250	0.110	濃紺	172	0.300	0.225	0.085	〃
128	0.210	0.111	0.053	灰緑	173	0.203	0.105	0.039	〃
129	0.260	0.162	0.033	〃	174	0.230	0.125	0.049	〃
130	0.200	0.141	0.049	〃	175	0.215	0.122	0.055	〃
131	0.219	0.142	0.060	〃	176	0.311	0.245	0.090	濃紺
132	0.242	0.130	0.035	〃	177	0.205	0.100	0.042	灰緑
133	0.323	0.246	0.064	濃紺	178	0.212	0.125	0.039	〃
134	0.260	0.190	0.053	灰緑	179	0.218	0.125	0.046	〃
135	0.221	0.116	0.060	〃	180	0.218	0.120	0.068	〃
136	0.210	0.116	0.056	〃	181	0.218	0.115	0.055	〃
137	0.203	0.090	0.050	〃	182	0.211	0.095	0.068	〃
138	0.215	0.124	0.048	〃	183	0.203	0.123	0.061	〃
139	0.210	0.130	0.030	〃	184	0.225	0.135	0.068	〃
140	0.217	0.095	0.063	〃	185	0.250	0.120	0.045	濃紺
141	0.317	0.215	0.039	濃紺	186	0.335	0.218	0.043	〃
142	0.218	0.125	0.045	灰緑	187	0.215	0.115	0.025	灰緑
143	0.225	0.115	0.043	〃	188	0.206	0.125	0.043	〃
144	0.210	0.100	0.042	〃	189	0.310	0.177	0.052	濃紺
145	0.215	0.135	0.063	〃	190	0.205	0.125	0.038	灰緑
146	0.200	0.125	0.040	〃	191	0.240	0.138	0.039	濃紺
147	0.345	0.195	0.073	濃紺	192	0.298	0.170	0.063	〃
148	0.222	0.130	0.040	灰緑	193	0.230	0.135	0.034	〃
149	0.228	0.126	0.035	〃	194	0.233	0.120	0.065	灰緑
150	0.242	0.155	0.086	濃紺	195	0.225	0.122	0.035	〃
151	0.225	0.134	0.040	灰緑	196	0.215	0.128	0.060	〃
152	0.221	0.128	0.043	〃	197	0.210	0.160	0.032	〃
153	0.225	0.095	0.060	〃	198	0.202	0.142	0.042	〃
154	0.405	0.257	0.075	濃紺	199	0.229	0.145	0.039	〃
155	0.377	0.200	0.084	〃	200	0.200	0.126	0.035	〃
156	0.215	0.120	0.032	灰緑	201	0.216	0.106	0.032	〃
157	0.219	0.116	0.045	〃	202	0.275	0.136	0.045	〃
158	0.210	0.116	0.033	〃	203	0.208	0.140	0.032	〃
159	0.223	0.135	0.035	〃	204	0.205	0.118	0.047	〃
160	0.215	0.116	0.038	〃	205	0.195	0.129	0.053	〃
161	0.213	0.139	0.053	〃					

0.65cm。平均径約0.85cm、厚み0.78cmである。
穿孔は片側からのみ行っている。孔径は、0.22cm
～0.30cm。

小玉（7～11）は、総数205個を数える。ガ
ラス製で、色調は灰緑色のものが多く、他に青
色系のものみられる。大きさは最大のもので径
0.38cm、厚み0.24cm、最小のもので径0.19cm、
厚み0.10cmである。穿孔は片側からのみ行っ
ている。孔径は0.03～0.09cm。両端の角が丸く仕
上げられているものと、仕上げがあまり行われ
ていないものがある。（永友）

鉄器

鉄剣（第5図1）

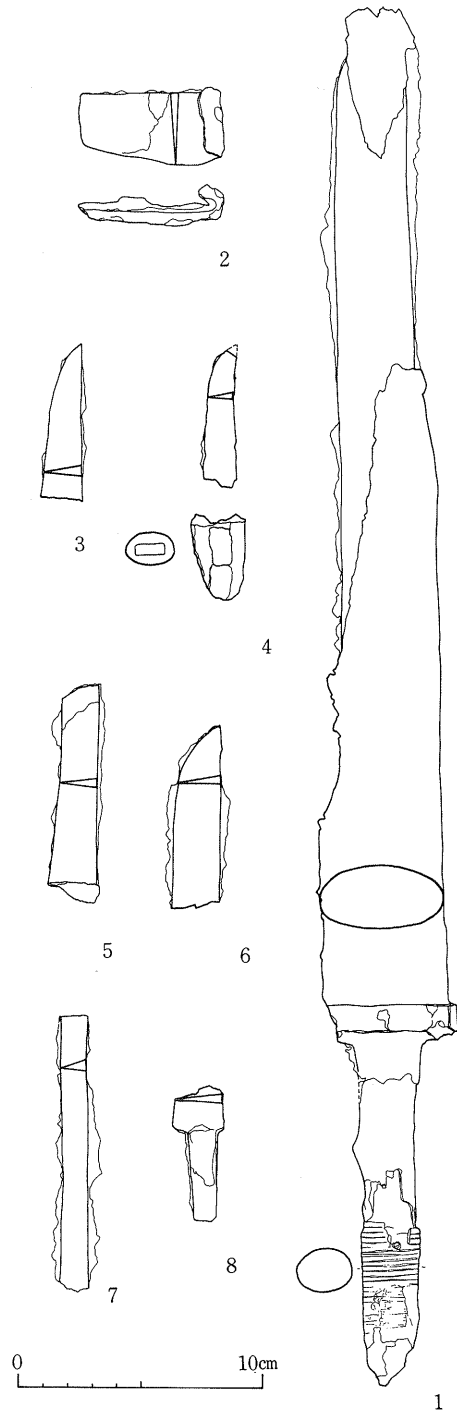
現存長55.3cmを計る。柄部には麻紐状の巻き
が残存し、目釘穴として確実に認められるのは
1箇所である。剣身には大部の梢が遺存する。
梢の木質は厚さは5mm程度で、全体の幅5cm、
厚さ2.5cmを計る。剣身の幅は、鋒寄りで2.8cm
である。

鎌（第5図2）

端部が折り曲げられ、刃部をみとめることか
ら、鋤（鍬）先とも考えられるが、やや先細り
になる傾向がうかがえることから、ここでは鎌
として取り扱っておく。最大幅2.9cm、厚さ0.3cm
を計り、現存長は6cmである。

刀子（第5図3～8）

残存の大きさおよび部位はまちまちである



第5図 1号地下式横穴墓出土鉄器実測図

が、最大のものは幅0.2cmを計る、最小のものは幅1.3cmを計る4であり、7は11cmほどが残存するが幅はわずか1cm程度である。背幅は、4が0.2cm、3・5・6が0.3cm、7・8が0.4cmとそれぞれ計り、形状はもとより法量上からも7が異なる様相を示す。(北郷)

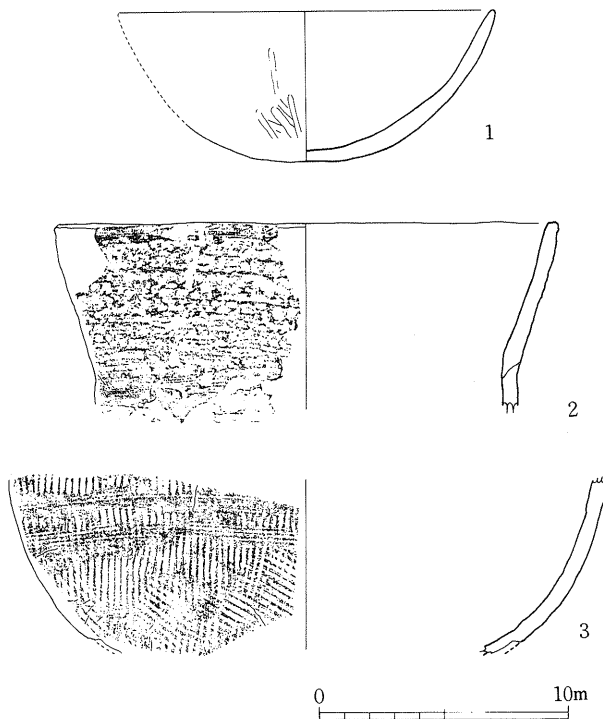
土師器 (第6図1・2)

1は碗である。竪坑閉塞石近くから出土した。口径15.2cm、器高6.0cmを測る。外面はヘラナデが施されており、口縁部には横方向のハケ目調整がみられる。内面にはハケ目が施されている。底部は若干平底を呈する。表面は風化が進んでいる。

2は壺の口縁部である。直立気味に外反し、口縁端部でわずかに内彎する。外面は格子目のたたきを施したあと、弱いナデ調整がみられる。口唇部にもナデ調整がみられる。内面はヨコナデが施してある。胴部にかけては外面に格子目のたたきが残る。胎土中に1～5mm大の砂粒を含む。(永友)

須恵器 (第6図3)

3は甕の胴下部である。外面上部にはたて方向の平行たたきが施されており、その間を回転クシ目調整がみられる。下部には斜め方向の平行たたきがみられる。内面上部にはヘラ調整とナデ調整がみられる。(永友)



第6図 1号地下式横穴墓出土土器実測図

2. 2号地下式横穴墓（第7図）

玄室を南東の方向へむけた小規模な地下式横穴墓である。玄室に対し、竪坑の方が大きく、南北幅約95cm、東西幅約110cmの片袖を成す。一方、玄室は奥壁への掘削を途中で断念したように、奥行は浅く最も深い部分で約60cm、北壁で50cm、南壁で30cmをそれぞれ計る。それに対し東壁は約165cmを計り、構造的には平入り型を呈するものとなる。天井部の高さは、最高位で50cmである。北床面で朱の散布を認め頭骨方向を認定出来るが、副葬品は確認されない。（北郷）

第3章 まとめ

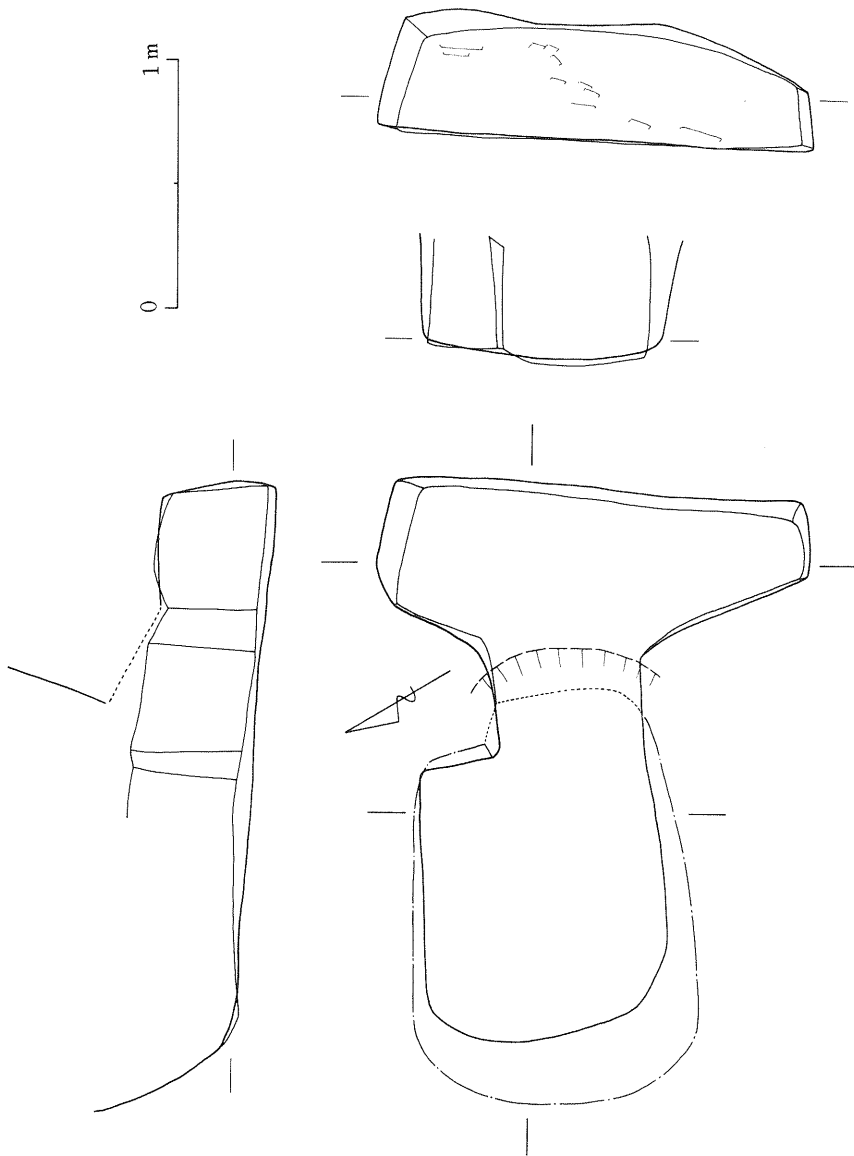
井水1号地下式横穴墓については、平面プランが竪坑主軸に対して玄室がやや東方向に偏する点や多量の玉類を副葬している点に特徴がみられる。平面プランの類例は国富町高田原地下号横穴墓⁽¹⁾や小林市下ノ平地下式横穴墓⁽²⁾等でみられるが特異なプランである。玉類を副葬する地下式横穴墓については表3のとおりであるが、5世紀後半から6世紀前半の時期に集中しており、群として分布する場合、群内の1～3墓の限られた地下式横穴墓に副葬される傾向もうかがわれる。また、人骨の検出がなかったため被葬者数および埋葬場所について明確には言えないが、副葬品や川原石の位置等から推測すると奥壁に対して平行に2体の埋葬が考えられる。切妻・妻入りの玄室プランの場合、一般的に奥壁とは垂直に埋葬が行なわれている点で特異な例と思われる。地下式横穴墓の年代としては6世紀前半を考えたい。

今回の2基のほかに道路側に竪坑のプランと思われる落ち込みを確認しており、これらの分布をみると、径約10mの同心円にその分布がみられる。また遺跡の広がりとしても周辺部にひろがる可能性が十分にあり、あわせて今後の調査に期待したい。（永友）

註

1. 面高哲郎、北郷泰道、菅付和樹、山中悦雄「高田原地下式横穴発掘調査」（『国富町文化財調査資料』第2集）昭和57年
2. 北郷泰道「下ノ平地下式横穴発掘調査」（『宮崎県文化財調査報告書第24集』）昭和56年

昭和60年2月に小林市教育委員会が調査した下ノ平2号地下号横穴墓も昭和56年調査の地下式横穴墓と同タイプの構造をしていた。（未報告）



第7图 2号地下式横穴墓测图

表5 地下式横穴墓玉類出土一覧表

1986. 3. 15

番号	所在地 地下式横穴の名称	内部構造 玄室規模 (cm)	副葬品の内容	時期	被葬者数
1	西都市 西都原4号	奥行 幅 高さ 550×220×160	横刃板某綴短甲, 横刃板鋏留短甲, 珠文鏡, 直刀5, 鉄鏃多数, 勾玉, 管玉16, 小玉64, 丸玉115, 小形管玉11	5C.後半	体 1
2	〃 上三財 元地原5号	250×170×110	直刀, 劍, 鉞, 鍬先, 斧2, 鉄鏃 管玉10		—
3	〃 下三財 月中1号	320×120×120	直刀2, 鉄鏃2, 貝輪 白玉47, 小玉20		—
4	国富町 北神原8号	200×200×110	直刀, 刀子, 雲珠, 轡 勾玉2, 丸玉38		—
5	〃 六野原8号	540×157×112	三角板草綴短甲, 眉庇付冑, 直刀5, 劍4, 鏡, 斧, 鉄鏃60~70, 砥石, 勾玉1	5C.後半	1
6	〃 〃 10号	540×230×113	鋏留草綴式短甲, 眉庇付冑, 劍4, 直刀6, 獸形 鏡, 轡, 鉄鏃, 鍬先, 土師器紺2高坏, 管玉5	5C.後半	—
7	〃 〃 14号	152×36×62	土師器埴2, 須惠器高坏1 勾玉2, 管玉2		—
8	〃 桃木畑	135×248×90	刀子 小玉		1
9	〃 高田原	× ×	貝輪 管玉, 小玉		—
10	〃 木脇塚原	× ×	鉄鏃, 銅環, 須惠器提瓶, 蓋坏 小玉, 管玉		—
11	〃 市ノ瀬9号	150×170×	劍, 鉄鏃6, 耳環, 刀子, 土師器甕, 腕 切子玉, 小玉		
12	〃 市ノ瀬1号	115×270×	貝輪 丸玉6, 管玉8, 切子玉1, 小玉60		
13	〃 栗巢1号	× ×	直刀, 刀子, 土師器高坏 管玉9, 切子玉2, 小玉		3
14	〃 飯盛3号	224×193×	刀子 管玉11		
15	〃 出水1号	195×175×	劍, 刀子6, 鎌 勾玉, 切子玉, 小玉	6C.前半	
16	〃 六日町1号	× ×	甲冑, 直刀5, 鏡3 玉類	?	
17	〃 〃 2号	× ×	甲冑, 鉄鏃, 鏡, 雲珠 管玉8	?	
18	〃 奈仙寺2号	× ×	甲冑, 劍, 矛, 鏡 玉	?	
19	〃 〃 10号	250×148×	直刀, 鍬先 管玉15, 丸玉9		1
20	〃 東ノ原	× ×	刀子, 須惠器环, 提瓶, 壺, 土師器 管玉		
21	須木村 上ノ原9号	153×175×75	劍3, 刀子, 鉄鏃3, 櫛 平玉362		3
22	宮崎市 下北方4号	350×180×140	直刀2, 鉄鏃10, 鍬先, 鉞, 馬具残欠, 須惠 器蓋坏, 土師器高坏, 勾玉, 白玉, 小玉	6C.初頭	
23	〃 〃 5号	535×266×170 235	三角板鋏留短甲, 横刃板鋏留短甲, 小札鋏留 眉庇付冑, 頸甲, 獸形鏡, 変形文鏡, 鞍橋, 轡, 直刀, 劍, 矛石突, 鉄鏃, 馬鐸, 三環鈴 垂飾付耳飾, 勾玉, 小玉	5C.後半	1
24	えびの市 馬頭観音1号	116×255×80	劍, 直刀2, 鉄鏃10, 馬鐸, 杏葉, 轡, 尾錠 3, 勾玉	6C.	—



井水地下式横穴墓群遠景



井水地下式横穴墓群近景

図版2



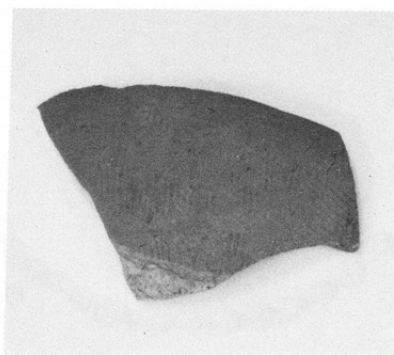
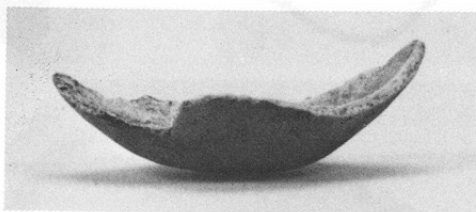
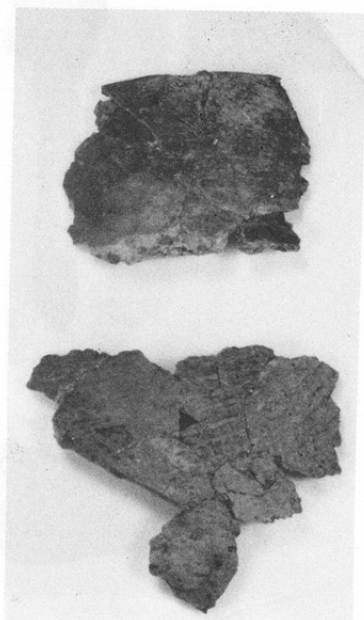
1号地下式横穴墓竪坑および閉塞状況



1号地下式横穴墓玄室内部

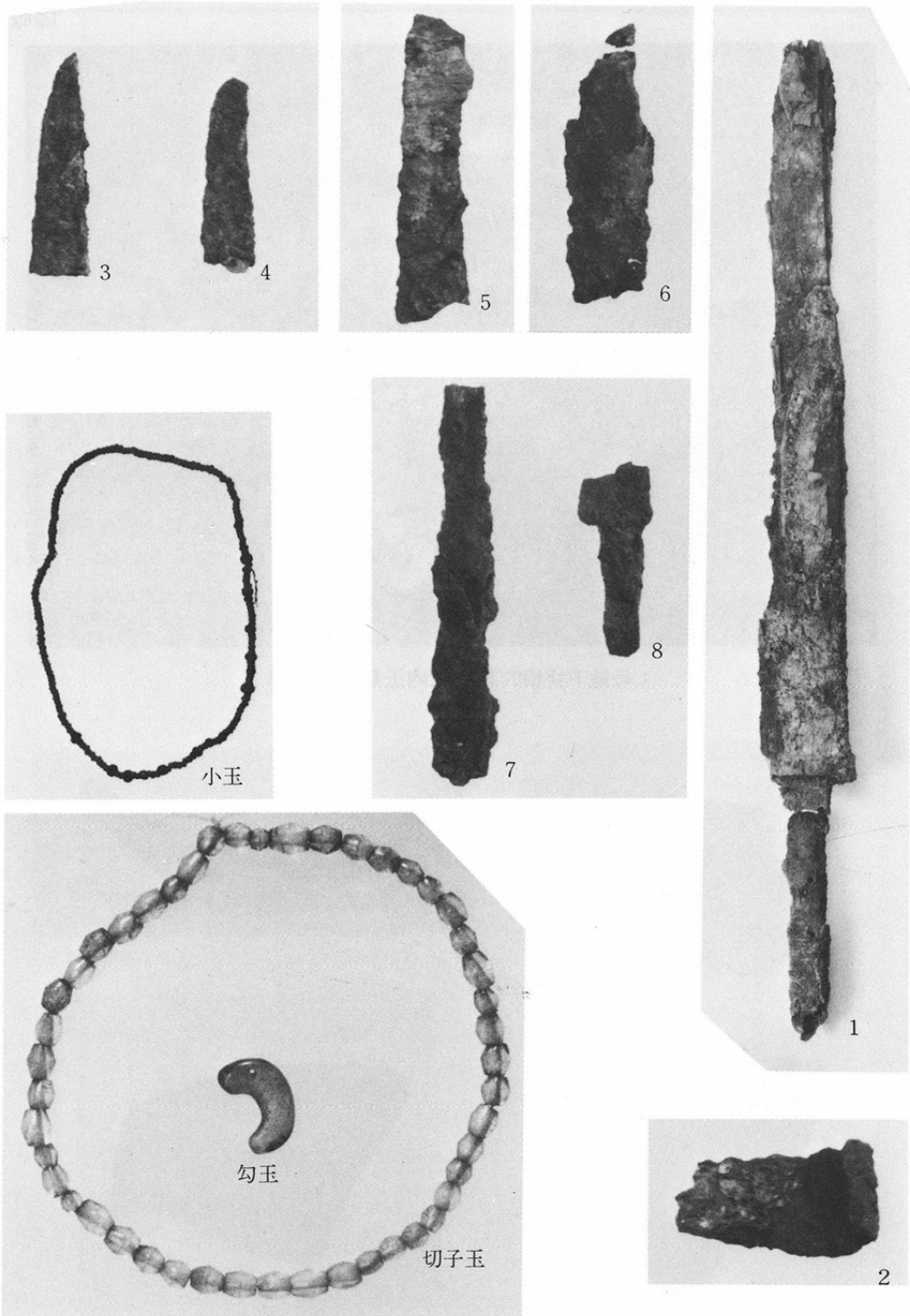


1号地下式横穴墓玄室内玉類出土狀況

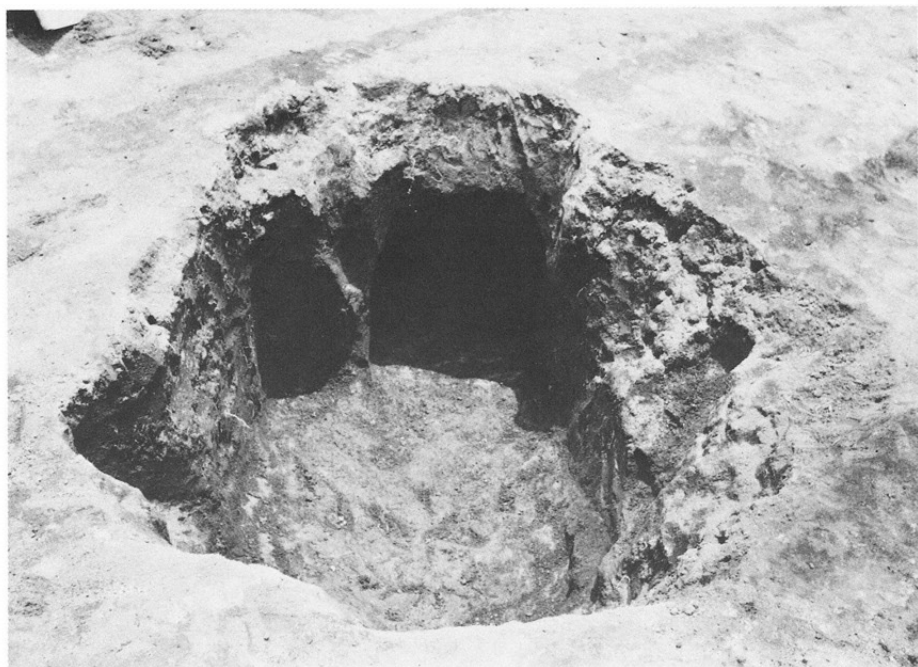


1号地下式横穴墓 竖坑内出土土器

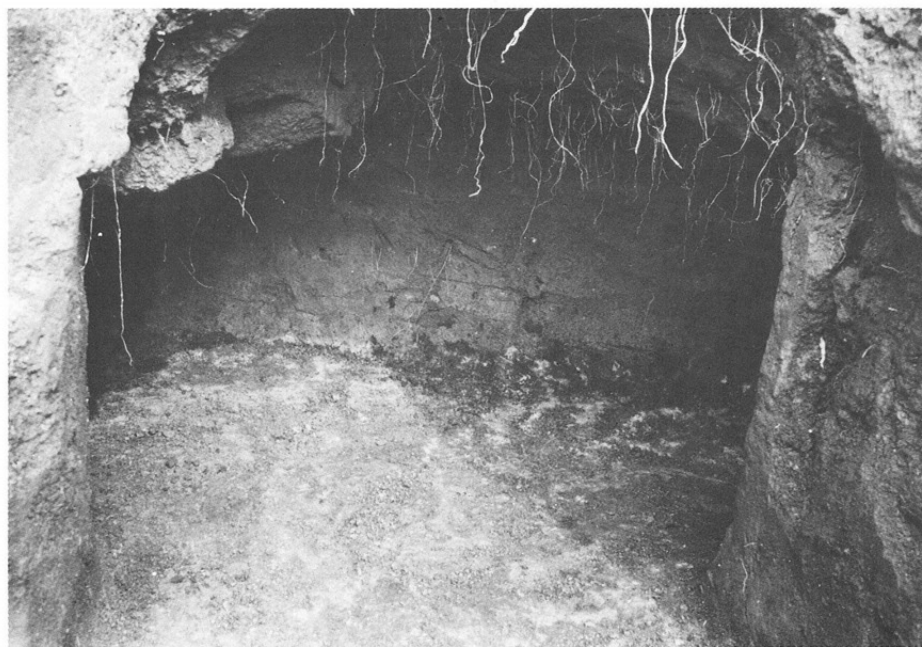
图版4



1号地下式横穴墓玄室内出土遗物



2号地下式横穴墓竖坑



地下式横穴墓玄室内部

Ⅲ. 市の瀬^{いち}地下^せ式横穴墓群
— 5号～10号地下式横穴墓 —

例 言

1. 本報告は、国富町教育委員会が県文化課の協力を得て実施した市の瀬地下式横穴墓群の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は昭和58年1月10日から1月22日まで（5号～9号地下式横穴墓）、昭和59年7月25日から8月1日まで（10号地下式横穴墓）の2回実施した。
3. 調査担当は次のとおりである。
5号・7号地下式横穴墓…菅付和樹、6号地下式横穴墓…田中 茂
8号・9号地下式横穴墓…岩永哲夫、10号地下式横穴墓…長津宗重・日高孝治
4. 本報告の執筆は各調査員が分担して行い、文責は目次に明記している。なお、作図・製図の際に文化課職員の協力を得ている。
5. 人骨については、長崎大学医学部解剖学第二教室、松下孝幸・分部哲秋両氏に依頼し本書人骨編に報告していただいた。
6. 出土遺物は、本報告書刊行の段階で5号～9号地下式横穴墓の鉄器・骨角器及び10号地下式横穴墓の骨角器について保存処理を終えている。10号地下式横穴墓の鉄器についても保存処理を行う予定である。なお、出土遺物はすべて国富町教育委員会で保管する。
7. 本報告の編集は菅付が行った。

本文目次

第Ⅰ章 序説	35
1. 調査に至る経緯	35(菅付)
2. 遺跡の位置	36(ノ)
3. 調査の概要	36(ノ)
第Ⅱ章 調査の結果	39
1. 5号地下式横穴墓	39(菅付)
2. 6号地下式横穴墓	56(田中)
3. 7号地下式横穴墓	59(菅付)
4. 8号地下式横穴墓	63(岩永)
5. 9号地下式横穴墓	64(ノ)
6. 10号地下式横穴墓	73(長津・日高)
第Ⅲ章 総括	88(長津)

挿図目次

第1図 市の瀬5号～10号地下式横穴墓位置図	37
第2図 市の瀬5号～10号地下式横穴墓配置図	38
第3図 5号地下式横穴墓遺構実測図	41～42
第4図 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(1)	45～46
第5図 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(2)	47
第6図 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(3)	48
第7図 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(4)	52
第8図 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(5)	53
第9図 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(6)	54
第10図 6号地下式横穴墓遺構実測図	57
第11図 6号地下式横穴墓出土遺物実測図	58
第12図 7号地下式横穴墓遺構実測図	60

第13図	7号地下式横穴墓出土遺物実測図	61
第14図	8号地下式横穴墓遺構実測図	62
第15図	8号地下式横穴墓出土遺物実測図	63
第16図	9号地下式横穴墓遺構実測図	65
第17図	9号地下式横穴墓出土土師器実測図	66
第18図	9号地下式横穴墓出土鉄器実測図	67
第19図	9号地下式横穴墓出土骨製品実測図	68
第20図	9号地下式横穴墓出土玉類実測図	69
第21図	10号地下式横穴墓竪坑土層断面図	73
第22図	10号地下式横穴墓遺構実測図	75~76
第23図	10号地下式横穴墓遺物出土状況図	77
第24図	10号地下式横穴墓出土須恵器実測図(Ⅰ)	79
第25図	10号地下式横穴墓出土須恵器実測図(Ⅱ)	80
第26図	10号地下式横穴墓出土土師器実測図	81
第27図	10号地下式横穴墓出土鉄器実測図	83
第28図	10号地下式横穴墓出土鉄鏃実測図	84
第29図	10号地下式横穴墓出土鉄器・骨角器実測図	85
第30図	宮崎平野部の須恵器編年図(案)	91~92

表 目 次

表1	5号地下式横穴墓出土鉄鏃(平根鏃)計測表	44
表2	5号地下式横穴墓出土鉄鏃(尖根鏃)計測表	50
表3	5号地下式横穴墓出土貝輪計測表	53
表4	9号地下式横穴墓出土切子玉計測表	69
表5	9号地下式横穴墓出土玉様遺物計測表	69
表6	9号地下式横穴墓出土小玉計測表(1)	70
表7	9号地下式横穴墓出土小玉計測表(2)	71
表8	9号地下式横穴墓出土小玉計測表(3)	72
表9	10号地下式横穴墓出土須恵器・土師器観察表	82

表10	10号地下式横穴墓出土鉄鏃計測表	86
表11	市の瀬地下式横穴墓群一覧表	89

図 版 目 次

図版 1	遺跡近景（北西から）	93
図版 2	5号地下式横穴墓羨道閉塞状況（西から）、同羨門部閉塞状況（玄室から）	94
図版 3	5号地下式横穴墓遺物出土状況（奥壁側から）、同遺物出土状況（玄門側から）	95
図版 4	5号地下式横穴墓出土遺物(1)	96
図版 5	5号地下式横穴墓出土遺物(2)	97
図版 6	5号地下式横穴墓出土遺物(3)	98
図版 7	5号地下式横穴墓出土遺物(4)	99
図版 8	6号地下式横穴墓羨道閉塞状況（西から）、同羨門部閉塞状況（玄室から）	100
図版 9	6号地下式横穴石棺状屍床状況、6号地下式横穴出土遺物	101
図版10	7号地下式横穴墓羨道閉塞状況（西から）、7号地下式横穴墓出土遺物	102
図版11	9号地下式横穴墓玄室内状況、9号地下式横穴墓土師器副葬状況	103
図版12	9号地下式横穴墓出土遺物	104
図版13	8号・9号地下式横穴墓出土遺物	105
図版14	10号地下式横穴墓竪坑検出状況、10号地下式横穴墓須恵器出土状況	106
図版15	10号地下式横穴墓出土須恵器	107
図版16	10号地下式横穴墓出土須恵器・土師器	108
図版17	10号地下式横穴墓出土鉄器・骨角器	109
図版18	10号地下式横穴墓出土鉄器	110

第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至る経緯

市の瀬⁽¹⁾台地は、広大な高田原台地の北西部の一段高まった小台地である。台地上には、縄文～古墳時代の遺物散布地や過去に一部調査された地下式横穴墓群が所在し、周知された遺跡である⁽²⁾。この地下式横穴墓群は、台地のほぼ中央部に水道管が敷設されるのに伴って発見されたもので、当時5基確認され4基が発掘調査されたようである⁽³⁾。今回報告する地下式横穴墓群は、遺構番号は昭和43年2月調査分に引続いて5号～10号としたが、この台地の西端部で発見されたものである。

昭和57年12月、台地西端の一部傾斜面にかかる山林が畑地に造成された。この造成工事は畑地の作付面をその東隣りの畑地面より大幅に下げため重機により大量の土砂を搬出するものであった。その際、玄室奥壁と天井部の半ばを破壊されたもの1基（5号）、玄室天井部と竪坑部を破壊されたもの1基（6号）が発見され、特に5号地下式横穴墓からは良好な状態で人骨や直刀・鏡・刀子等が出土した。そのため町教育委員会では、遺跡発見届の提出・工事の一時停止等の措置を取り、依頼により派遣された県教育委員会文化課職員と現地を確認した結果、さらに竪坑部の一部を破壊された1基（7号）を発見した。現地は、既に造成予定面積の半ば以上の土砂が持出され、遺構の現状での保存が困難なこと、そして、地下式横穴墓は群集するという多くの事例から残りの部分にも未発見の地下式横穴墓が存在する可能性があり、このまま造成すると破壊される恐れがあることなどから、町教育委員会では記録保存のための発掘調査を行うことになり県文化課に職員派遣を依頼した。調査は昭和58年1月10日～22日まで実施された。調査中に検出された2基（8～9号）を含めた計5基は、土砂搬出に伴い現在既に消滅している。

また、昭和59年7月20日には、この東隣りの畑地の整地作業中に木根等を廃棄するための穴を重機により掘削したところ、偶然地下式横穴墓の玄室奥壁の一部を破壊してしまった。そこで、土地所有者と協議した町教育委員会では、地下式横穴墓の構造上現状での保存が困難なこと、農作物の作付時期がせまっていることなどの理由により発掘調査を行うことになった。調査は、県文化課に派遣依頼をし、同年7月25日～8月1日まで実施された。

註(1) 「市ノ瀬」とも書かれる。ここでは、国富町文化財調査資料第3集の記述に従い「市の瀬」とした。

- (2) 『全国遺跡地図 宮崎県』（文化庁文化財保護部 1977年）の宮崎16（妻・高鍋）の63～65に記載。
- (3) 「石川恒太郎『地下式古墳の研究』第2章第1節（5）市ノ瀬の地下式古墳」の記述によると、昭和43年発見されたのは玄室が破壊されて発見された3カ所と「豎壙部」が破壊されて発見された1カ所の計4カ所である。この玄室が破壊された中の1カ所は2基の「地下式古墳」が接近しているものであり、調査したのはこれら玄室が破壊され発見された4基の「地下式古墳」で残り1基の「豎壙部」のみ発見のものは未調査のままと思われる。なお、「地下式古墳」の遺構番号は玄室の確認されたもののみ1号～4号と付けられたようである。報告されたのは石川氏調査分の1号と4号の2基である。

2. 遺跡の位置（遺跡分布図、第1図）

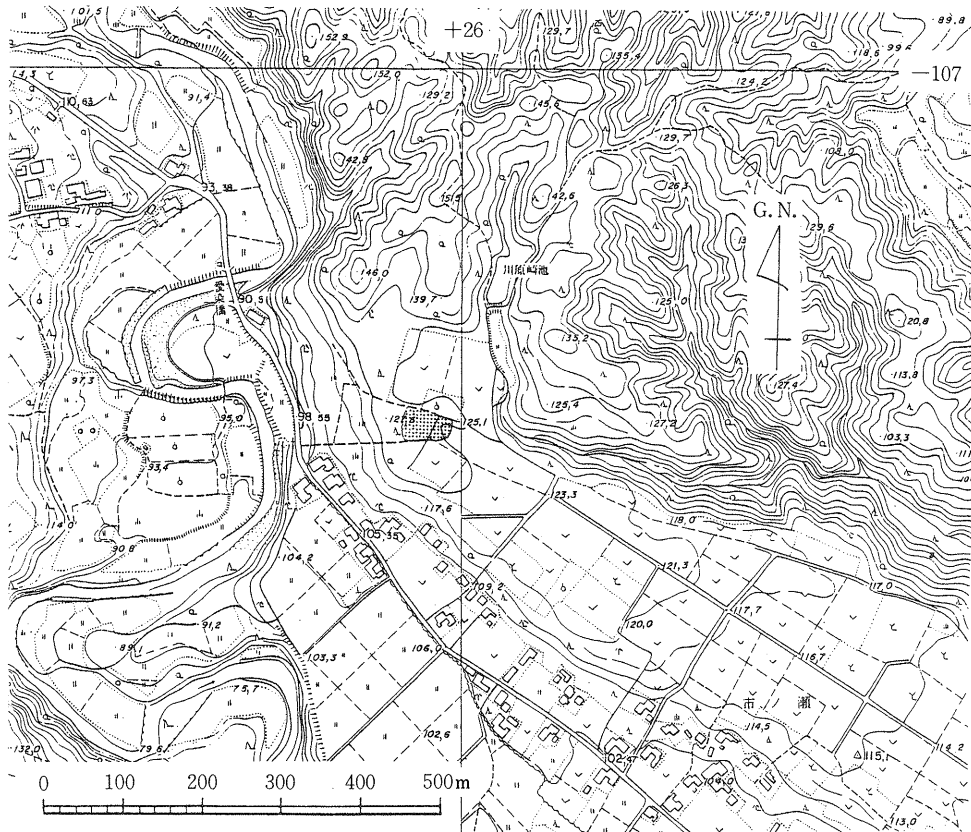
国富町は宮崎平野に近く、北西～南東方向に長い町である。その北西部一帯は深い山林に覆われているが、中央部から南東部にかけては広大な台地と肥沃な水田地帯が広がっている。北西部山林地帯から流れ出る豊かな水は、北方を三名川、中央部を深年川となり東流し、共に合流して南方の本流本庄川へと流れ込んでいる。市の瀬台地は、この深年川中流北岸に望む深年台地のさらに北部に位置し、深年台地より一段高い標高120～130mの小台地である。

今回報告する市の瀬5号～10号地下式横穴墓は国富町大字深年字市の瀬に所在し、5号～9号が大字深年5019-1番地、10号はその東約20mの大字深年5023-2番地に位置する。これらの地下式横穴墓群は、市の瀬台地の西の端、傾斜面に近い位置にあり、昭和58年度国富町遺跡詳細分布調査報告書の遺跡番号1207（市の瀬台地地下式横穴群）の範囲に含まれる。この外に市の瀬台地には、昭和43年に発掘調査のなされた地下式横穴墓群があるが、これは台地のほぼ中央部にあたり、同遺跡番号1208（1207と同範囲の市の瀬遺跡）と1209（小原山遺跡）を結ぶ一帯もこれら地下式横穴墓群の周知の遺跡に含まれるものと考えられる。

3. 調査の概要

地下式横穴墓は、現在地表からの観察でその存在を確認するのは困難であり、耕作あるいは工事に伴い玄室部が陥没または開口して発見されることが多い。今回報告分も玄室の崩壊開口が発見の直接の契機となっている。

昭和58年の調査では、5号・6号地下式横穴墓が既に玄室部が開口しており、5号地下式横穴墓の方は、奥壁側開口部から玄門近くの人骨とその副葬品と思われる遺物が外へ持出されていた。そして、これらは造成地南側の「塚」と呼ばれる小円墳状の高まり付近に埋納さ



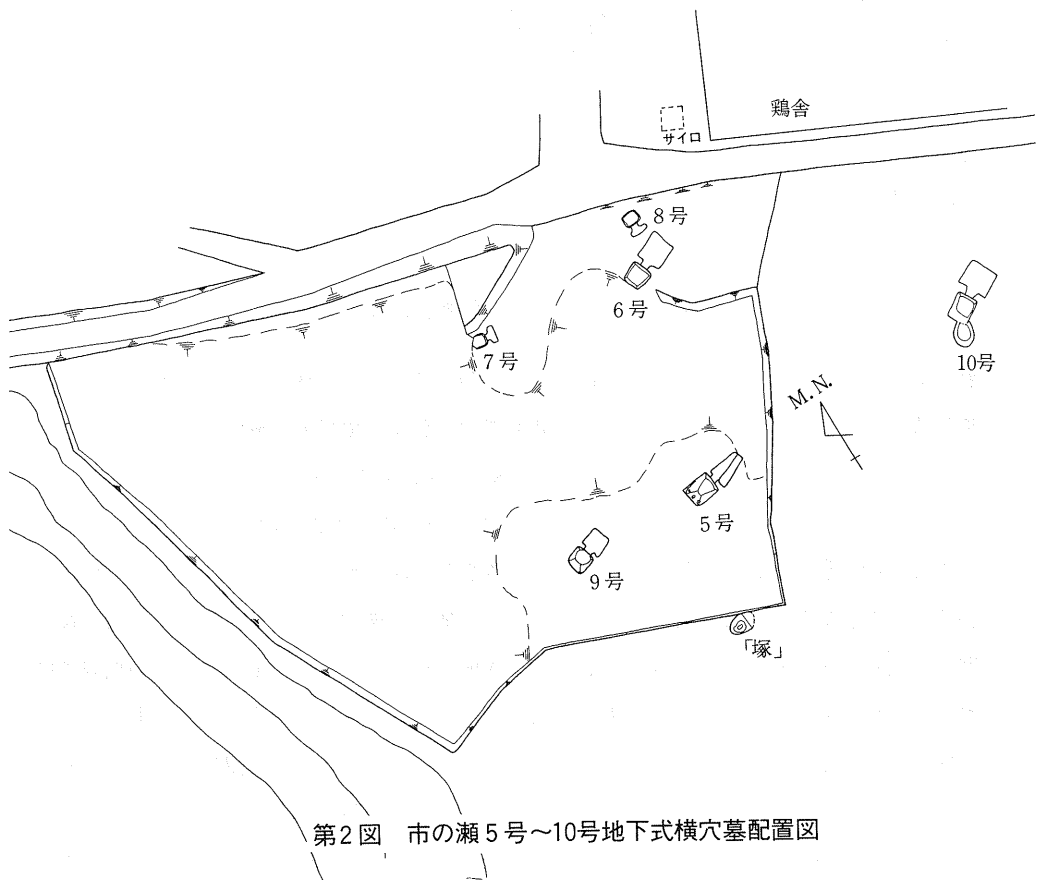
第1図 市の瀬5号～10号地下式横穴墓位置図

れていた。そこで、これらの遺物を掘り出すに際して、この「塚」に遺物を埋納する時に重機により掘られた溝を精査したが、その断面ではこれが古墳である確証は得られなかった。この「塚」の北側造成地内を精査した時も「塚」に対応する地下式横穴墓は検出していない。

さて、遺構の調査は、5号・6号地下式横穴墓玄室内の流入土を除去することから始めた。この2基の竪坑部は、玄室側から羨道部の位置を確認後、地表で土色の違いにより検出している。また、掘削断面で竪坑部が発見された7号地下式横穴墓は、竪坑部埋土の除去後、未開口の玄室の調査を行った。8号・9号地下式横穴墓については、未造成部分の精査の結果竪坑部を検出したもので、玄室は未開口状態であった。しかし、造成計画上、あるいは地下式横穴墓の構造上現状での保存は困難であると考えられ、やむなく記録保存のための発掘調査を行った。このほかに、58年調査地では、土取り後の境界断面でアカホヤ（Ah火山灰）層下に焼石が同レベルで広がっているのが観察された。これは縄文時代早期の集石遺構に伴

う散石と思われたが、時間その他の制約でこの時期については調査できなかった。また、調査当時既に土取りされていた部分では、須恵器大甕の破片や縄文時代早期の文化層に伴うと思われる黒色頁岩や粘板岩の剝片を数点採集したが、河原石などはみられなかった。それで、この部分には少なくとも5号や6号、9号地下式横穴墓のような大きな河原石を用いたものは存在しなかったものと考えられる。なお、この調査期間中、近くの深年小学校児童の授業時間を利用した遺跡見学会が開かれている。

昭和59年の調査は、前述のとおり10号地下式横穴墓1基だけである。これは、開口部から玄室内流入土を除去後羨道部の位置を確認し、地表で竪坑部を検出している。その際、10号の竪坑部に切り合う状況で未完成の竪坑と思われる遺構も検出されている。この10号地下式横穴墓は調査終了後埋戻されて現状は畑地に利用されているが、周辺にはなお多数の地下式横穴墓が未開口のまま遺存しているものと思われる。



第Ⅱ章 調査の結果

1. 5号地下式横穴墓

(1) 遺構(第2図・第3図)

9号地下式横穴墓の東南東約12mに位置し、6～7号・9～10号同様竪坑部を西に玄室を東に作る。竪坑部・羨道・玄室の3構造からなり、玄室には偏平な河原石を用いた石棺状施設がみられる。竪坑部～玄室の全体としての主軸はほぼ東西方向を示しているが、竪坑～羨道の主軸に対して玄室の主軸は北へ約7°程おれている。切妻入り長方形の構造である。

調査前の状況は、玄室奥壁側から天井の半分と両側壁の一部、奥壁を重機に削られており、その際落下したり流れ込んだりした土砂が玄室の東側約3分の2程を覆っていた。しかし、竪坑部及び羨道と玄室西側付近は閉塞当時の状況を残したままであった。

竪坑部は東西長軸2.35m、東辺(羨門上部)1.91m、西辺約1.50m、検出面から床面中央までの深さ約2.20mを計り、平面形台形を呈する。検出面はアカホヤ層(Ⅱ層)上面であるが埋土に黒色シルト質土(Ⅰ層)が多いことから掘り込み面は上位Ⅰ層中にあったものと考えられる。西辺北側の掘り込み面は少々乱れがみられる。竪坑部東壁(羨門側)はほぼ垂直に掘られているが、その正面の西壁は床面中央へ向かって傾斜し床面はかなり狭くなっている。西壁面中央と両隅の上部には足掛けのために掘られたと思われるくぼみがあり玄室から出土した鋤(鍬)先とほぼ同じ幅でU字形をしている。

竪坑部埋土は次の様な状況を呈する。竪坑床面中央は一段低く掘られていて黄褐色砂質土(Ⅳ層)と暗茶褐色弱粘質土(Ⅴ層)以外の土を含まない混合土で張り床されている。その上には黒色シルト質土(Ⅰ層)を主体とする攪乱土が羨門下部から西壁へ次第に高くなる状態でみられ、そのさらに上部には暗褐色シルト質土(Ⅲ層)やⅣ層・Ⅴ層・Ⅰ層・Ⅱ層(アカホヤ層)等が混合した層が、そして最上部はⅠ層を主体にⅡ層・Ⅲ層の土塊を含む層がみられた。

羨道は竪坑東壁のほぼ中央、竪坑床面から約7cm上に掘り込まれ、玄室西壁中央やや北寄りの玄室床面から約5cm上へ貫通している。羨門部床面幅約55cm、側壁高約69cm、羨道の長さ右壁約50cm、左壁約57cm、玄門部床面幅約70cmを計る。

羨門部は縦約105cm、横約60cmの偏平で巨大な河原石1個を垂直に立ててその殆どを塞いでいる。また、その倒壊を防ぐため大きな河原石9個を斜めにたてかけておさえつけ、土砂

の流入を防ぐためすき間に10個前後の小さな河原石とⅢ層・Ⅳ層の土塊をつめ込んでいる。これら閉塞石は前述のⅠ層を主体とする攪乱埋土の上面に据えられているため西壁の方が次第に高くなっている。

玄室は平面形が北壁側と西壁側のやや膨らんだ東西に長い不整形台形を呈している。各部計測値は中央長軸約265cm、奥壁幅約86cm、玄門側直線幅約171cm、天井までの高さ約100cmを計る。天井部は切妻の屋根形をなし右袖と南北両側壁に幅約2～5cmの軒（棚）状施設を作り出す。この棚状施設は北壁東側は消滅している。

玄室床面は右袖側南半分は南壁に沿って長方形の掘り込みを設け、その四周は約4～7cm掘り下げて溝を作っている。そして、この溝に偏平な河原石を縦長にさし込み立てならべ、床には大小の偏平な河原石を敷きつめて箱式石棺状の施設を作っている。この施設のために右袖側は左袖の倍以上の幅がある。また奥壁側は身動きに窮する程狭くなっている。なお、奥壁側立石は土砂崩壊によりかなり内傾しており、付近の遺物も影響を受けていた。

この石棺状施設の内壁や玄室の壁面には一面に丹が塗られていた。また、人骨は玄門側の既に持ち出されていた方を1号とし、土砂の下から出土した方を2号とした。玄室の掘り込まれていた層はⅢ層からⅥ層（茶褐色シルト質土）にかけてである。

(2) 遺物（第3図、第4図～第9図）

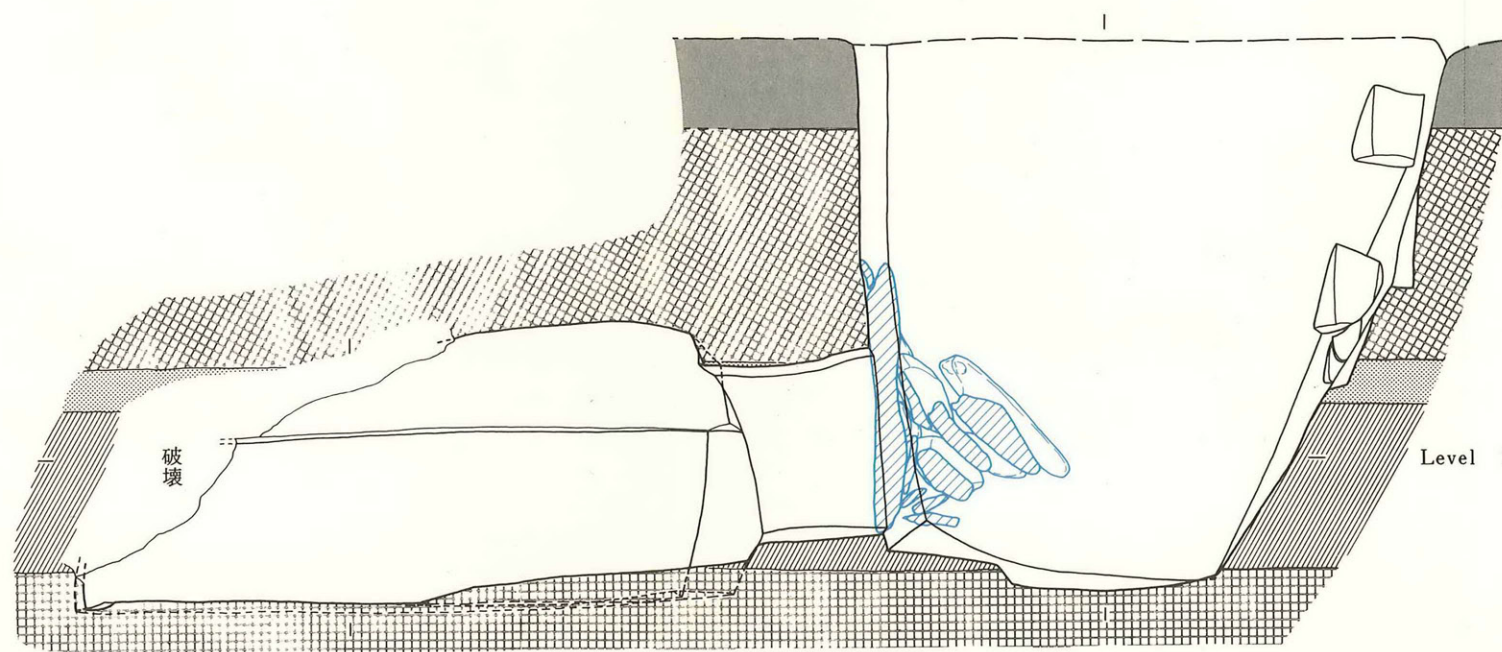
出土した遺物や人骨は全て玄室内にあったものである。5号地下式横穴墓は玄室奥壁側天井部の破壊によって石棺状施設と床面の東側3分の2以上が剥落あるいは流入した土砂に埋まっていた。しかし、玄門側の遺物や人骨は調査時既に外へ持ち出されており、これらの遺物には開口後持ち出されたもの、調査中土砂の中から出土したもの、土砂の下からほぼ原位置と思われる状態で出土したものの3種類がある。そこで各々の遺物についてこの順序で出土状態もあわせて、以下説明してゆくことにする。

1号人骨（第3図）

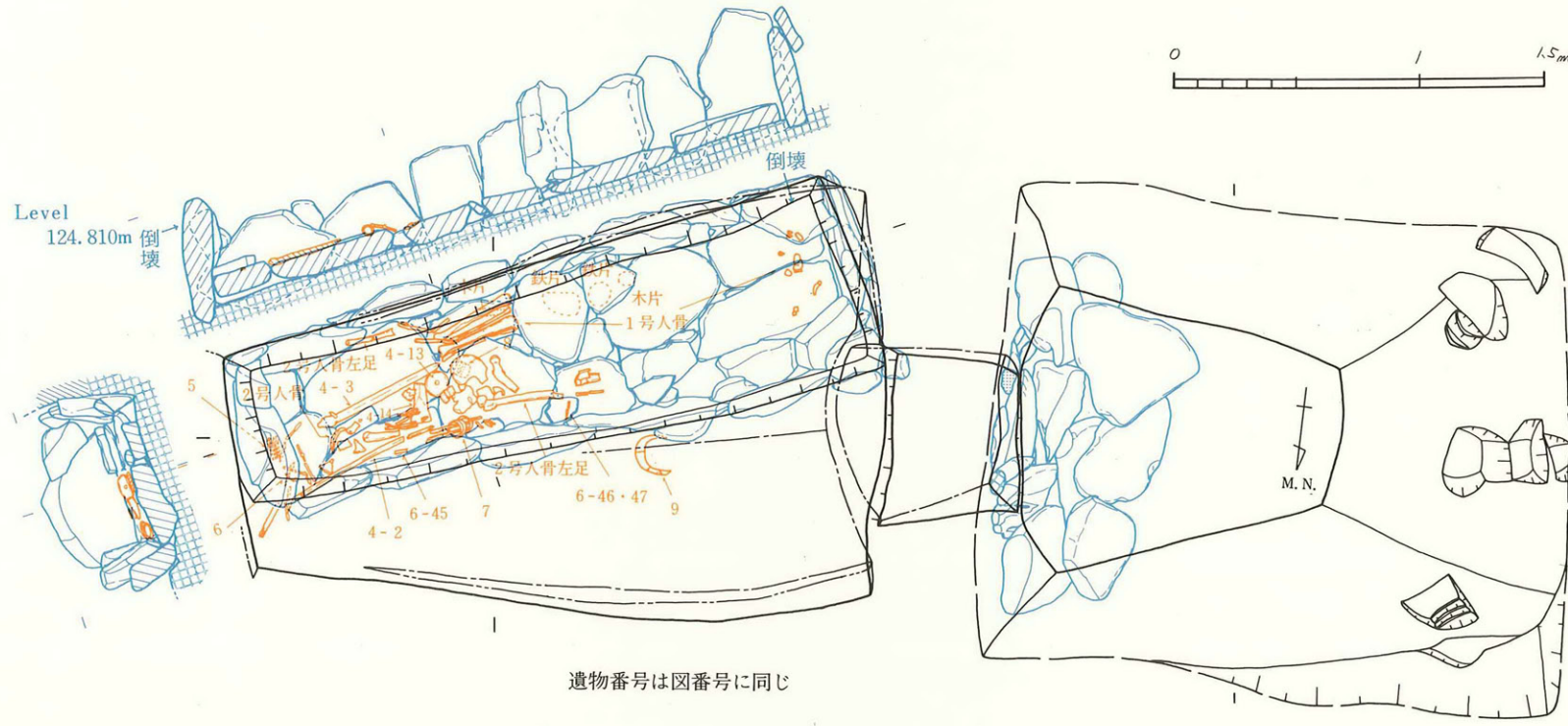
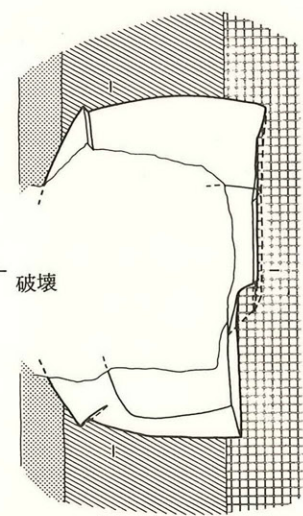
熟年男性人骨である。調査に赴いた時既に頭骨から大腿骨までは取りあげられていた。しかし、脛骨や腓骨などは割合乱れのない状態で土砂の下で発見された。出土状態は残されていた歯や脛骨等から、頭部を石棺状施設の西側中央に置き、下肢は南壁寄りに置かれていた様である。上半身や腰については不明である。なお、この1号人骨についての詳細は人骨編を参照されたい。

直刀（第4図1）

既に取り上げられていたものである。当事者の話しでは、刀子とともに南壁側にあったと



- 黒色シルト質土層
- 黄褐色砂質土層 (アカホヤ層)
- 暗褐色シルト質土層 (焼礫をわずかに混ざる。固くしまった層)
- 黄褐色砂質土層 (1~5ミリの砂粒)
- 暗茶褐色弱粘質土層 (白色や赤色の砂粒を含む)
- 茶褐色シルト質土層 (固くしまった層)



遺物番号は図番号に同じ

第3図 5号地下式横穴墓遺構実測図

いう。1号人骨の腰があったと思われる付近の南側に鉄片や木片がみられたこと、脛骨の下に縦長にまとまって木片が見られたことなどから、直刀はほぼこの位置にあったものと思われる。しかし、脛骨は土砂の中に埋まっており、脛骨もその下の木片にもあまり乱れがみられなかったということは、直刀あるいは刀子は脛骨が土砂に埋まる以前に一度動かされている可能性があると考えられる。

直刀は平造り、角背、片関である。全長116.7cm、茎長28.7cmを計る。完形であるが、刃部は欠損が多く錆化著しい。表面の剥離は相当すすんでいる。鞘口での背幅は1.1cm、関部は深くすき取られ、茎の先端は細く尖り気味になる。把部は把木が遺存しており、背側には糸巻きがみられる。目釘孔と思われるものが2カ所あり、把元側のは把木の繊維方向と異なる木片が付着、裏面には突起もみられる。把头側のは裏面に孔がみられる。両者の間隔は、孔中央で約6.8cmを計る。なお、刀身には木鞘の痕跡がみられる。

刀子（第4図5～7）

これも既に取り上げられており、出土位置は前述のとおりである。

5は平造り、角背である。把木のため関部は不明であるが、両関と思われる。全長15.6cm、茎長約5.4cm、身部中央での背幅約0.4cmを計る。茎は繊維質の樹皮状のもので巻き把木に挿入している。目釘孔はみられない。この刀子は背側からみるとやや曲がっている。

6は平造り、角背であるが把木のため関部及び茎は不明である。現存長15.0cm、鞘口での背幅0.4cmを計る。切先は欠損している。茎長は不明。把には把木が残り把縁に締金具がみられる。把木には枝材と思われるものを使用している。目釘孔はみられない。なお、刀身には木鞘の痕跡がみられる。

7は平造り、角背、両関と思われる。前2者に比べやや大型である。刀身先端を欠き、現存長19.6cm、茎長約6.4cm、刀身中央での背幅0.4cmを計る。茎は鹿角製装具に挿入され目釘孔が1カ所みられる。

銅鏡（第4図4）

銅鏡は2面あるが、これは既に取りあげられていたものである。出土位置は不明であるが、少なくとも西側にあったということはいえよう。

4は蕨手文鏡と思われる。直径8.7cm、厚さ0.1cmを計る。取り上げられた際にふたつに打ち割られているが、完形である。主文圏帯に9個の乳を中心に3～5本の蕨手状文様がみられる。外区は布が付着し緑青やカルシウム分と思われる物質もみられ、人骨の近くにあったことがうかがえる。布目は細かく2.5mm²あたり10×10本の糸で織られ、平織りである。鏡

面には短く細い繊維痕が規則的に帯状にみられる。

鉄鏃（第4図8）

取り上げられていたもので、玄室入口側（西側）にあった様である。この種の鉄鏃は計4本出土しているが、残り3本は土砂の中から出土したもので出土位置は明らかでない。しかし、2号人骨側（東側）からは平根鏃は出土していない。

8は、平根無茎鏃である。各部計測値は表のとおりである。全体に銹化著しいが、鏃身をはさんだ矢柄先端がみられる。鏃身は銹のためやや膨らんでいるが本来は平坦であると思われる。先を丸く尖らせた竹ではさみ、基部を糸巻きしている様である。基部の糸巻き箇所は、同図9・11にみられる様に短く薄い茎が作り出されその効果を高めている。身部に穿孔はみられない。

鉄鏃（第4図9～11）

調査中土砂の中から出土したもので前述のとおり原位置は不明であるが、上記の玄室入口側出土鉄鏃と同類である。各計測値は表に示す。

表1 鉄鏃（平根鏃）計測表

単位：cm

番号	全長	最大幅	矢柄の残存	備考
第4図8	7.6	欠損	竹糸巻き	狭鏃鏃長三角形
9	7.8	3.7	竹	同上 短い茎あり、完形
10	7.5	3.2	竹糸巻き	同上 ほぼ完形
11	6.0	欠損	竹	広鏃鏃長三角形 短い茎あり

9・11には短く不規格な薄い茎がみられる。10は遺存状態の良い部分があり薄く鋭い刃部と尖った矢柄の先端がみられる。また、11は他の3例に比べ幅広で鋭さが無い様である。

鉄金具付木片（第4図12）

土砂の中から出土したもので原位置は不明である。これは、野尻町大萩36号地下式横穴墓から同類のものが出土し、茂山 護氏によって鉄飾り弓の可能性を指摘されたものである。

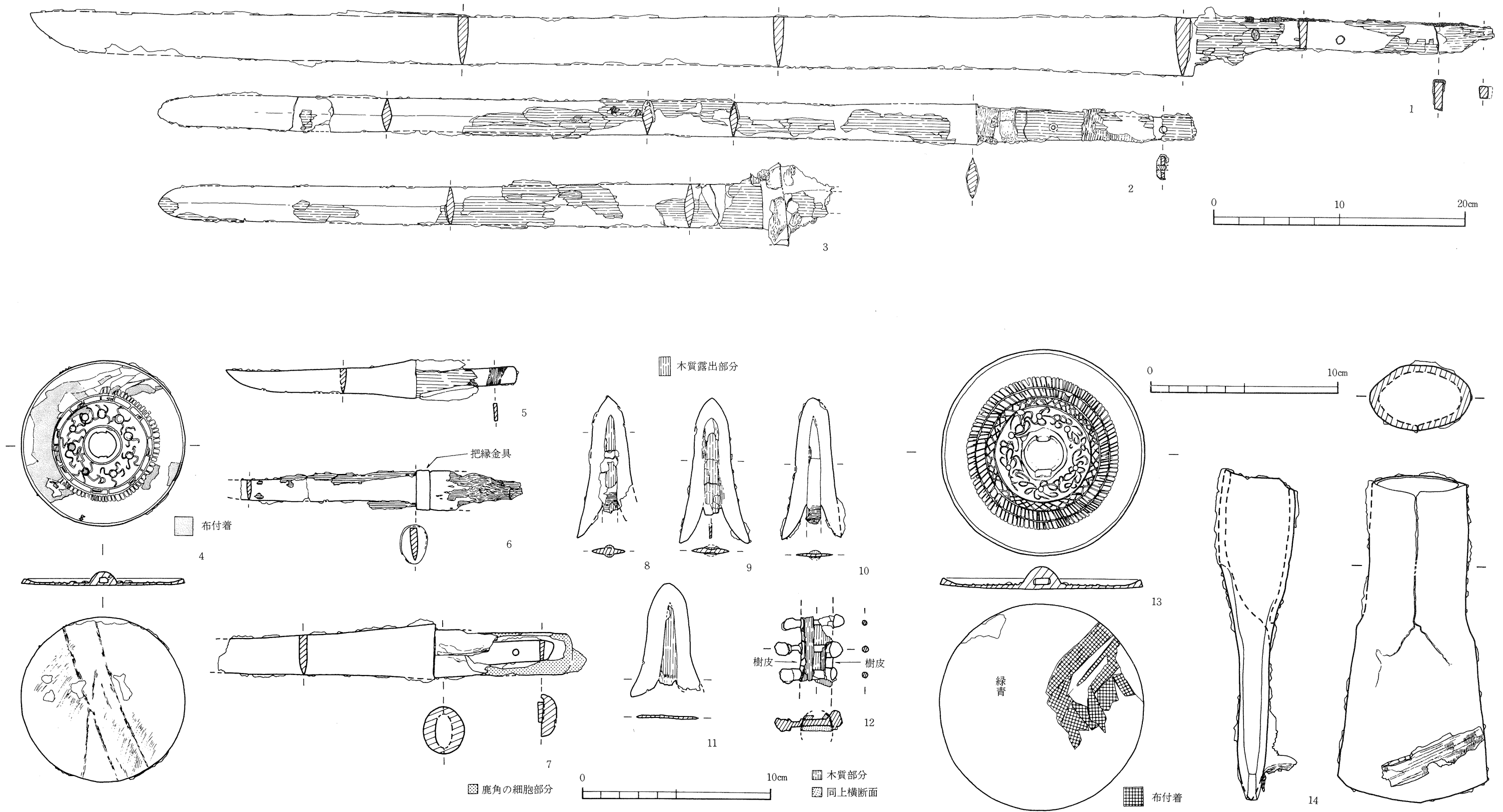
断面長円形の木材の短軸端部に近いと思われる位置に3本の鉄製の鉄が打ち込まれ、木質部表面には樹皮と思われるものがみられる。鉄は銹化著しいが断面は直径約3ミリ程の円形である。元来何本打ち込まれていたかは不明である。大萩の例同様に鉄は片側のみ木片から突出している。

参考文献 茂山 護「大萩地下式横穴36号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書 第22集』宮崎県教育委員会 1980

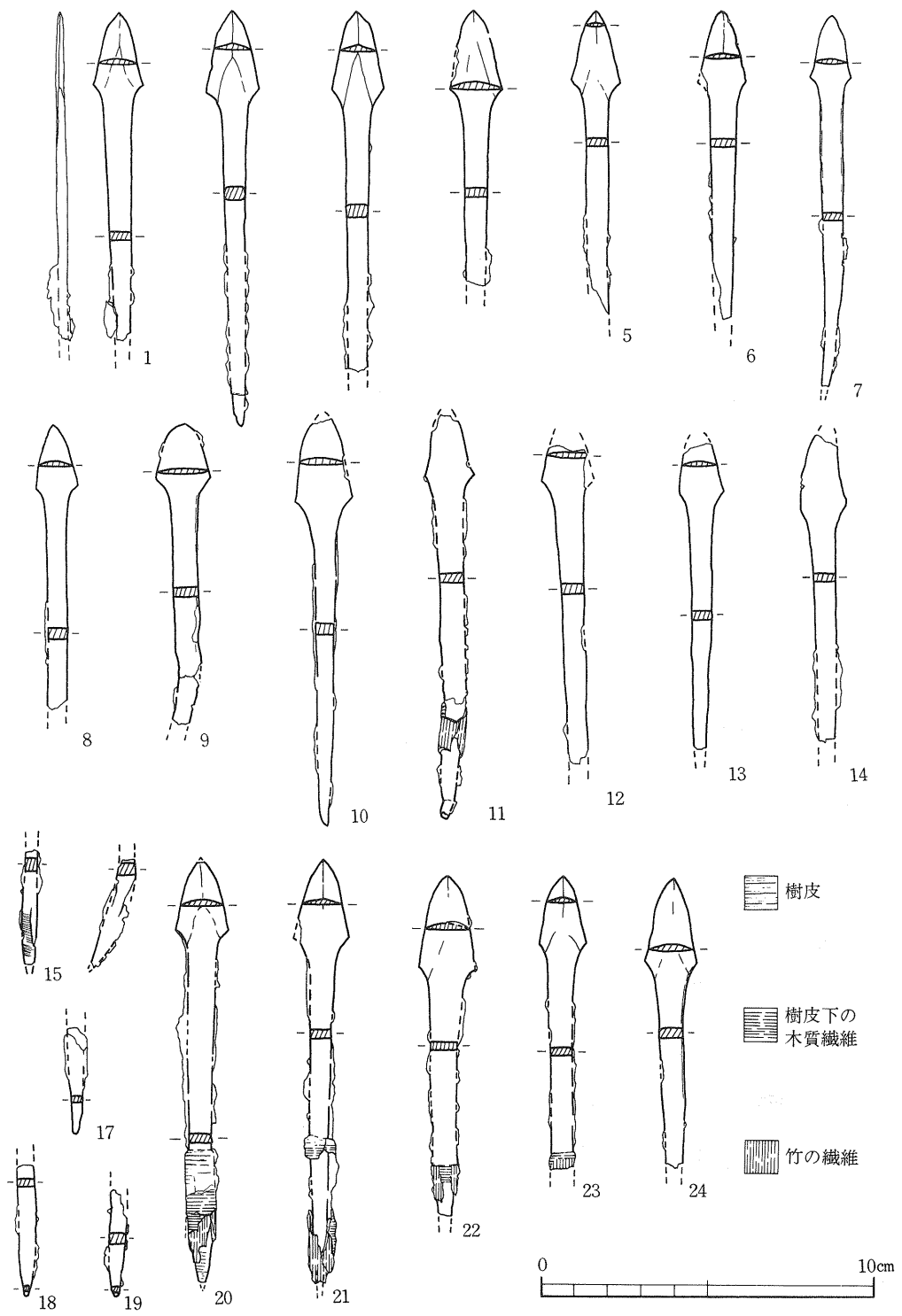
骨製品（第6図48）

これも土砂の中から出土したもので原位置は不明である。この種のもは、土砂の除去後2号人骨周辺から3点みつかったため、形態については後にも述べる。

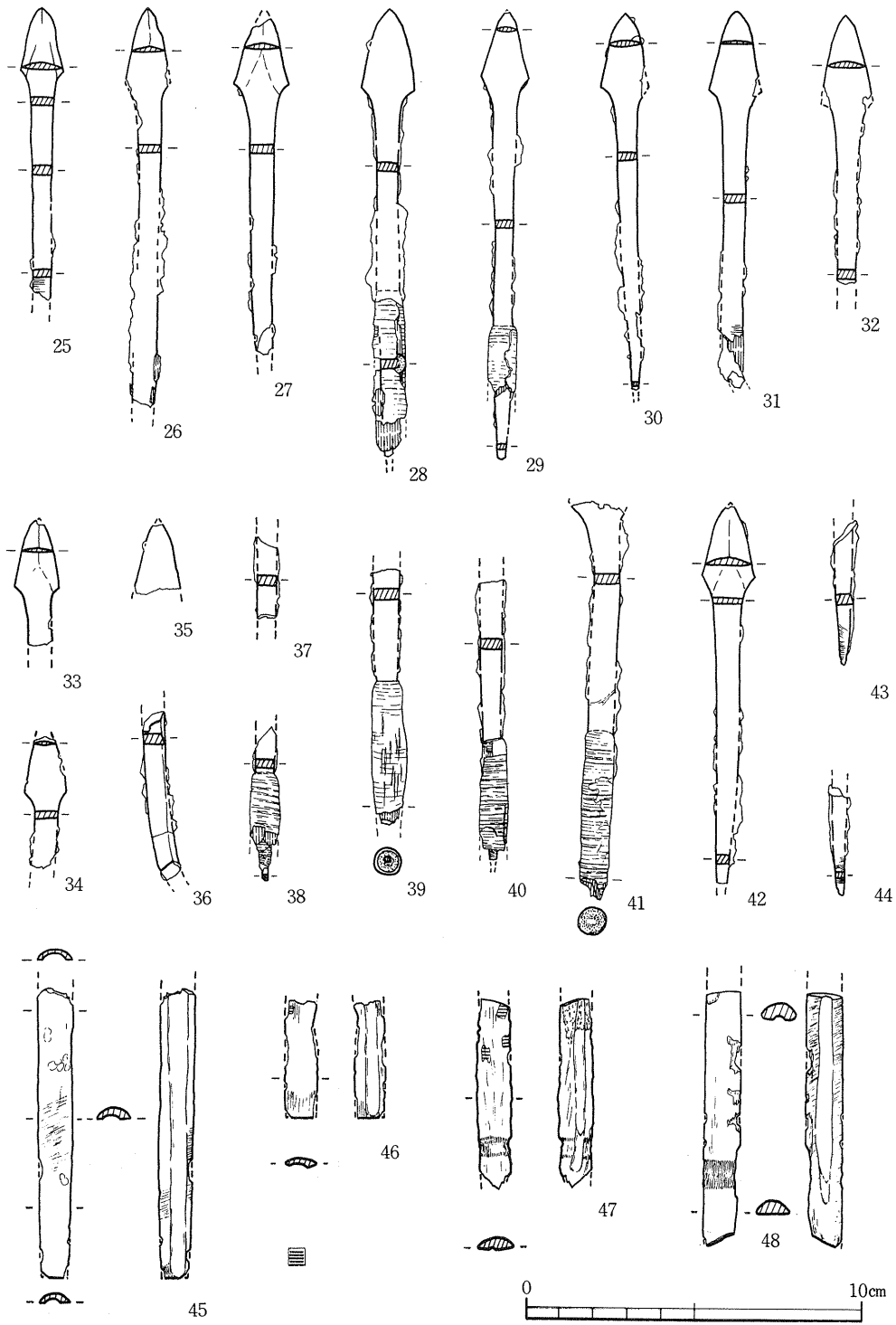
48は現存長7.5cm、幅約1.0cmを計る。端部は斜めに成形され端部近くの表面にきつく締め



第4図 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(1)



第5図 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(2)



第6图 5号地下式横穴墓出土遺物実測图(3)

た様な組織の変形した箇所がみられる。この部分から端部までは青緑色に変色し、銅製品の緑青の様な色を呈している。裏面には髓の部分と思われる凹面があり、その両側の面は斜方向の細い筋がみられる。

さて、次から述べるのは崩壊した土砂の下から出土したものである。土砂を除去する段階で天井部や側壁と思われる丹塗りの大きな土塊もみられたことから、埋没していた遺物や人骨のうち重量のあるもの以外で落ちて来た土塊にはじき飛ばされて原位置を保っていないものも一部にあるものと考えられる。

2号人骨（第3図）

壮年女性人骨である。土圧にもよるのであろうが損傷が著しかった。1号人骨とは対称の位置にあり、頭部を奥壁側（東側）北寄りに、体部を1号人骨の北側に置き、全体的に石棺状施設内北壁寄りの位置にある。土砂を除去したところで頭骨から大腿骨までは確認されたが、脛骨から足先までは既に取り上げられていた人骨の中にまぎれ込んでいたのか、この時には確認していない。詳細は人骨編を参照されたい。

この2号人骨は骨盤から大腿骨のあたりにやや乱れがみられるので少々触れておく。人骨自体はあおむけに安置されていたものと思われるが、左大腿骨は右の方へ動いており、右大腿骨の上部はその南側に動き、左脛骨の一部が1号人骨の足先に動いている。また、このほか骨盤も南側へ動いていると思われる。前腕骨には貝輪が着装されていた。

鉄鏃（第5図～第6図）

5号地下式横穴墓出土の2種類の鉄鏃のうち尖根鏃の方である。2号人骨の頭上奥壁際にまとまって出土している。鏃身方向はほぼ南向きであったと思われるが、半数は奥壁の内傾の際敷石と奥壁（立石）との間に落ちた様で原位置をとどめていない。

この位置に出土した鉄鏃は全て尖根篋被片刃造五角形式鏃とでもいえるものである。各部計測値は表のとおりである。身部形態は1～3にみられる様に断面三角形の片刃であり片面に鑄がみられる。先端は3の様にわずかに三角形をなし、全体としては長三角形気味の五角形である。また、2・10・20・29にみられる様に篋被ぎと茎との境には棘状突起や段などはなく矢柄の挿入位置が茎となっている。この矢柄の挿入に際しては、38や40にみられる様に茎部分に植物質の繊維を斜めや横巻きにし矢竹をぬけにくくしている様である。口巻には樹皮を巻く。なお、これらの鉄鏃は錆化著しいものも多く15～19、36～40、43～44等外の鉄鏃に接合する可能性もあるが直接接合できるものはなかった。

表2 鉄鏃(尖根鏃)計測表

単位:cm

番号	現存長	身長	身幅	矢柄の残存	備考	番号	現存長	身長	身幅	矢柄の残存	備考
1	9.8	2.2	1.5	—	—	23	8.8	2.0	1.4	樹皮巻竹	—
2	12.4	2.5	1.6	—	完形	24	8.7	2.6	1.6	—	—
3	10.8	2.4	1.6	痕跡のみ	—	25	8.5	1.9	1.3	横方向の繊維痕	—
4	8.2	2.3	1.6	—	—	26	11.7	(約2.2)	欠損	側面に竹	—
5	9.1	2.2	1.5	—	—	27	9.8	先端欠損	1.6	—	—
6	9.3	2.2	欠損	—	—	28	13.1	2.4	1.6	樹皮巻竹	—
7	11.2	1.9	1.2	—	茎端部欠損 ほぼ完形	29	13.1	先端欠損 (約2.0)	1.4	樹皮巻(厚約1.7ミリ)竹	ほぼ完形
8	8.5	1.9	1.3	—	—	30	11.1	(約2.2)	欠損	—	—
9	9.0	鏽のため不明 (1.6?)	1.6	—	身部形状がやや異なる	31	11.0	2.4	欠損	竹	—
10	12.2	先端欠損	1.8	側面に糸の痕跡	茎は完形	32	7.9	(約2.6)	欠損	—	—
11	12.1	先端欠損	1.5	樹皮巻竹	—	33	3.7	先端欠損 (約2.1)	1.3	—	—
12	9.5	先端欠損	欠損	—	—	34	3.8	先端欠損	1.2	—	—
13	9.1	先端欠損	1.4	—	—	35	2.0	—	—	—	—
14	9.2	先端欠損	鏽のため不明	—	—	36	4.9	—	—	—	湾曲
15	3.4	—	—	横方向の繊維痕	—	37	2.3	—	—	—	—
16	3.4	—	—	—	湾曲	38	4.6	—	—	樹皮巻、竹繊維巻	茎端部完形
17	3.2	—	—	—	茎端部完形	39	7.6	—	—	樹皮巻竹	—
18	3.9	—	—	横方向の繊維痕	茎端部完形	40	8.2	—	—	樹皮巻、竹繊維巻	—
19	3.2	—	—	—	茎端部完形	41	11.7	—	—	樹皮巻竹	—
20	12.7	先端欠損 (約2.2)	1.6	樹皮巻、竹、横方向の繊維痕	ほぼ完形	42	11.1	先端欠損 (約2.2)	1.7	—	—
21	12.7	2.4	欠損	樹皮巻竹	—	43	4.2	—	—	斜方向の繊維痕	—
22	10.2	2.8	1.8	竹、横方向の繊維痕	—	44	3.2	—	—	横方向の繊維痕	—

骨製品(第6図45~47)

先に土砂の中から出土したとしてあげた48と同類のものである。45は2号人骨の胸部右側(北側)の鉄剣と北壁(立石)との間の敷石上に出土している。46~47は2号人骨左大腿骨の下部と北壁との間的小敷石上に折れた様な状態で出土している。これらは前述の大萩36号地下式横穴墓や同大萩3号地下式横穴墓・都城市牧原地下式横穴墓等で出土している骨鏃に断面形等類似しているが、形態的にやや異なる様である。45・46は端部が水平に成形してあり、47や48など締めた様な組織の変形のみられるものは端部が斜方向に成形してある。46・47は

直接接合できなかったものの同位置から出土し幅もほぼ同じであることから同一個体の別部分とみるならば、この種の骨製品はきつく締めた様な痕跡のある方の端部を斜めに、一方の端部を水平に成形し、上から下までほぼ同じ幅を持ったヘラ(篋)状製品で斜め端部の方が厚味を持つものである。その点大萩や牧原出土のものが明らかに鏃の形状を呈していたのと異なっている。

45は現存長8.5cm、欠損部での幅約1.0cm、端部での幅0.8cmを計る。表面には斜方向の無数の擦痕と丹が少量付着しているのがみられる。側面と形成端部に損傷がみられる。裏面には髓部分と思われる凹面がみられ、その両側の平滑面には斜方向の細い筋がみられる。

46は現存長3.5cm、幅約1.0cmを計る。表面には一部丹がみられる。側面の損傷が著しい様である。47と同一個体か。

47は現存長5.6cm、幅約1.0cmを計る。表面と裏面にきつく締めた様な組織の変形箇所がみられる。48の変形幅0.8cmに比べ幅0.6cmと狭く、47・48を組み合わせ使用した可能性は薄い。47の端部は斜めの成形がわずかに認められる。表面には一部に丹が付着し、裏面には46同様凹面がみられる。

鉄剣（第4図2～3）

2号人骨を挟む様に両側に1振ずつ出土している。2は2号人骨の右側（北側）に、3は左側（南側）にともに切先を足元の方へ向けて置かれていた。3は割合原位置を保っていると思われるが2は奥壁と北側壁の間に挟まれて折れた状態であった。玄室奥壁崩壊に伴うものと思われ、本来は石棺状施設奥壁に把部がもたせかけてあったものであろう。

2は全長82.8cm、茎長17.2cmを計る。全体に錆化著しいが鑄造りである。把・鞘ともに木製で把木の上には糸巻きがみられる。両関のあたりに鹿角製把縁装具と思われるものの痕跡が残っている。茎には目釘孔が2カ所あり目釘の鉄片がさし込まれたまま遺存する。目釘孔中央部間約8.8cmを計る。

3は現存長54.0cmを計る。錆化著しいが鑄造りである。茎は途中で欠損している。把・鞘ともに木製で鹿角製と思われる鞘口装具、把縁装具の痕跡がみられる。

鉄斧（第4図14）

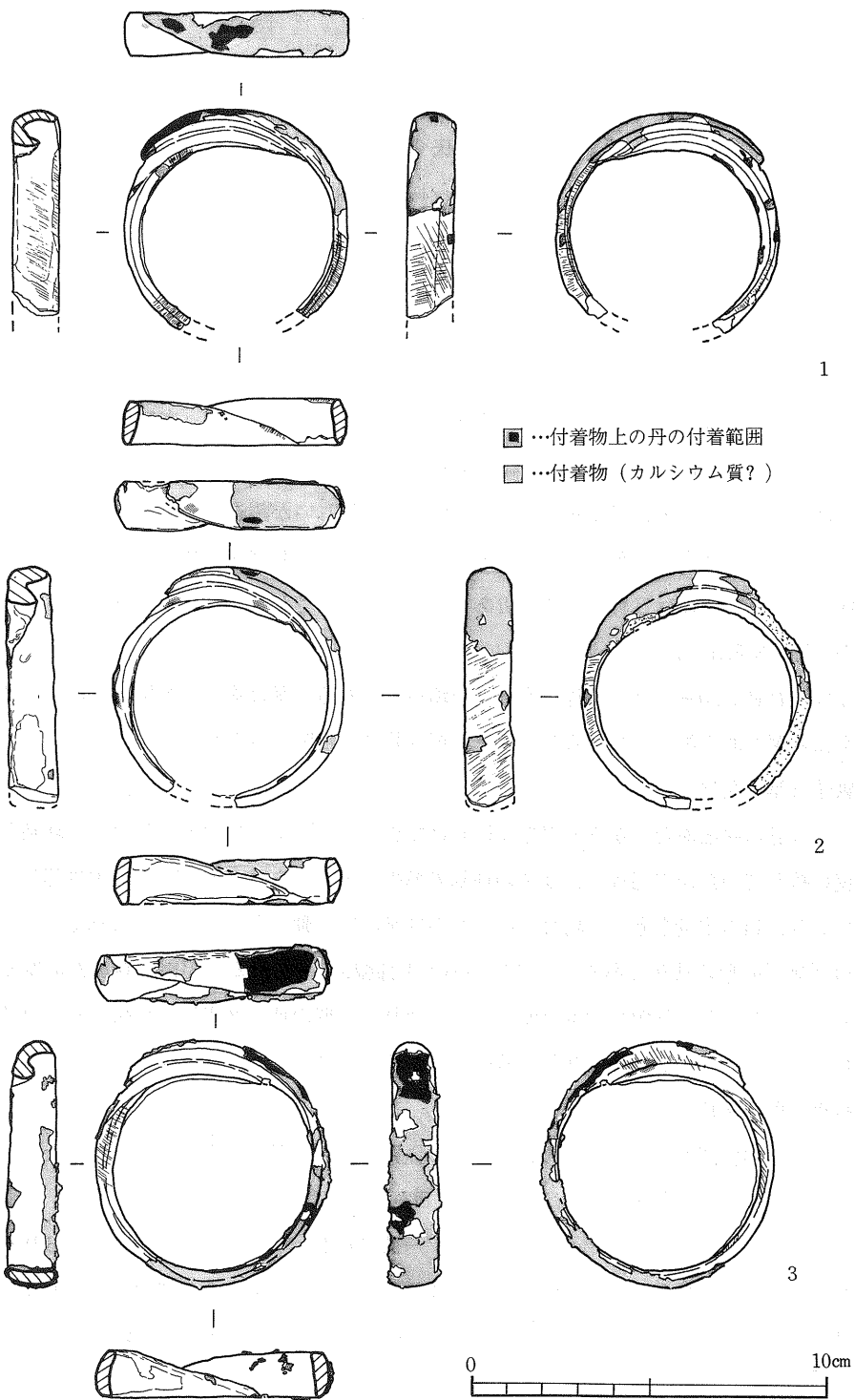
2号人骨の腹部あたりから刃部を北に向けて出土している。柄の挿入部は3の鉄剣と13の銅鏡に接していたが刃部近くには2の鉄剣の鞘の一部とみられる樹皮巻きの木質部分が付着しており、14の重量を考えた場合やはり2の鉄剣の方が動いたものと考えられる。

14は無肩撥形の鉄斧である。全長17.6cm、刃部幅8.0cmを計る。刃部は錆のため厚く膨らんでいるが本来それ程鋭利でもなかったと思われる。柄の挿入部表面に平織り布の痕跡がみられる。この袋部の形状等手斧的な着柄方法が考えられる。

銅鏡（第4図13）

2号人骨の腹部あたりから3の鉄剣と14の鉄斧に接して背面を上にして出土した。

13は4同様蕨手文鏡と思われる。直径10.8cm、厚さ0.2cmを計り、完形である。背面の状態はすこぶる良好で緑青も殆どみられない。一部に丹が付着する。主文圏帯には6個の乳を中心に5～6本の蕨手状の文様がみられ、枝分かれするものもある。鈕座はみられない。鏡面は緑青が覆い一部に布が付着している。2.5mm²あたり4×5本の糸で織られる平織り布である。



第7図 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(4)

貝輪 (第7図)

2号人骨の右前腕骨に装着されていたものである。3個重なっていたが下から順に人骨に接する部分の傷みが激しい。最上部のは完形であった。各計測値は表のとおりである。

表3 貝輪計測表

単位:cm

番号	外径	内径	高さ	備考
1	6.3	5.4	1.3	丹附着
2	6.4	5.5	1.3	丹附着
3	6.5	5.6	1.3	丹附着 完形

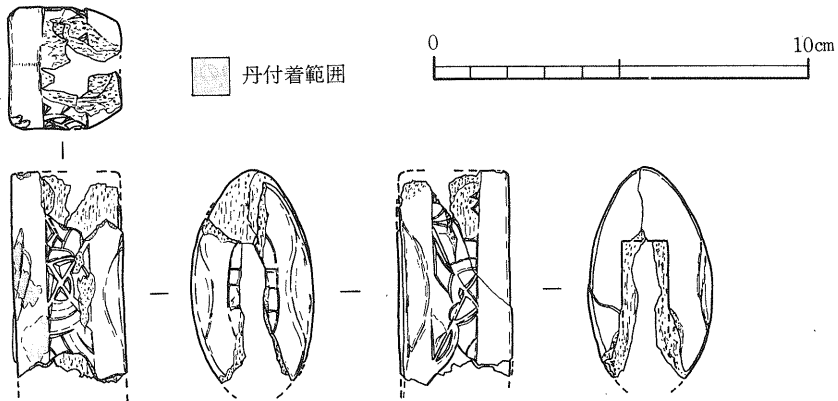
1～3はイモガイ製横型貝輪である。いずれも表面には灰色の付着物(カルシウム分)がみられ面取りの研磨痕もある。また一部に丹も付着する。貝輪の出土例は本例で19例目になる。

参考文献 面高哲郎 「貝輪を出土する地下式横穴(表) 菓子野地下式横穴第57-4号・5号発掘調査」『都城市文化財調査報告書 第3集』都城市教育委員会 1983

鞆尾装具 (第8図)

2号人骨骨盤下から出土したもので鹿角製と思われる。2号人骨は骨盤付近が乱れていたことから土塊の落下等によって動いた骨盤がぬけ落ちていた鞆尾装具の上に乗ってしまったとも考えられる。

この鞆尾装具の形状は鞆木側が長円形で短辺約0.3cmの長方形になるとと思われる柄穴がくりぬかれ鞆尾側には長円形状の線刻とその中に横方向の線刻がみられる。側面には直弧文がみられ一部に丹が付着している。出土状態からは第4図3の鉄剣の鞆尾に最も近い位置にある。



第8図 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(5)

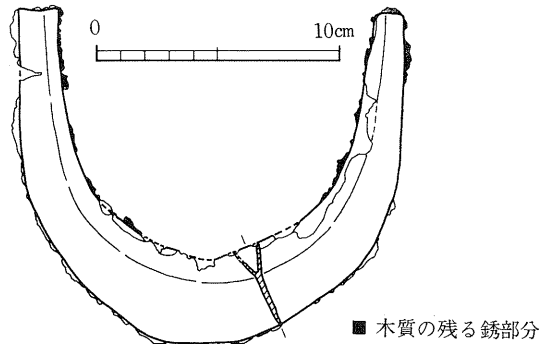
上記に述べた以外に土砂の除去後石棺状施設外から鋤(鍬)先と朱玉が出土している。

鋤(鍬)先 (第9図)

床面の中央やや玄門寄りの石棺状施設北壁に接する位置に出土した。2号人骨の足元付近の北側にあたる。刃部は東(奥壁側)へ向けており、4つに折れていたが出土状態に乱れはみられなかった。竪坑部西壁の足掛けと思われるU字形の掘り込みはこの工具が使用された

と思われ幅がほぼ一致する。

全長13.4cm、幅15.7cm、刃先の身幅約2.5cmを計る。ほぼ完形である。形状はU字形で、内縁をめぐるV字形の木台挿入部は厚さ0.1cm、幅約1.1cm、深さ約1.1cmを計る。木質の錆化したものが若干みられる。刃部中央での身厚は約0.3cmである。



第9図 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(6)

朱玉 (図版7)

玄室床面の北壁際や石棺状施設の石の間から採集した。直径約1.0cm～約2.5cmの不整円形でやや偏平なベンガラ玉である。成分は分析の結果酸化第2鉄であった。

(3) 小結

5号地下式横穴墓は地下式横穴墓の構造としては古式のタイプとされる長方形切妻妻入り単体葬タイプに類似する(長)台形切妻妻入りで本来単体葬を意図したと思われる箱式石棺状の施設を持つものであった。ところが羨門部閉塞状況や埋土の状況、さらに石棺状施設内の埋葬人骨の状況は明らかに追葬の痕跡を残すものであり、1号・2号それぞれの人骨に伴なう遺物はその年代決定の手がかりになると思われたのであるが調査前に既に奥壁や天井の崩壊に伴なう土塊の落下等によって2号人骨とその周辺の遺物の原位置が損なわれ、さらに1号人骨とその周辺の遺物が持ち出されて原位置を失うなどその副葬関係はあいまいなものになっている。

ここで1号人骨・2号人骨それぞれの埋葬の順序と副葬遺物について考えてみたい。人骨の出土状態をみると次の事がいえよう。1号人骨の位置は崩壊した土砂の下から出土した脚下半部と取り残された歯などの位置から頭部は石棺状施設の西側中央にあるにもかかわらず下半身は南壁寄りにある。2号人骨は腰～脚部の乱れがみられるものの頭部～腹部まではほぼ埋葬当時の様子のまま土砂に埋没しているものと考えられ、頭部が石棺状施設の東側北壁寄りにあるのを始めとして全体的に北壁寄りに位置している。遺物の出土状態からみると、1号人骨に伴うと考えられる原位置のわかる遺物は殆どないが、南壁寄りに東西方向に残されていた木片や鉄片からはこの位置に遺物があつたことがわかる。地下式横穴墓出土の刀剣類は多くの場合棚状施設の上か人骨の脇に置かれるためこの位置には1号人骨とともに取り上げられていた直刀がおさめられていた可能性が高い。1号人骨の脚下半部はこの木片の上

に置かれその方向は人骨が伸展葬だとすると鉄片や木片の上に体部がのってしまうことになる。

上記のことから次の様に考えられると思う。まず1号人骨が石棺状施設中央に頭部を西にしてその右脇（南壁側）に直刀を置き埋葬される。その後2号人骨を埋葬するに際して1号人骨の下半身を（あるいは上半身も）南壁際に寄せて間をあけ、2号人骨自体はやや北壁寄りに伸展葬される。その際その頭上の鉄鏃もやはりやや北壁寄りに置かれ体部の両脇には鉄剣を、腹部には銅鏡と鉄斧を置く。このような順序で埋葬されたものと思われる。

また、それぞれの人骨に伴うと思われる遺物については、1号人骨と一緒に取り上げられた直刀1、刀子3、銅鏡1、西側から取り上げられ土砂の中からも出土しながら2号人骨側にみられなかった平根鏃4を伴うと思われる。2号人骨は頭上の尖根鏃32（鏃身数）、両脇の鉄剣2、腹部の銅鏡1、鉄斧1、前腕骨の貝輪3、骨盤下の剣鞘尾装具などを伴うと考えられる。そのほかに2号人骨の右脇（北壁際）に出土した骨製品4、そしてこれを骨鏃の変形とみるかかんざしの様なものとみるかによって飾り弓の残欠1もこの2号人骨に伴うものとなってくるだろうと思う。棺外に出土した鋤（鍬）先は竪坑部の足掛け用と思われるU字形のくぼみの幅とほぼ一致する。このくぼみは西壁上部に集中し下部にはみられない。このくぼみを利用して竪坑から出ようとした場合、竪坑床面からでは第一歩目が高すぎるが閉塞石が据えられていた黒色シルト質土の攪乱層上面からだとくぼみは利用しやすい高さで間隔になる。つまりこのくぼみは、追葬の際に掘り残された初葬の際の埋土上面から足掛け用として掘りくぼめられ利用されたものであろう。従ってこれに使用されたと思われる鋤（鍬）先も2号人骨に伴うものと思われる。

今回5号地下式横穴墓から出土した遺物のうち2号人骨の装着していたイモガイ製横型貝輪は宮崎平野地区の（長）台形切妻入りタイプの地下式横穴墓からの出土例としては初めてのものである。また出土したへら状の骨製品も初出のものと思われる。その使用法等今後の類例に待ちたい。

5号地下式横穴墓と構造的に類似する長方形妻入りの地下式横穴墓の例をみると、国富町六野原30号地下式横穴墓は屍床が玄室中央にあり天井はドーム形を呈するが竪坑上部出土の須恵器から6世紀中頃に比定されており、綾町内屋敷第56-1号地下式横穴墓は屍床が玄室西壁側に片寄り天井は屋根形を呈するが構造や遺物から5世紀末ないし6世紀初頭に比定されている。また、長方形切妻平入りタイプの例である国富町高田原第56-1号地下式横穴墓は屍床はみられないが人骨や直刀は長軸方向に安置してありその構造や出土須恵器等から5

世紀末ないし6世紀初頭に位置づけられている。これらの様な例を考慮した場合、5号地下式横穴墓は(長)台形切妻妻入りの玄室構造、石棺状施設の存在、出土遺物などから追葬も含めて5世紀後半～末までの時期におさまるのではないかと思われる。

最後に、後載されている「人骨編」によると1号人骨頭部にも「朱」が確認されており、これは玄室内や石棺状施設内の塗「朱」とあわせて考えた場合、1号人骨の初葬を傍証するものといえよう。

なお、末筆ながら鹿角製刀装具について御教示いただきました天理大学附属天理参考館置田雅昭氏ならびに「朱玉」について御教示いただきました東京芸術大学院生戸高真知子女史に、また人骨について玉稿をいただきました長崎大学医学部解剖学第2教室助教授松下孝幸氏はじめ諸先生方に深く感謝いたします。

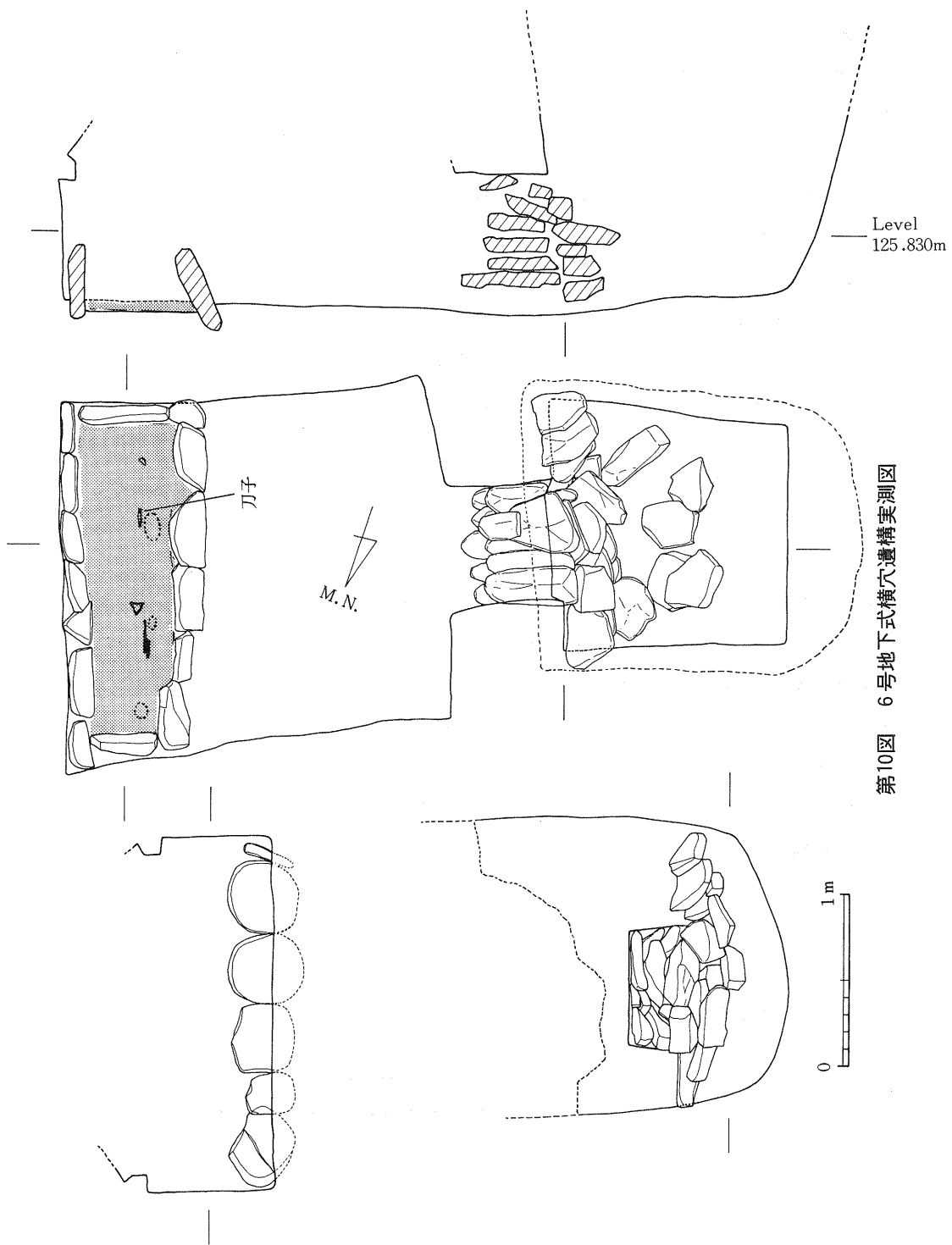
- 参考文献 面高哲郎 「内屋敷地下式横穴発掘調査」 『宮崎県文化財調査報告書 第24集』 宮崎県教育委員会 1981
- 国富町教育委員会 『国富町文化財調査資料 第1集』 1980
- 長津宗重・茂山 護 「六野原地下式横穴30号・31号調査報告」 (下同)
- 面高哲郎・北郷泰道・菅付和樹 「高田原地下式横穴発掘調査」 『国富町文化財調査資料 第2集』 国富町教育委員会 1982
- 福尾正彦 「日向中央部における地下式横穴とその社会」 『古文化談叢 第7集』 九州古文化研究会 1980
- 田中 琢 編 「古鏡」 『日本の美術3 No. 178』 至文堂 1981
- 白杵 勲 「古墳時代の鉄刀について」 『日本古代文化研究 創刊号』 古墳文化研究会 1984
- 石井昌国 「出土刀」 『新版考古学講座 7』 雄山閣 1970

2. 6号地下式横穴

(1) 遺構

6号(第10図)は、今回発見された6基の地下式横穴のうち隣接の8号と共に農道に近い北側に位置していた。また、南側へ16mの地点には5号地下式横穴、さらに西側16mの地点には5号地下式横穴、さらに面側12mの地点には5号地下式横穴、さらに西側12mの位置には7号地下式横穴が構築されていた。

発見の端緒は重機による開発のため玄室天井部が陥没したことによる。



第10图 6号地下式横穴遺構実測図

主軸はほぼ東西に方位し、竪壙を西、玄室を東にして構築されていた。竪壙上部の掘りこみ部分の広さは表層がカットされていたため正確な数値は不明であるがおよそ西辺が170cm、南辺が200cmの長方形と推察される。底部の大きさは、西辺が12.5cm、南辺130cm、また、掘り込みの深さはおよそ200cm程である。

羨門は扁平な自然礫（河原石）を利用し、礫の長軸を側壁に平行して6段に積み上げ閉塞しており、基礎となる床面部分は粘質土で硬められていた。羨門の規模は天井の高さ65cm、天井部幅65cm、床面幅70cm、奥行き65cmで玄室に対し直行して構築されていた。

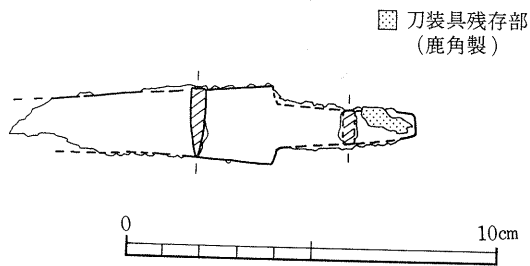
玄室の床面形はほぼ方形であり、天井部は側壁から天井に移る屈折部の切りこみが軒先を表現しており、屋根型に掘削されていたことは間違いないが全面的に落ちこんでいるため、切妻か寄棟であったかは不明である。隣接の地下式横穴から判断して本地下式横穴も黒土シルト層下のアカホヤ層（第2層）から掘削が始まり暗褐色土シルト層（3層）、黄褐色砂質土層（4層）、暗褐色弱粘質土層（5層）を経て第6層の茶褐色シルト質土層を床面としていた。羨道から両袖に開いた玄室床面は奥行き225cm、幅、奥壁寄りで215cm、羨道寄りで200cmで、壁面の高さは4壁共に70cm内外である。

玄室内の最大の特色は、床面奥壁寄りに扁平な自然礫（河原石）を利用した石棺状の屍床が設けられていたことである。屍床の規模は、東端部幅80cm、西端部幅55cm、長さ180cmで長軸の両側には7個と5個の礫が直線状に配石され、短軸側にも同じように礫が2個と1個埋めこまれていた。底石はなく、そのかわり小砂利が6cm～10cmの厚みで一面に敷きつめられていた。人骨はほとんど消失していたが残部の骨片から東部を頭とした伸展葬であったことがわかる。なお、胸部が位置した付近の小砂利中から刀子が一本副葬されていた。

(2) 副葬品

刀子

先端部が欠失している。現長11cm、茎の長さ3.8cm、身幅、関寄りで2cm。茎の全表面には装具の痕跡がみられ、特に茎尻には鹿角の一部が残っている。



第11図 6号地下式横穴出土遺物実測図

3. 7号地下式横穴墓

(1) 遺構 (第12図)

9号地下式横穴墓の北方約19m、6号地下式横穴墓の西方約14mに位置し竪坑部を西に玄室を東に作る。

調査前の状況は、竪坑部北西側が削られ断面で確認できるという状態で玄室は未開口であった。竪坑部検出面はアカホヤ層（Ⅱ層）上面であるが他の地下式横穴墓同様に実際の掘り込み面は黒色シルト質土層（Ⅰ層）中にあるものと考えられる。竪坑部埋土は黒色シルト質土を主体にアカホヤ土塊が混在したものである。

竪坑部は平面形が東西に長い長方形で壁面はほぼ垂直に掘られている。床面は5号地下式横穴墓にもみられた黄褐色砂質土（Ⅳ層）と暗茶褐色弱粘質土（Ⅴ層）以外の土を殆ど含まない混合土で張り床されている。この平坦な張り床は羨道内にまでのびており閉塞石はその上に据えられている。これは、閉塞に用いられた河原石の大きさが羨門の高さに足りないことからそれを補う目的で張られたものと考えられる。

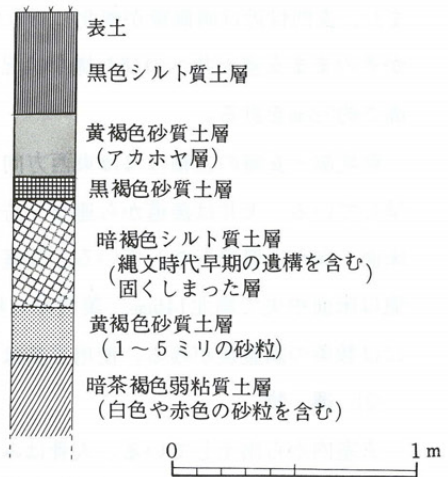
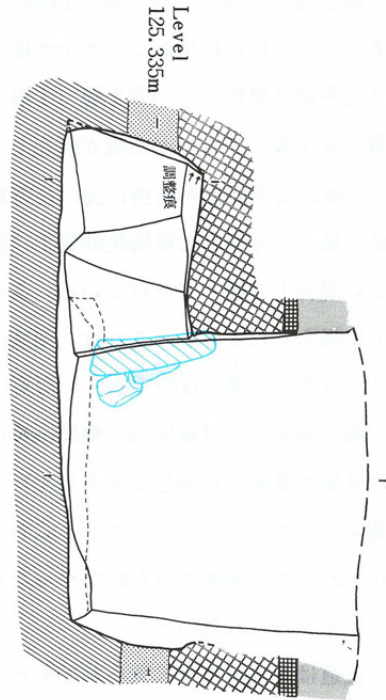
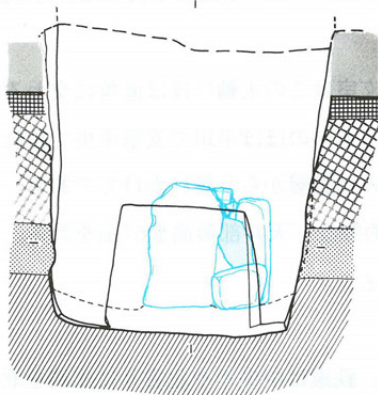
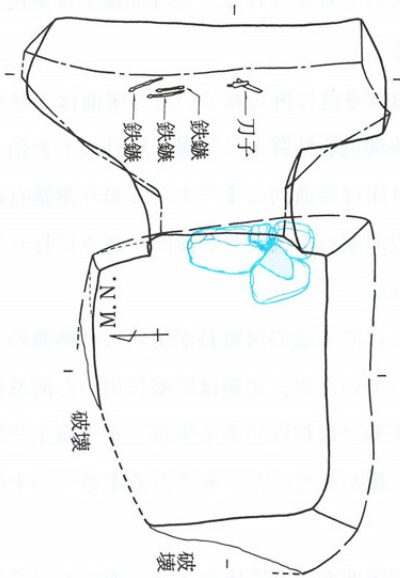
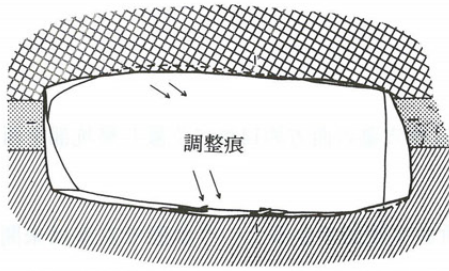
羨門部閉塞には縦50cm、横35cmの河原石を中心に計3個の河原石が用いられ南側のすき間はⅡ層やⅢ層（暗褐色シルト質土）の土塊で塞いでいたが、北側は閉塞に用いた河原石も土塊もみられなかった。しかし、これら閉塞石のまわりは粘性のある黒色シルト質土で固められておりこの閉塞のみられなかった北側も同じく覆われていた。そのため羨道への土砂の流入は殆どみられない。

羨道は竪坑部東壁に掘られており床面は竪坑部床面から玄室床面まで一連のものである。また、玄門付近は両側壁が南北に折れ両袖になるほかは天井には境がみられず、羨道部天井がそのまま玄室天井へのびた様な状況である。各部計測値は床面南壁長40cm、北壁長約30cm、高さ約52cmを計る。

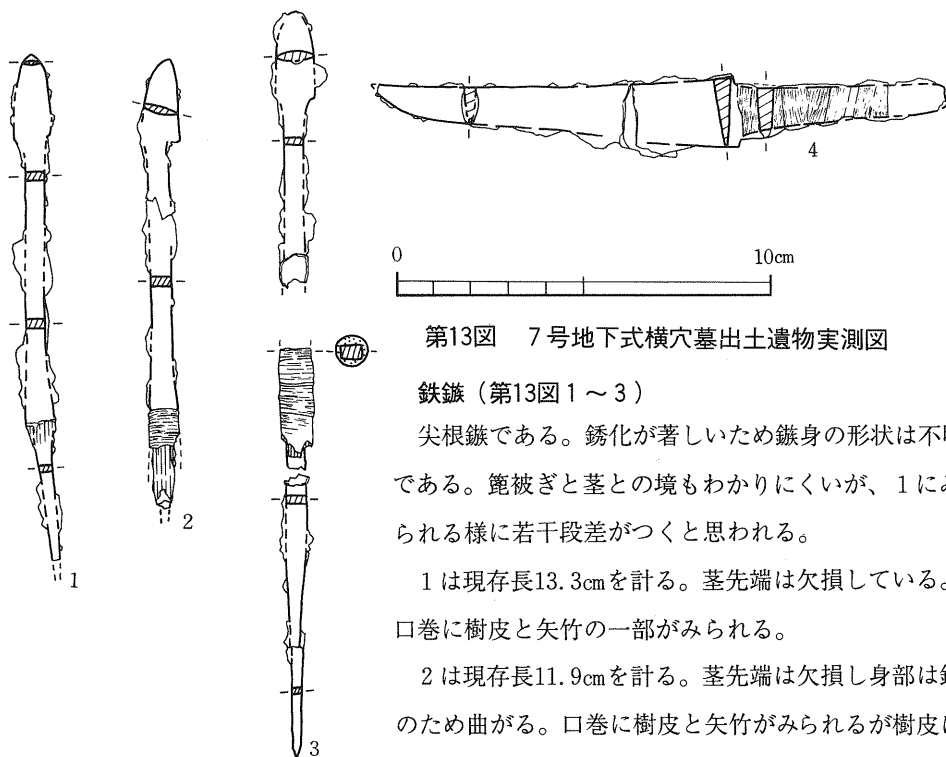
竪坑部～玄室の主軸はほぼ東西方向である。玄室はこの主軸にほぼ直角に交わる長方形を呈している。天井は羨道から連なり若干高くなるもののほぼ平坦で玄室中央で折れそのまま床面へ向かい奥壁をなしている。玄室の掘り込みはⅢ層からⅤ層にかけてである。各部計測値は床面中央で南北146cm、羨門から奥壁まで約92cm、天井部最高値57cmを計る。玄室壁面には数条の調整痕が残る。使用工具は不明である。

(2) 遺物

玄室内から出土している。人骨はみられない。鉄鏃は中央やや北寄りに先端を北へ向けた状態でまとめて置かれており、刀子は切先を南へ向けた状態で玄室中央に出土している。



第2図 7号地下式横穴墓遺構実測図



第13図 7号地下式横穴墓出土遺物実測図

鉄鏃（第13図1～3）

尖根鏃である。銹化が著しいため鏃身の形状は不明である。篋被ぎと茎との境もわかりにくい。1にみられる様に若干段差がつくと思われる。

1は現存長13.3cmを計る。茎先端は欠損している。口卷に樹皮と矢竹の一部がみられる。

2は現存長11.9cmを計る。茎先端は欠損し身部は銹のため曲がる。口卷に樹皮と矢竹がみられるが樹皮は茎の上の篋被ぎ部分にまで巻かれていると思われ、1

の裏面には篋被ぎの下部にも0.5cm程竹の繊維がみられる。

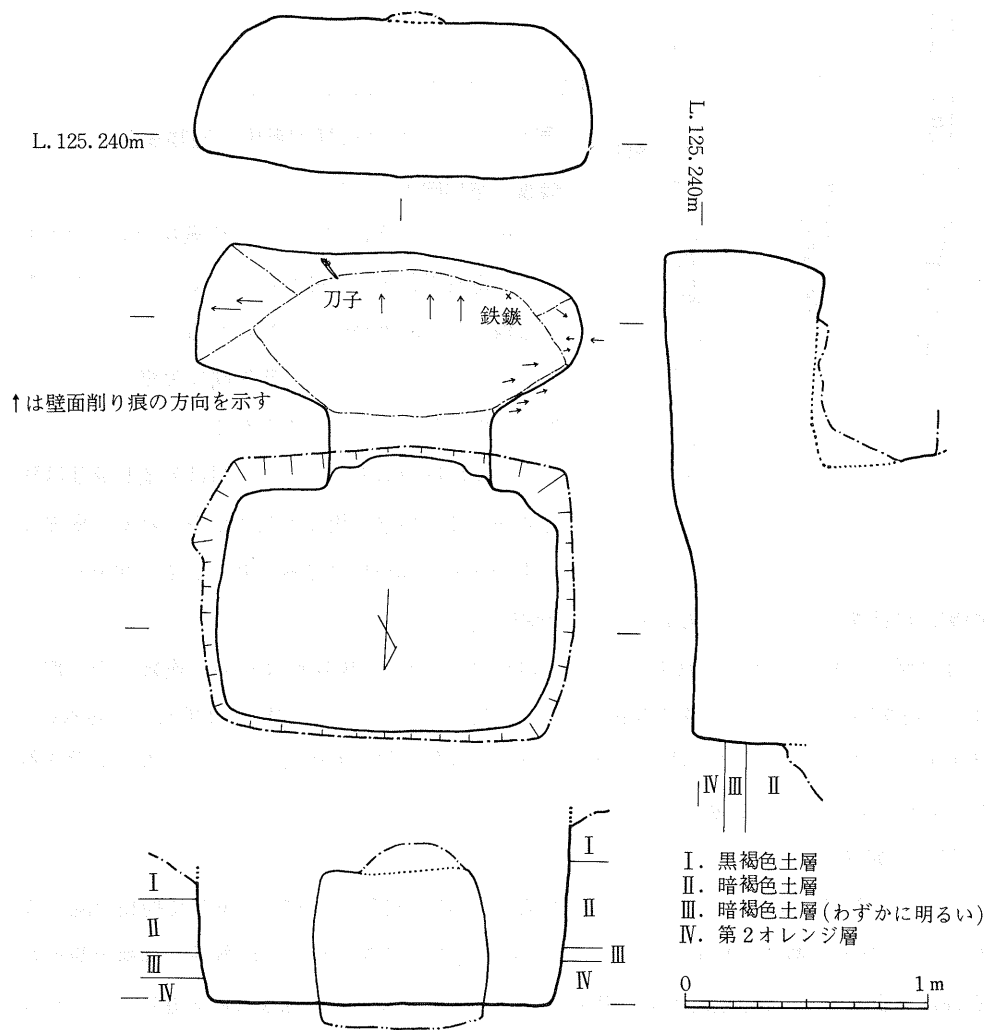
3は銹のため2カ所で折れており直接は接合できない。現存長は身部～篋被ぎの一部7.1cm、口卷のあたり3.2cm、茎7.5cmを計る。篋被ぎは1、2に比べ短く欠損しているものと思われる。また茎は1に比べ長いが出土状態からは他の鏃のものとは考えられない。茎先端は完形で尖る。口卷に樹皮と矢竹の一部がみられる。

刀子（第13図4）

平造り、角背、両関のものである。銹化著しく身部で折れている。現存長約15.1cm、茎長5.5cm、身元背幅約0.45cmを計る。茎には目釘孔などはみられないが植物の繊維と思われる細かな筋跡がみられ、把をつけた際のすべり止めとして樹皮の様なものを巻いたのではないかと思われる。また、切先は若干欠損している。

(3) 小結

7号地下式横穴墓は構造的に簡単な作りであり、閉塞の状況も大まかなものであった。従来の地下式横穴墓の構造形態からみるとこの市の瀬5号～10号地下式横穴墓群の中では長方形平入りの新しいタイプの構造といえよう。しかし、類似構造の8号地下式横穴墓に比べる



第14図 8号地下式横穴墓遺構実測図

と各部の作りは整っており退化が感じられない。また、地形的には豎坑部を傾斜の低い方に玄室を高い方に置くという点、8号地下式横穴墓が6号地下式横穴墓に直交する主軸方向を示すのに比べ他の5～6号・9～10号地下式横穴墓同様有利な占地状況を示している。

この様な状況を考慮した場合、7号地下式横穴墓は構造からは6号地下式横穴墓に後出し8号地下式横穴墓に先行すると思われるが出土遺物からは8号地下式横穴墓との先後関係が決し難く、従ってここでは6世紀代の所産ということにとどめておきたい。

4. 8号地下式横穴墓

8号地下式横穴墓は今回の調査では最も北寄りに位置し、玄室は6号地下式横穴墓の玄室と隣り合わせに構築されていた。

(1) 遺構 (第14図)

8号地下式横穴墓は羨道の入口付近が破壊されて発見されたもので、玄室の天井部も一部落下していた。規模は全長195cmという小型のもので、豎坑部を北に、玄室を南に造られている。豎坑は床面で長さ約100cm、幅約140cmの隅丸長方形をしている。羨道は長は約30cm、幅65cmの短いもので、高さは推定約60cmである。玄室は平入り型長方形プランといえるが、定型化されたものではなく、左方は割に方形に整形されているものの右方は丸く、やや雑に突き掘りしている。天井部はほとんど平らに整形されている。中央部で長径155cm、短径約65cmという規模からみて個人埋葬用であろう。人骨の遺存はなかったが、奥壁寄りに刀子1本、鉄鏃1本を検出することができた。なお、羨道の閉塞石は見当たらなかった。

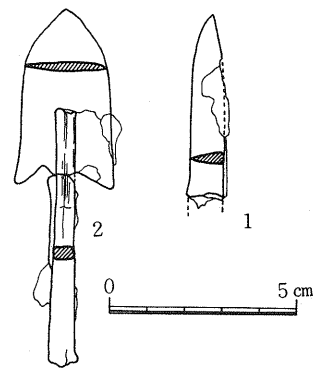
(2) 遺物

刀子 (第15図1)

刀身のみで、柄部を欠く。現長5.0cm、身幅0.9cm、棟幅0.3cmを測る。全体にやや内反りである。

鉄鏃 (第15図2)

無茎のもので、全長9.5cm、鏃身最大長4.7cm、同最大幅2.6cmを測る。鏃身に取り付けた矢柄が錆着し、残っている。広鋒腸抉長三角形式。



第15図 8号地下式横穴墓出土遺物実測図

(3) 小結

この地下式横穴墓のように、単体埋葬のみ可能と思われる小型の地下式横穴墓は妻入り玄

室構造にはなく、すべて平入り玄室プランにある。現在までの県内での調査報告の中では特にこの小型地下式横穴墓に関する論考は見られないが、平入り玄室プランが大勢を占める西諸県地方においては割にまとまった地下式横穴墓の調査が行われており、小型地下式横穴墓（幼小児用墓）を考える上では良好な資料となっている^(注)。この8号は玄室形態からいっても7号とともに幼小児用墓の可能性が高い。幼小児用墓の特徴として人骨の遺存がほとんどないこと、副葬品が極めて少ないこと、更にすべて奥行の短い外観上平入り形式であることがあげられる。中には8号のように足下とみられる方向の壁面ほど調整が荒いものもある。時期的には、東諸県地方において、妻入り玄室プランから平入り玄室プランへ移行して後の時期が与えられようが、無茎鏃の副葬もあり断定は難しい。6世紀代の所産であろうか。

註 小型地下式横穴墓については、この報告書の刊行を待って、別稿で論じるつもりである。

5. 9号地下式横穴墓

(1) 遺構(第16図)

9号地下式横穴墓は、遺構探索のためユンボによる掘削面を平らに均す作業を行っていたところ、竪坑部が方形状にあらわれたことにより発見されたもので、竪坑部の上部掘り込み面を除いてはほとんど原状を留めるものであった。

主軸はN82°Eを示し、ほぼ東西方向に造られている。床面での全長は3mを測る。

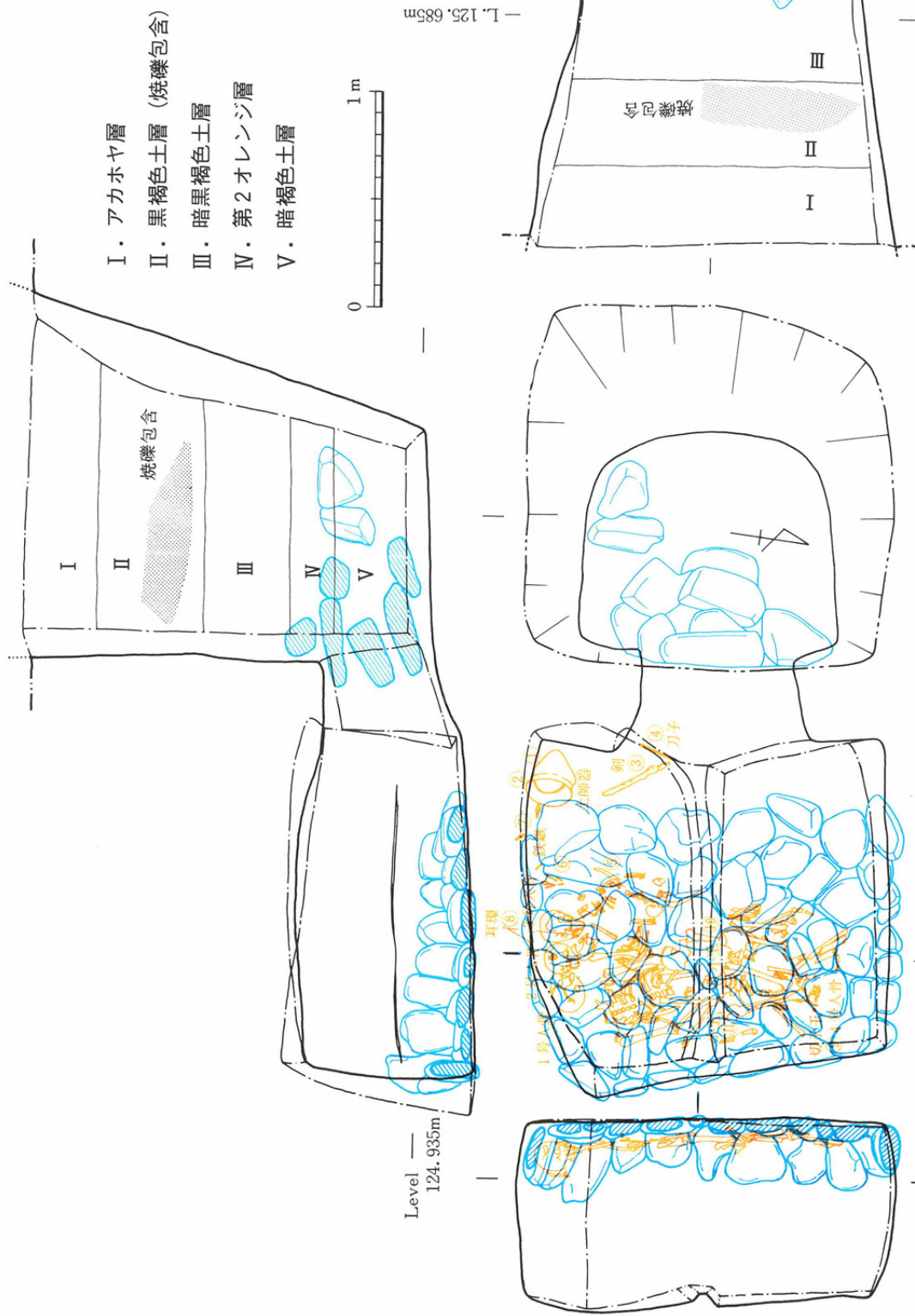
竪坑は床面まで190cm以上の深さがあり、上部は広くタテ・ヨコとも170cm以上の隅丸方形をなしている。底面の大きさはタテ100cm、ヨコ120cmを測る。羨門は20×40cm程度の河原石を積み上げて閉塞している。羨道は玄門に向かって広がるが、中央付近で長さ約50cm、幅75cm、高さ55cmを測る。玄室の規模は中央で奥行155cm、幅168cmの方形プランを呈し、奥壁幅は140cmであり狭くなっている。天井には主軸方向に140cmに亘り台形状の棟様浮彫を施している。玄室の側面観はタテ・ヨコとも長方形を呈する。天井の高さは80～90cmを測る。床面には42個の扁平な河原石を敷き並べ、奥・左・右の壁際には21個同様な石を立て掛けている。

人骨は南頭位に3体(1～3号人骨)、北頭位に1体(4号人骨)が葬られていた。

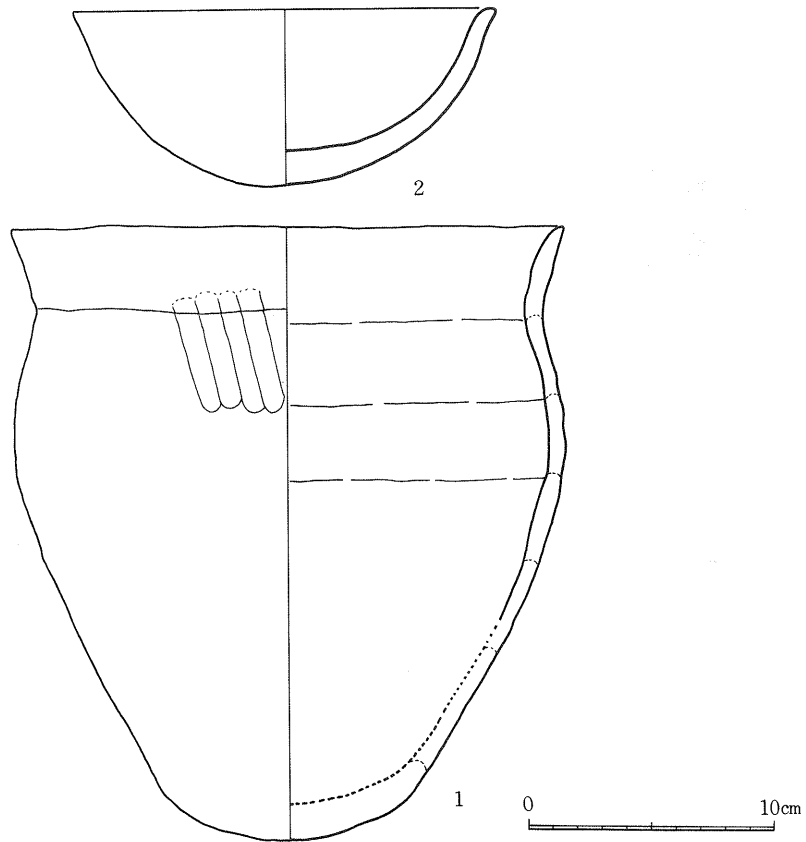
遺物は、右壁の入口寄りに鉄鏃・土師器、入口に近く剣・刀子、2号・3号人骨の頭部付近に耳環1対、4号人骨の頸部付近に切子玉・小玉・玉様遺物、両手首と考えられる部分に小玉多数が遺存していた。

(2) 遺物(第17～20図)

土師器



第16図 9号地下式横穴墓遺構実測図



第17図 9号地下式横穴墓出土土師器実測図（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）

甕（第17図1）

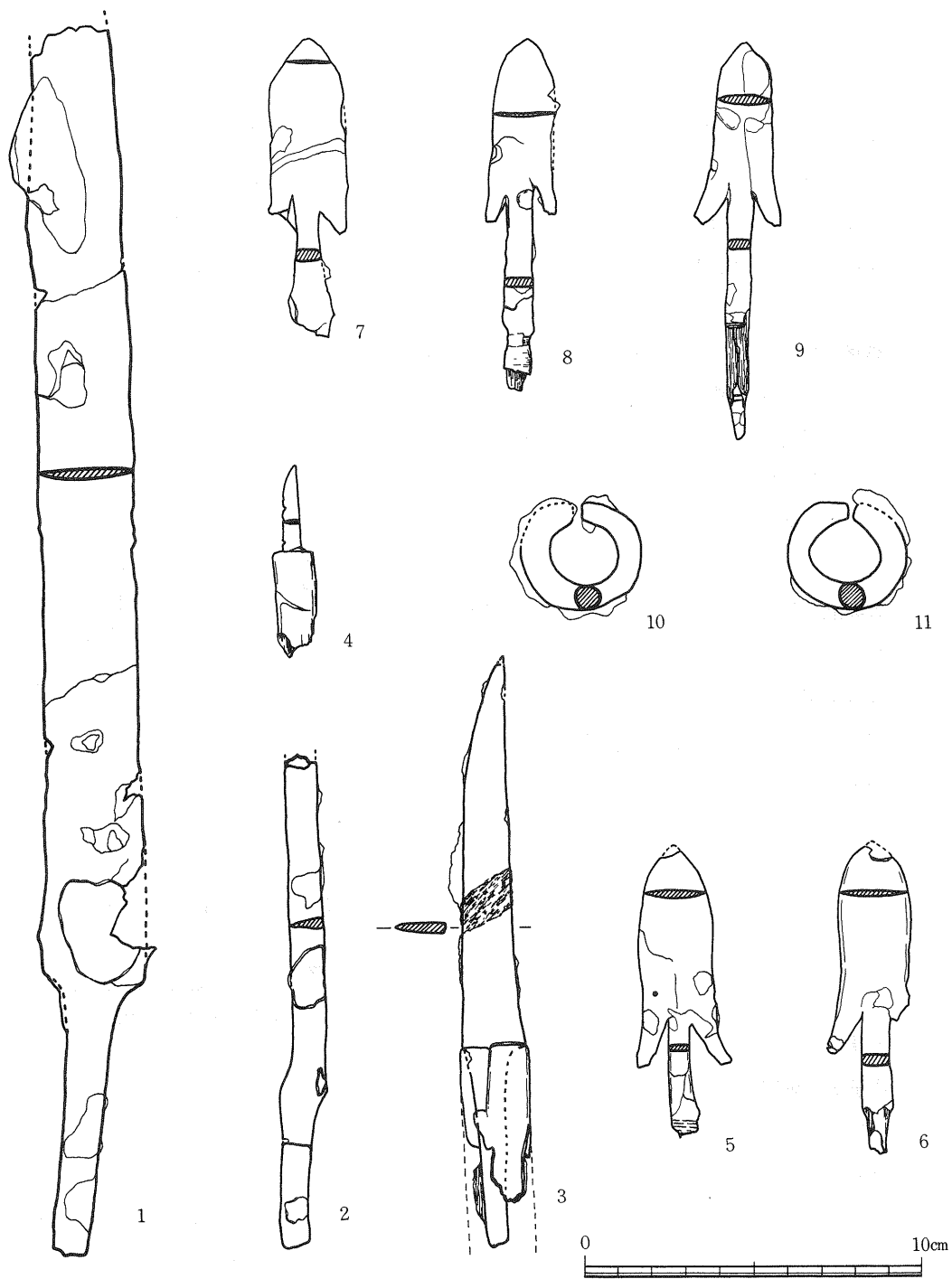
口径22.4cm、器高24.7cm、頸部径20.5cm、胴部最大径21.7cmを測る丸底の甕である。調整は口縁部内外面をヨコナデ、頸部をタテ方向のユビナデにより、その痕跡を良く残している。胴部外面には器壁の剝落痕が多く、使用度の高さを窺うことができる。全体的に暗褐色の色調を呈しているが、胴部中央付近が特に黒っぽく、ススによるものとみられる。胎土に多量の砂粒を混入している。

椀（第17図2）

やや歪な椀で、口径17.0cm、器高7.1cmを測る。口縁部が僅かに外反する。全体に器壁が厚く、焼成は極めて良好である。外面は褐色を呈するが、半ば近く黒斑があり、内面は褐色～赤褐色の色調を呈する。

剣（第18図1・第16図③）

身が途中から欠損している。現在の全長36cm、身長28.5cm、柄長7.5cm、中央付近での身



第18图 9号地下式横穴墓出土鉄器実測図(縮尺 $\frac{1}{2}$)

幅2.9cmを測る。

刀子（第18図2・3・4）

2（第16図④）は研ぎ込みによるのか細身のもので、先端部が欠損している。現在の全長14.5cm、身幅1.0cmを測る。3（第16図⑤）は全長17.3cm、身長11.5cm、柄長5.8cm、身幅1.5cmを測る。柄部に鹿角装を施している。身の中央付近に木片と思われる繊維痕がある。

4は副葬位置の不明のもので、極めて小型の刀子である。全長5.6cm、身長2.5cm、身幅0.5cmを測る。鹿角装である。

鉄鏃（第18図5・6第16図⑦、第18図7～9・第16図⑧）

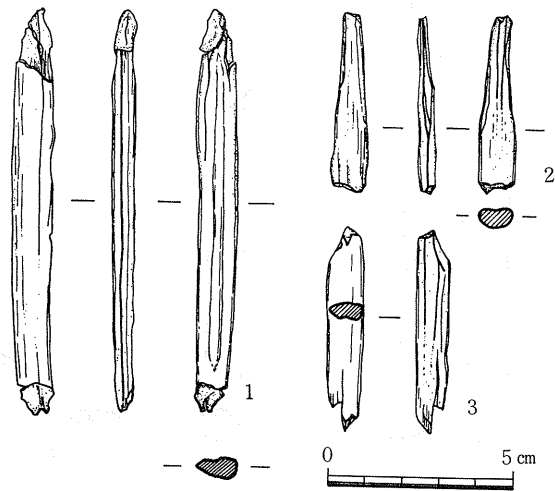
出土した5本の鉄鏃はいずれも同じ形式に属し、腸挟柳葉式にあたる。身の最大幅は1.8～2.2cm、箆被ぎの長さは2.8～3.8cmを測る。

耳環（第18図10・11、第16図⑧）

2号人骨着装とみられ、2点とも鉄製である。最大径3.5cmのやや楕円形状をなす。錆化が著しい。

骨製品（第19図1～3）

数点出土しているが、良好なもの3点を図示した。1は最大のもので、長さ10.8cm、幅1.1cmを測るが両端の遺存状態が悪い。外面に自然面を残し、内面に削痕がみられる。2は長さ4.7cm、最大幅1.0cm、先端部の幅0.5cmを測り、先端部に向けての削痕がよく観察できる。



第19図 9号地下式横穴墓出土骨製品実測図

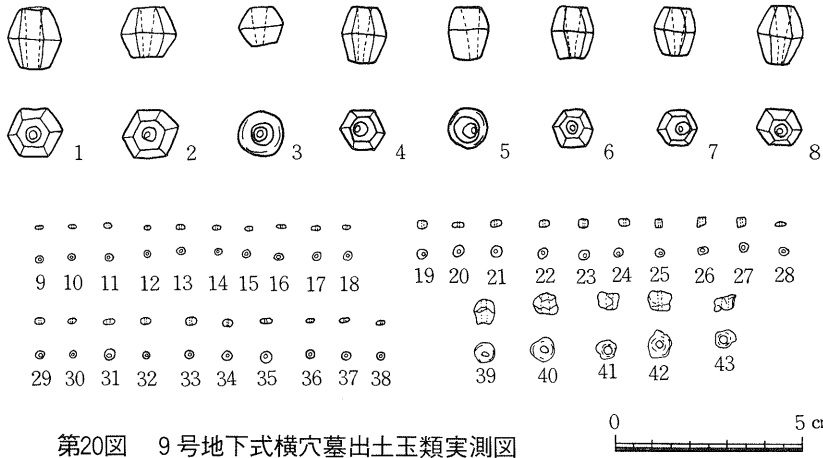
玉類

切子玉（第20図1～8、第16図⑨）

4号人骨の頸部付近から8個検出している。

小玉（第20図9～38、第16図⑨～⑪）

小玉は3ヶ所から合計295個検出している。4号人骨の頸部付近と左右両手首に当る位置である。形状は頸部付近出土の小玉は小型で、周囲を丸く整えているのに対して、両手首付近出土のものはやや大きく、整形が雑で角張っており、装着部位での相違がみられる。



第20図 9号地下式横穴墓出土玉類実測図

最後に、玉として使用したと考えられる風化の著しい玉様遺物（第20図39～43、第16図⑨）がある。直径0.5cm程度のものであるが、中心孔は人為的ではなく、自然的な穿孔の可能性が強い。

(3) 小 結

東諸県地方には玄室内に敷石を行い埋葬する地下式横穴墓が多い。構造的には屍床は特に作らず、平入り方形プランで複数体埋葬になる。須恵器・土師器の副葬も多い。東ノ原1号地下式横穴墓^(註1)や祝子園地下式横穴墓^(註2)が類似している。時期的には土師器甕の特徴から6世紀後半頃に比定しておきたい。

- 註 1. 岩永哲夫「東ノ原1号地下式横穴墓」（『宮崎県文化財調査報告書』第28集）昭和60年 宮崎県教育委員会
2. 田ノ上哲・岩永哲夫「祝子園地下式古墳発掘調査」（『宮崎県文化財調査報告書』第21集）昭和54年 宮崎県教育委員会

表4 9号地下式横穴墓出土切子玉計測表

No	高さ(長さ)	幅	色 調	石 材	備 考
1	16.8	15.0	白色半透明	水 晶	⑨第20回1
2	14.0	15.0	〃	〃	〃 〃 2
3	10.8	13.5	〃	〃	〃 〃 3
4	15.3	11.9	〃	〃	〃 〃 4
5	14.4	11.5	〃	〃	〃 〃 5
6	13.9	11.5	〃	〃	〃 〃 6
7	13.2	11.2	〃	〃	〃 〃 7
8	15.5	12.0	〃	〃	〃 〃 8

⑨は第16図の位置番号 単位：mm

表5 9号地下式横穴墓出土玉様遺物計測表

No	高さ(長さ)	幅	色 調	石 材	備 考
1	6.8	5.5	灰黒色	不 明	⑨第20図39
2	5.5	6.8	〃	〃	〃 〃 40
3	4.9	6.0	〃	〃	〃
4	2.6	5.3	〃	〃	〃
5	3.9	4.9	〃	〃	〃第20図41
6	4.9	7.2	〃	〃	〃 〃 42
7	4.5	5.2	〃	〃	〃 〃 43
8	2.2	5.8	〃	〃	〃
9	4.0	5.1	〃	〃	〃
10	3.7	5.1	〃	〃	〃
11	4.7	6.9	〃	〃	〃

⑨は第16図の位置番号 単位：mm

表6 9号地下式横穴墓出土小玉計測表(1)

単位：mm

No	高さ(長さ)	幅	色調	石材	備考	No	高さ(長さ)	幅	色調	石材	備考
1	2.6	2.7	淡緑色	メノウ	⑩第20図19	51	1.5	2.7	淡緑色	メノウ	⑩
2	1.8	3.3	〃	〃	〃 〃 20	52	2.0	3.0	〃	〃	〃
3	1.3	2.5	〃	〃	〃	53	2.4	2.7	〃	〃	〃
4	1.9	2.7	〃	〃	〃 第20図21	54	2.3	2.4	〃	〃	〃
5	2.6	2.7	〃	〃	〃 〃 22	55	2.5	2.7	〃	〃	〃
6	2.6	2.9	〃	〃	〃 〃 23	56	2.1	2.9	〃	〃	〃
7	2.2	2.8	〃	〃	〃 〃 24	57	2.0	2.5	〃	〃	〃
8	2.6	2.1	〃	〃	〃 〃 25	58	2.3	2.7	〃	〃	〃
9	2.0	2.2	〃	〃	〃	59	2.6	2.2	〃	〃	〃
10	1.6	2.9	〃	〃	〃	60	2.7	2.6	〃	〃	〃
11	2.0	2.4	〃	〃	〃	61	1.7	2.9	〃	〃	〃
12	2.4	2.2	〃	〃	〃	62	2.1	2.6	〃	〃	〃
13	2.4	2.1	〃	〃	〃	63	2.5	2.6	〃	〃	〃
14	2.4	2.2	〃	〃	〃	64	2.0	2.4	〃	〃	〃
15	3.0	2.4	〃	〃	〃	65	1.9	2.7	〃	〃	〃
16	1.9	2.6	〃	〃	〃	66	1.7	2.7	〃	〃	〃
17	2.7	2.4	〃	〃	〃	67	2.1	2.4	〃	〃	〃
18	1.8	2.5	〃	〃	〃	68	2.2	2.2	〃	〃	〃
19	1.9	2.2	〃	〃	〃	69	1.9	3.0	〃	〃	〃
20	2.0	2.1	〃	〃	〃	70	1.4	2.9	〃	〃	〃
21	1.8	2.3	〃	〃	〃	71	1.9	2.5	〃	〃	〃
22	1.5	2.4	〃	〃	〃	72	1.8	2.8	〃	〃	〃
23	2.7	2.6	〃	〃	〃 第20図26	73	1.6	2.6	〃	〃	〃
24	2.6	2.2	〃	〃	〃 〃 27	74	2.4	2.9	〃	〃	〃
25	1.3	2.6	〃	〃	〃 〃 28	75	2.3	2.8	〃	〃	〃
26	2.0	2.6	〃	〃	〃	76	1.9	2.7	〃	〃	〃
27	2.1	2.9	〃	〃	〃	77	2.5	2.7	〃	〃	〃
28	1.6	2.8	〃	〃	〃	78	1.6	2.7	〃	〃	〃
29	1.7	2.6	〃	〃	〃	79	2.1	2.3	〃	〃	⑪第20図29
30	2.1	2.9	〃	〃	〃	80	1.7	2.0	〃	〃	〃 〃 30
31	2.2	2.4	〃	〃	〃	81	2.0	2.8	〃	〃	〃 〃 31
32	1.7	2.5	〃	〃	〃	82	2.0	2.1	〃	〃	〃 〃 32
33	2.2	2.7	〃	〃	〃	83	2.2	2.3	〃	〃	〃 〃 33
34	2.5	2.6	〃	〃	〃	84	2.1	2.6	〃	〃	〃 〃 34
35	2.3	2.6	〃	〃	〃	85	1.7	3.0	〃	〃	〃 〃 35
36	2.4	3.0	〃	〃	〃	86	1.4	2.1	〃	〃	〃 〃 36
37	2.2	2.6	〃	〃	〃	87	1.6	2.4	〃	〃	〃 〃 37
38	2.0	2.5	〃	〃	〃	88	1.9	2.0	〃	〃	〃 〃 38
39	2.3	2.8	〃	〃	〃	89	1.7	2.2	〃	〃	〃
40	1.3	2.5	〃	〃	〃	90	2.0	2.8	〃	〃	〃
41	2.3	2.3	〃	〃	〃	91	1.9	2.3	〃	〃	〃
42	1.2	2.2	〃	〃	〃	92	1.1	2.2	〃	〃	〃
43	2.3	2.7	〃	〃	〃	93	2.0	1.9	〃	〃	〃
44	1.3	2.3	〃	〃	〃	94	2.0	2.2	〃	〃	〃
45	2.9	2.2	〃	〃	〃	95	2.0	2.0	〃	〃	〃
46	1.8	2.8	〃	〃	〃	96	2.2	2.1	〃	〃	〃
47	1.9	2.5	〃	〃	〃	97	1.6	2.1	〃	〃	〃
48	1.6	2.9	〃	〃	〃	98	2.0	2.4	〃	〃	〃
49	2.3	2.8	〃	〃	〃	99	2.0	2.5	〃	〃	〃
50	2.5	2.4	〃	〃	〃	100	1.7	2.5	〃	〃	〃

表7 9号地下式横穴墓出土小玉計測表(2)

単位:mm

No	高さ(長さ)	幅	色調	石材	備考	No	高さ(長さ)	幅	色調	石材	備考
101	2.0	2.5	淡緑色	メノウ	⑩	151	2.6	3.0	淡緑色	メノウ	⑩
102	1.4	2.7	〃	〃	〃	152	2.7	3.5	〃	〃	〃
103	1.6	2.5	〃	〃	〃	153	1.4	2.8	〃	〃	〃
104	2.6	2.6	〃	〃	〃	154	1.4	2.9	〃	〃	〃
105	2.3	2.9	〃	〃	〃	155	2.2	3.0	〃	〃	〃
106	1.8	2.6	〃	〃	〃	156	2.5	2.6	〃	〃	〃
107	1.2	2.9	〃	〃	〃	157	1.4	2.3	〃	〃	〃
108	2.7	2.7	〃	〃	〃	158	2.1	2.6	〃	〃	〃
109	1.7	2.4	〃	〃	〃	159	1.9	2.7	〃	〃	〃
110	1.8	2.9	〃	〃	〃	160	2.6	2.8	〃	〃	〃
111	2.6	2.5	〃	〃	〃	161	2.1	2.3	〃	〃	〃
112	2.1	2.7	〃	〃	〃	162	1.5	2.6	〃	〃	〃
113	2.4	2.8	〃	〃	〃	163	1.7	2.7	〃	〃	〃
114	1.5	2.6	〃	〃	〃	164	2.1	2.6	〃	〃	〃
115	2.0	2.7	〃	〃	〃	165	2.2	3.0	〃	〃	〃
116	2.2	2.5	〃	〃	〃	166	2.0	2.8	〃	〃	〃
117	2.7	2.8	〃	〃	〃	167	1.6	3.1	〃	〃	〃
118	2.1	2.4	〃	〃	〃	168	1.5	2.5	〃	〃	〃
119	1.8	2.9	〃	〃	〃	169	1.8	2.4	〃	〃	〃
120	2.3	2.6	〃	〃	〃	170	1.9	2.4	〃	〃	〃
121	3.0	2.8	〃	〃	〃	171	2.0	2.4	〃	〃	〃
122	2.2	3.0	〃	〃	〃	172	2.4	2.3	〃	〃	〃
123	1.6	2.3	〃	〃	〃	173	2.3	2.6	〃	〃	〃
124	2.3	2.5	〃	〃	〃	174	1.9	2.9	〃	〃	〃
125	3.0	2.4	〃	〃	〃	175	2.8	2.7	〃	〃	〃
126	2.2	2.8	〃	〃	〃	176	2.0	2.5	〃	〃	〃
127	1.8	3.3	〃	〃	〃	177	2.1	2.9	〃	〃	〃
128	2.0	2.5	〃	〃	〃	178	1.9	3.0	〃	〃	〃
129	1.5	3.0	〃	〃	〃	179	2.1	2.4	〃	〃	〃
130	2.8	2.8	〃	〃	〃	180	2.6	3.0	〃	〃	〃
131	1.5	2.5	〃	〃	〃	181	2.6	2.7	〃	〃	〃
132	3.0	2.6	〃	〃	〃	182	2.0	1.9	〃	〃	〃
133	3.6	3.0	〃	〃	〃	183	2.2	1.9	〃	〃	〃
134	2.0	3.0	〃	〃	〃	184	1.5	2.5	〃	〃	〃
135	3.2	2.7	〃	〃	〃	185	1.7	2.3	〃	〃	〃
136	2.1	2.8	〃	〃	〃	186	2.2	1.9	〃	〃	〃
137	2.3	2.6	〃	〃	〃	187	2.1	3.0	〃	〃	〃
138	2.8	2.7	〃	〃	〃	188	2.3	2.1	〃	〃	〃
139	2.8	3.1	〃	〃	〃	189	2.0	2.3	〃	〃	〃
140	1.4	2.4	〃	〃	〃	190	2.0	2.2	〃	〃	〃
141	3.0	3.3	〃	〃	〃	191	2.6	2.5	〃	〃	〃
142	2.6	3.0	〃	〃	〃	192	2.3	2.2	〃	〃	〃
143	2.5	3.2	〃	〃	〃	193	2.1	2.6	〃	〃	⑩ or ⑪
144	2.1	2.2	〃	〃	〃	194	1.5	2.2	〃	〃	〃
145	3.3	3.3	〃	〃	〃	195	1.6	2.2	〃	〃	〃
146	2.7	2.6	〃	〃	〃	196	1.8	2.6	〃	〃	〃
147	2.2	2.5	〃	〃	〃	197	1.0	2.5	〃	〃	〃
148	2.1	2.6	〃	〃	〃	198	2.0	2.7	〃	〃	〃
149	1.6	2.8	〃	〃	〃	199	2.2	2.7	〃	〃	〃
150	2.0	2.6	〃	〃	〃	200	2.2	3.0	〃	〃	〃

表8 9号地下式横穴墓出土小玉計測表(3)

単位：mm

No	高さ(長さ)	幅	色調	石材	備考	No	高さ(長さ)	幅	色調	石材	備考
201	2.3	2.5	淡緑色	メノウ	⑩ or ⑪	251	1.2	2.3	淡緑色	メノウ	⑨
202	1.1	2.2	〃	〃	⑨第20図9	252	1.6	2.4	〃	〃	〃
203	1.2	2.4	〃	〃	〃 〃 10	253	2.1	2.5	〃	〃	〃
204	1.4	2.3	〃	〃	〃 〃 11	254	1.6	2.5	〃	〃	〃
205	1.1	2.0	〃	〃	〃 〃 12	255	1.6	2.4	〃	〃	〃
206	1.3	2.2	〃	〃	〃 〃 13	256	1.5	2.6	〃	〃	〃
207	1.0	2.1	〃	〃	〃 〃 14	257	1.1	2.1	〃	〃	〃
208	1.0	2.1	〃	〃	〃 〃 15	258	1.4	2.4	〃	〃	〃
209	1.0	2.3	〃	〃	〃 〃 16	259	1.6	2.4	〃	〃	〃
210	1.4	2.2	〃	〃	〃 〃 17	260	1.3	2.2	〃	〃	〃
211	1.0	1.9	〃	〃	〃 〃 18	261	1.3	2.3	〃	〃	〃
212	1.0	2.1	〃	〃	〃	262	1.1	2.1	〃	〃	〃
213	1.0	2.1	〃	〃	〃	263	1.5	2.0	〃	〃	〃
214	1.0	2.2	〃	〃	〃	264	1.2	2.2	〃	〃	〃
215	1.1	2.0	〃	〃	〃	265	1.0	2.1	〃	〃	〃
216	1.0	2.1	〃	〃	〃	266	1.9	2.4	〃	〃	〃
217	1.2	2.3	〃	〃	〃	267	1.1	2.1	〃	〃	〃
218	1.1	2.0	〃	〃	〃	268	1.4	2.4	〃	〃	〃
219	1.0	2.1	〃	〃	〃	269	1.3	2.3	〃	〃	〃
220	1.2	2.2	〃	〃	〃	270	1.2	2.3	〃	〃	〃
221	1.0	2.1	〃	〃	〃	271	1.0	2.2	〃	〃	〃
222	1.0	2.1	〃	〃	〃	272	1.3	2.4	〃	〃	〃
223	1.1	2.3	〃	〃	〃	273	1.7	2.5	〃	〃	〃
224	1.4	2.2	〃	〃	〃	274	1.2	2.1	〃	〃	〃
225	1.1	2.2	〃	〃	〃	275	1.2	2.3	〃	〃	〃
226	1.4	2.4	〃	〃	〃	276	1.5	2.5	〃	〃	〃
227	1.3	2.3	〃	〃	〃	277	1.3	2.3	〃	〃	〃
228	1.4	2.0	〃	〃	〃	278	1.2	2.4	〃	〃	〃
229	1.1	2.3	〃	〃	〃	279	1.1	2.1	〃	〃	〃
230	1.3	2.1	〃	〃	〃	280	1.4	2.5	〃	〃	〃
231	1.6	2.3	〃	〃	〃	281	1.2	2.1	〃	〃	〃
232	0.9	2.2	〃	〃	〃	282	1.1	2.1	〃	〃	〃
233	1.1	2.1	〃	〃	〃	283	1.1	2.2	〃	〃	〃
234	1.1	2.1	〃	〃	〃	284	1.4	2.4	〃	〃	〃
235	1.2	2.2	〃	〃	〃	285	1.1	2.5	〃	〃	〃
236	1.2	2.3	〃	〃	〃	286	1.3	2.3	〃	〃	〃
237	1.1	2.0	〃	〃	〃	287	1.3	2.5	〃	〃	〃
238	1.5	2.5	〃	〃	〃	288	1.2	2.1	〃	〃	〃
239	1.3	2.2	〃	〃	〃	289	1.7	2.3	〃	〃	〃
240	1.3	2.1	〃	〃	〃	290	1.3	2.3	〃	〃	〃
241	1.1	2.3	〃	〃	〃	291	1.3	2.2	〃	〃	〃
242	1.0	2.0	〃	〃	〃	292	1.1	2.2	〃	〃	〃
243	1.2	2.1	〃	〃	〃	293	1.1	2.1	〃	〃	〃
244	1.3	2.1	〃	〃	〃	294	1.2	2.4	〃	〃	〃
245	1.1	2.0	〃	〃	〃	295	1.7	2.5	〃	〃	〃
246	1.2	2.0	〃	〃	〃						
247	1.1	2.2	〃	〃	〃						
248	1.1	2.2	〃	〃	〃						
249	1.3	2.3	〃	〃	〃						
250	1.5	2.2	〃	〃	〃						

備考欄の⑨, ⑩, ⑪は第16図の位置番号

6. 10号地下式横穴墓

(1) 遺構(第22図)

10号地下式横穴墓は、昭和57年度調査分(5号～9号)の東側に位置している。重機の掘削によって開口した部分は、玄室奥壁の角に位置していた。まず最初に開口部より玄室内へ入り流入土の除去及び精査作業を行った。それと並行して竪坑の検出作業を行い、アカホヤ面で検出した後掘り下げ作業を行った。

その結果、竪坑は2.2m×1.8mの長方形プランを呈し、検出面からの深さ2mであり、羨門部と反対側の壁面の角には掘りくぼめられた痕跡が2ヶ所存在した。また玄室とは反対側には長径2.2m、短径1.7mで深さ1.8mの隋円形プランを呈する土坑が竪坑と切り合っており存在していた。

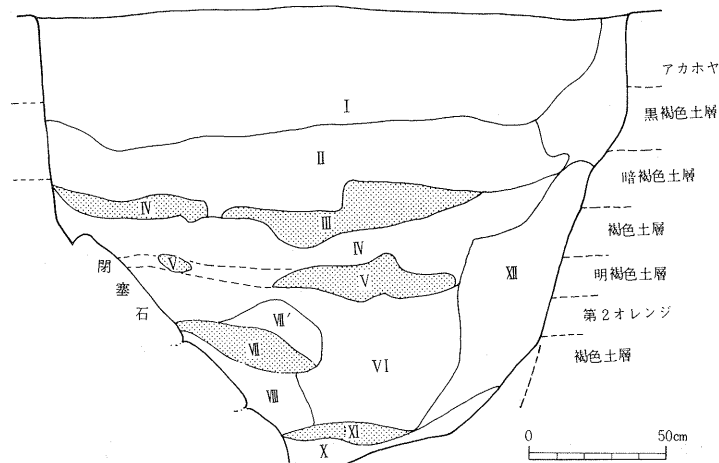
羨道部は竪坑から玄室に向かって緩やかに傾斜しており、羨門部・玄門部とも幅1mであった。

玄室は両袖式で、床面は南北2.05m、東西2.5mの長方形プランを呈し、天井部は寄棟造りで妻入りである。天井部中央には棟木が浮彫されていた。また床面から天井頂部までの高さは1.4mであった。壁面には、一部崩壊していたが高さ35cm、幅10～5cmの棚状施設が設けられていた。玄室床面には全面にわたって長さ40～20cm大の扁平な河原石が敷き詰められており、また玄室中央部より奥の壁面三方に同様な河原石が立てて配列されていた。

玄室から竪坑の主軸はN-60°-Eを示していた。

(2) 竪坑の土層(第21図)

竪坑はアカホヤ層上面で検出された。竪坑内の土層は大部分がアカホヤやその下層の褐色



第21図 10号地下式横穴墓竪坑土層断面図

土をブロック状に含む暗褐色土層であるがその中にⅢ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅸ層の4層に黒褐色土の層が確認された。これは人骨の状態でも判明したように追葬の痕跡を残したものであろうと思われる。

(3) 人骨の出土状態

奥壁から順に南頭位の1号人骨、北頭位の2・3号人骨、南頭位の4号人骨、5号人骨と呼称する。1号人骨は頭蓋の残存は少なく、歯4本と左の脛骨を残していた。2号人骨は頭蓋と上半身はほとんどなく、左右の大腿骨・脛の残存状態は良かった。3号人骨は後頭部・下顎骨・左の大腿骨が残存していた。4号人骨は頭蓋片・歯・左上腕骨・右膝蓋骨・大腿骨が残存していた。5号人骨は歯・右大腿骨が残存していた。4・5号人骨は4号人骨の頭蓋を除くと種々な部位が左袖部の1ヶ所に集められており追葬時の二次的な集骨が推定される。3号人骨も大腿骨が右袖部に動いている。

(4) 遺物

1. 土器

須恵器・土師器は玄室の右袖部と左袖部に分かれて出土している。右袖部には須恵器の長脚二段透しの有蓋高坏3・坏蓋1、土師器の高坏2・碗1が出土し、左袖部では須恵器の短脚円形透しの有蓋高坏6・長脚無蓋高坏1・坏蓋1、土師器の盃2が出土している。特に長脚二段透しの有蓋高坏6にアワビが入れられていたのは注目される。

a. 須恵器

坏蓋

7・19ともA類で、天井部と体部の境は甘く、緩やかに屈曲する。口縁端部は丸く、段を有しない。口径は14.4cm～14.6cm、器高は3.8cm～4.2cmである。(第24図7・第25図19)

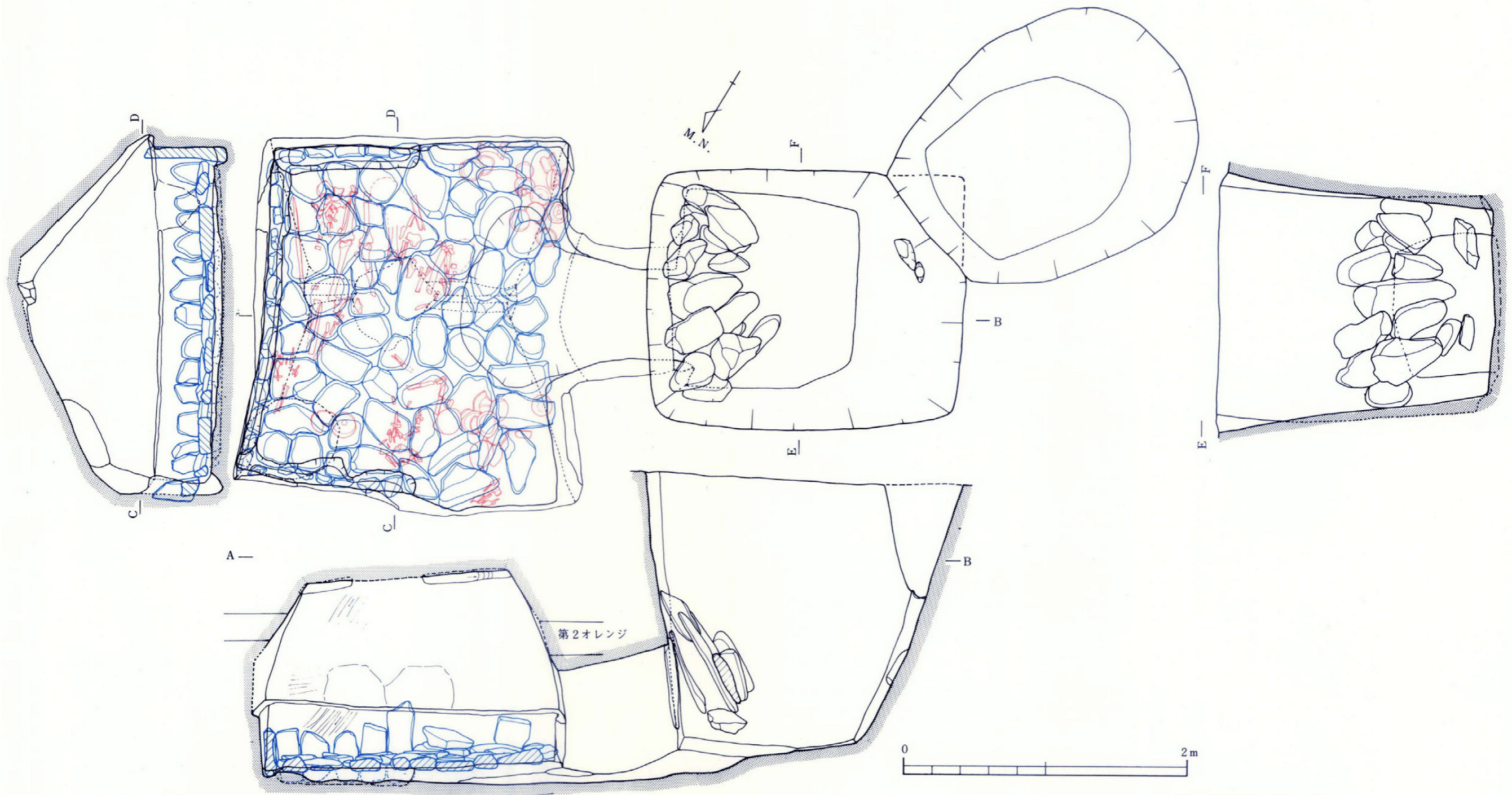
高坏蓋

A類 天井部と体部の境の稜はやや甘く、天井部はやや丸い。口縁端部は丸い。口径は15.5～16.6cm、器高5.1cm～6.0cmである。(第24図1・3・5)

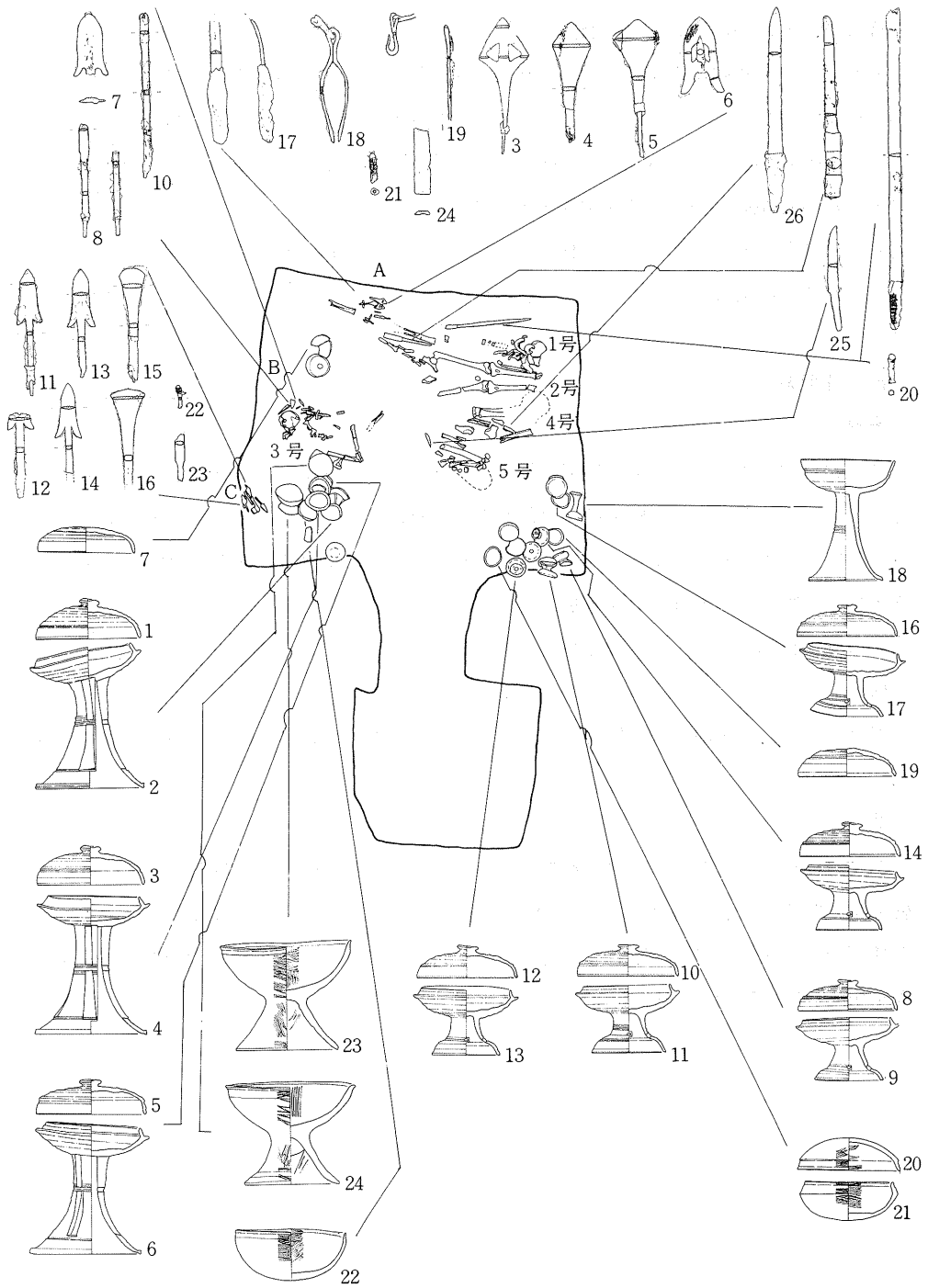
B類 天井部と体部の境の稜はやや甘く、天井部はやや平坦である。口縁端部には甘い段を有する。口径は15.0cm、器高は4.7cm～5.1cmである。(第24図8・第25図10・12・14・16)

高坏

A類 有蓋長脚二段の長方形透しで、脚の基部がやや太い。脚端部は上下につまみ出される。杯部の立ち上がりは1.0cm～1.2cmとやや短く内傾し、口唇部は平坦である。三方透しと二方透しがある。口径13.8cm～14.2cm、受部径16.9cm～17.2cm、器高18.1cm～21.1cm、脚



第22図 10号地下式横穴墓壙実測図



第23图 10号地下式横穴墓遺物出土狀況图

部径16.2cm～7.0cmである。(第24図2・4・6)

B類 有蓋短脚の円形透しで、円形透しを交換点として内湾する。脚端部には段を有する。坏部の立ち上がりは0.8cm～1.1cmでやや短く内傾し、口唇部は平坦である。三方透しと二方透しがある。口径13.0cm～13.5cm、受部径15.5cm～16.0cm、器高9.3cm～10.0cm、脚部径9.9cm～11.2cmである。(第24図9・第25図11・13・15・17)

C類 無蓋長脚で透しはなく、脚部の中央部に2本の沈線がめぐる。脚端部は上下につまみ出される。坏部は斜方向に伸び、口唇部は丸い。口径14.1cm、器高18.2cm、脚部径16.2cmである。(第25図18)

b. 土師器

高坏

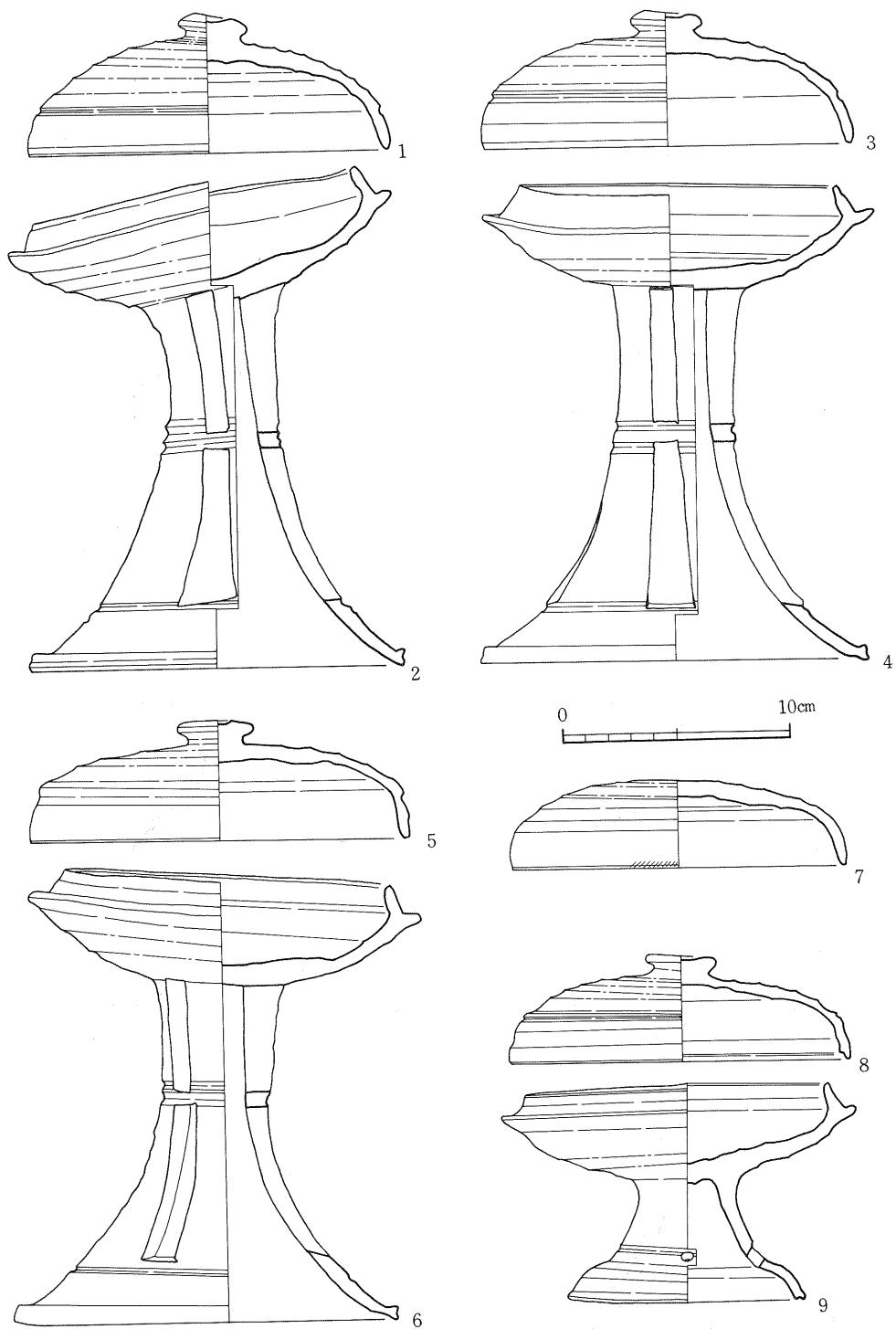
23・24は同タイプの高坏で、坏部が塊状で口縁部が若干外反し、口唇部は丸い。脚部は大きく外反する。9は坏部と脚部の接合部からすぐ外反するのに対して、10はまっすぐ伸びた後、途中から大きく外反する。脚端部は凹気味に平坦化している。坏部は内外面ともヘラ磨きを施し、脚部の外面はヘラ磨きを、内面にヘラ削りを施している。口径19.9cm、器高14.8～15.7cm、脚部径14.3～15.6cmである。(第26図23・24)

堦

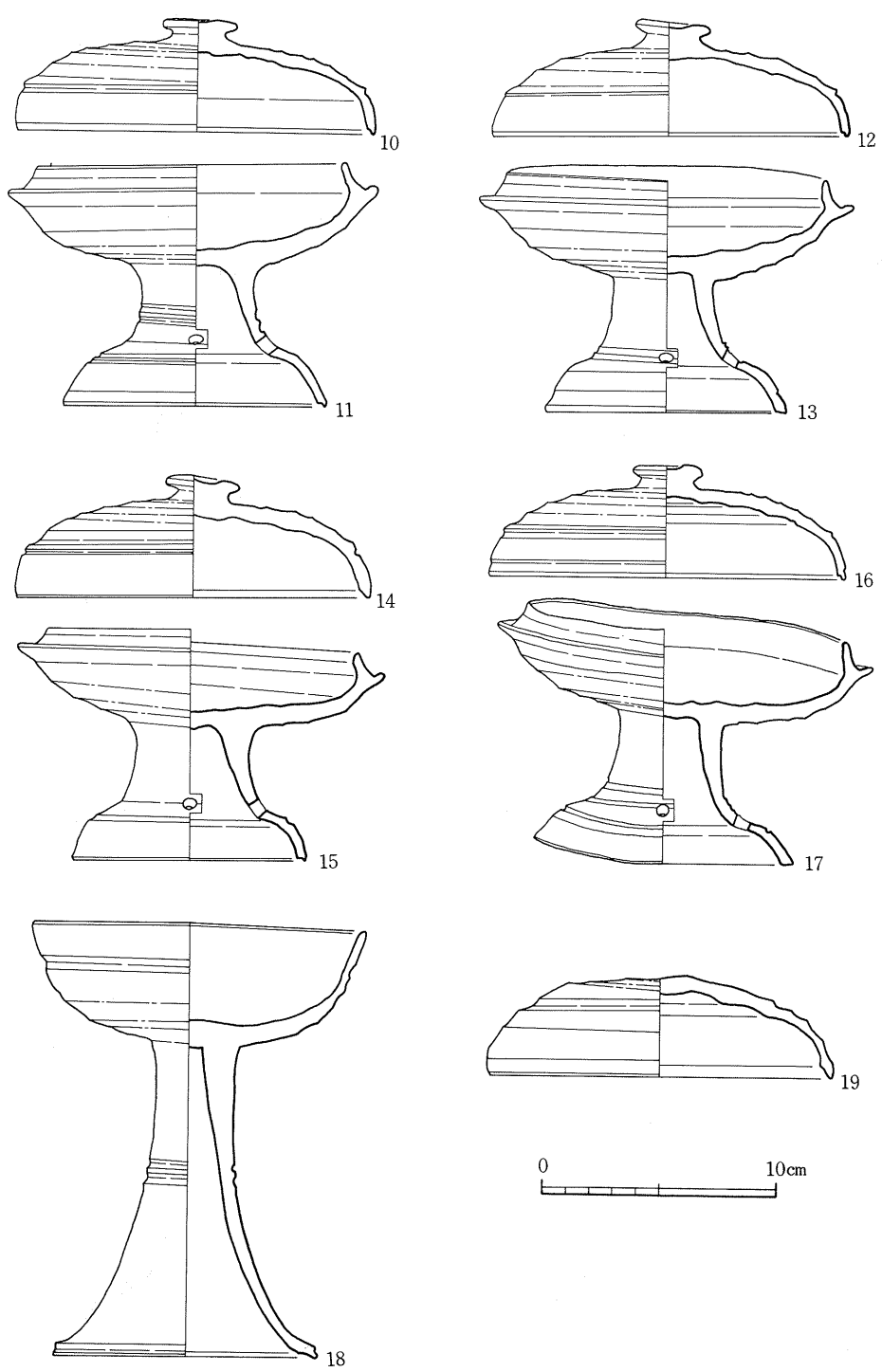
22は丸底で、口縁部が若干外反し、口唇部は丸味を有している。口径17.0cm、器高7.9cm。(第26図22)

盥

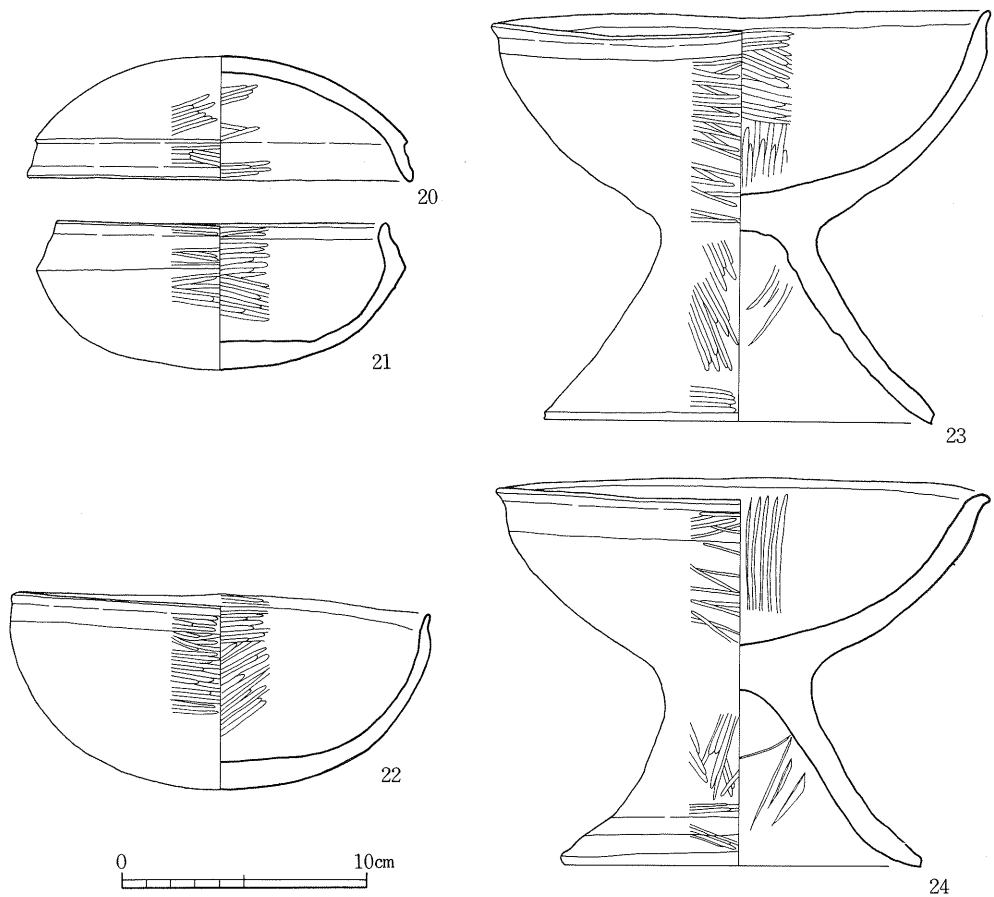
20・21はセットをなし、20は坏蓋を模し、丸い天井部と体部の境に明瞭な稜を有する。口唇部は丸味を有し、内外面ともヘラ磨きを施している。口径15.6cm、器高5.0cm。21は丸底の体部から口縁部が内側に屈曲し、丸味のある口唇部が直に立ち上がる。内外面ともヘラ磨きを施す。口径13.3cm、器高5.9cm。(第26図20・21)



第24图 10号地下式横穴墓出土須惠器実測図 (I)



第25图 10号地下式横穴墓出土須惠器实测图(II)



第26図 10号地下式横穴墓出土土師器実測図

表9 10号地下式横穴墓出土須恵器・土師器計測表

器形	類	No	口径	器高	受部径	立ち上がり高	脚部径	胎土	色調	焼成	調整	出土地点	時期	備考
有蓋	A	1	15.6	6.0				1~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	天井部ヘラ削り 体部横ナデ	右袖部	ⅢA	
高坏	A	2	14.2	21.1	16.9	1.2	16.2	1~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	杯部下半ヘラ削り その他横ナデ	右袖部	ⅢA	長方形二段三方透し 自然釉
有蓋	A	3	15.5	5.8				1~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	天井部ヘラ削り 体部横ナデ	右袖部	ⅢA	
高坏	A	4	13.8	20.2	17.0	1.0	17.0	2~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	杯部下半ヘラ削り その他横ナデ	右袖部	ⅢA	長方形二段三方透し 自然釉
有蓋	A	5	16.1	5.2				2~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	天井部ヘラ削り 体部横ナデ	右袖部	ⅢA	天井部に朱附着
高坏	A	6	14.2	18.1	17.2	1.1	16.8	1~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	杯部下半ヘラ削り その他横ナデ	右袖部	ⅢA	長方形二段三方透し
坏蓋	A	7	14.6	3.8				0.5mm大砂粒若干	青灰色	良好	天井部ヘラ削り その他横ナデ	右袖部	ⅢB	口縁部外面にヘラ刻み
有蓋	B	8	14.7	4.6				0.5~5mm大砂粒多	青灰色	堅緻	天井部ヘラ削り その他横ナデ	左袖部	ⅢA	
高坏	B	9	13.2	9.3	15.5	0.9	10.2	1~4mm大砂粒多	青灰色	堅緻	杯部下半ヘラ削り その他横ナデ	左袖部	ⅢA	円形三方透し
有蓋	B	10	15.0	4.7				1~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	天井部ヘラ削り 体部横ナデ	左袖部	ⅢA	
高坏	B	11	13.0	10.0	15.6	1.0	11.2	1~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	杯部下半ヘラ削り その他横ナデ	左袖部	ⅢA	円形三方透し、自然釉
有蓋	B	12	15.0	4.8				1~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	天井部ヘラ削り 体部横ナデ	左袖部	ⅢA	×印のヘラ記号
高坏	B	13	13.5	9.7	15.8	0.8	10.2	1~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	杯部下半ヘラ削り その他横ナデ	左袖部	ⅢA	円形三方透し、自然釉
有蓋	B	14	15.0	5.1				1~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	天井部ヘラ削り 体部横ナデ	左袖部	ⅢA	
高坏	B	15	13.2	9.7	15.6	0.8	9.9	1~3mm大砂粒多	青灰色	堅緻	杯部下半ヘラ削り その他横ナデ	左袖部	ⅢA	円形三方透し
有蓋	B	16	15.0	4.7				1~4mm大砂粒多	青灰色	堅緻	天井部ヘラ削り 体部横ナデ	左袖部	ⅢA	
高坏	B	17	13.5	9.8	16.0	1.1	11.0	1~4mm大砂粒多	青灰色	堅緻	杯部下半ヘラ削り その他横ナデ	左袖部	ⅢA	円形三方透し
高坏	C	18	14.1	18.2			16.2	1~2mm大砂粒多	青灰色	良好	杯部下半ヘラ削り その他横ナデ	左袖部	ⅢB	
坏蓋	B	19	14.4	4.2				1~4mm大砂粒多	青灰色	良好	天井部ヘラ削り 体部横ナデ	左袖部	ⅢB	内面に朱附着、頂部はヘラ切り後未調整

単位：cm

器形	類	No	口径	器高	脚部径	胎土	色調	焼成	調整	出土地点	時期	備考
坏	A	20	15.6	5.0		1~1.5mm大砂粒若干	赤褐色	良好	ヘラ磨キ	左袖部	ⅢA	
盃	A	21	13.3	5.9		0.5mm大砂粒若干	赤褐色	良好	ヘラ磨キ	左袖部	ⅢA	
盃	B	22	17.0	7.9		0.5mm大砂粒若干	赤褐色	良好	ヘラ磨キ	右袖部	ⅢA	
高坏	A	23	19.9	15.7	15.6	0.5mm大砂粒若干	赤褐色	良好	ヘラ磨キ	右袖部	ⅢA	
高坏	A	24	19.9	14.8	14.3	0.5mm大砂粒若干	赤褐色	良好	ヘラ磨キ	右袖部	ⅢA	

単位：cm

2. 鉄器

鉄器は、直刀・剣・刀子・鉄鏃・鏃 鑿子・針状鉄器が出土している。

直刀は奥壁に沿って1号人骨の左右に、頭部に切先を向ける形で2振出土している。剣は4号人骨、刀子は5号人骨付近で出土している。その他の鉄器については、1号人骨の脚部の奥壁側（A群）、3号人骨の頭部周辺（B群）、玄室入口より左袖の側壁部分（C群）の3ヶ所に集中して出土した。

鉄器

直刀（第27図1・2） 1は全長65.5cm、身長55cm、身幅2.3cmの長刀である。柄には木質部および目釘が残存しており、刀身部分にも鞘と思われる木質が付着しており、鞘口の部分には鹿角の付着見られた。2は全長37cm、身長23.5cm、身幅2.2cmの短刀である。柄は鹿角製で残存状態は良好で中央部分が5cm幅で一段細く作られている。

剣（第29図26） 全長20.5cm、身長14.5cm、身幅1.3cmの小型品である。柄部は鹿角製である。

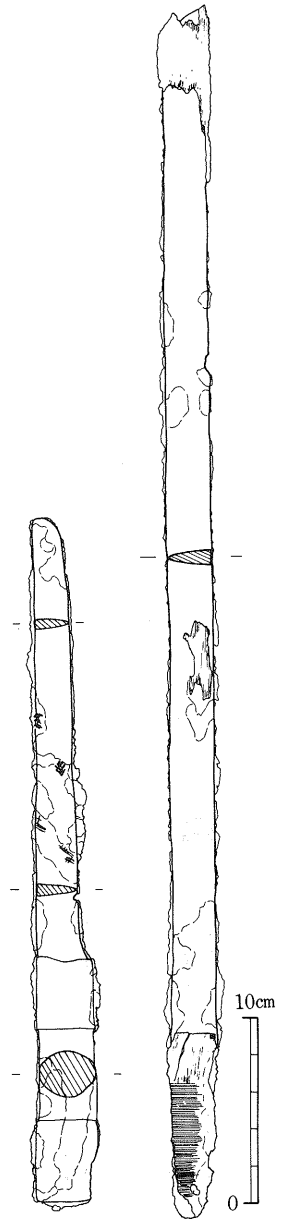
刀子（第29図25） 全長10.5cm、身長6.5cm、身幅1.5cmを計る。錆化が著しい。柄部は鹿角製である。

A群よりは、鉄鏃・鏃・鑿子・針状鉄器等が出土している。（第23図）

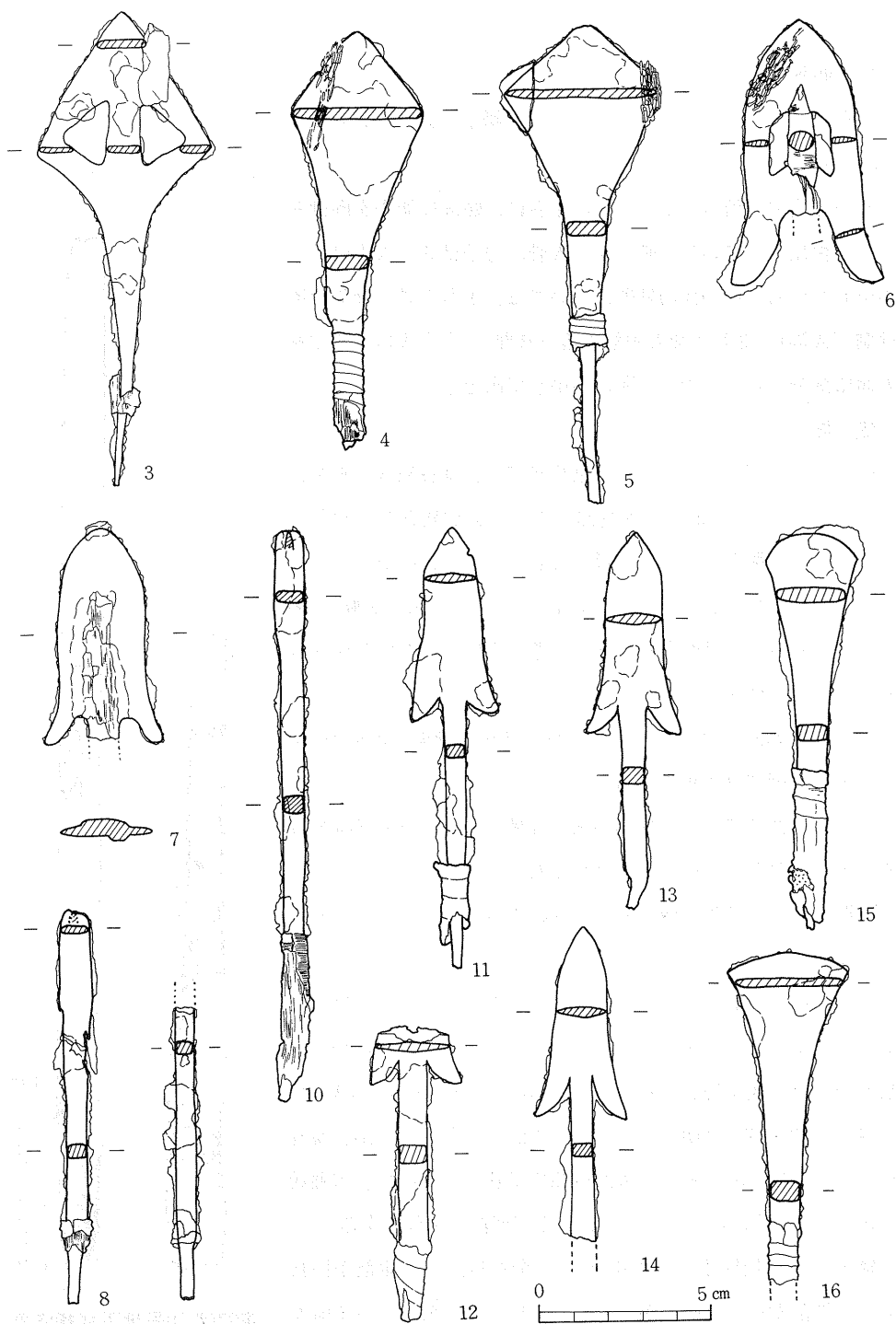
鉄鏃（第28図3～6） 3～5は変形圭頭斧箭式で3は透根タイプである。6は透根腸扶柳葉式であり、折れているが装着状況から見て無茎鏃と思われる。4～6には布が付着していた。

鏃（第29図17） 切先は折れているが、現存長12.3cm、現身長5cm、身幅1cmである。鏃が柄部まで延びるもので、古瀬氏分類の1b類⁽¹⁾に相当すると思われる。柄部は木質である。

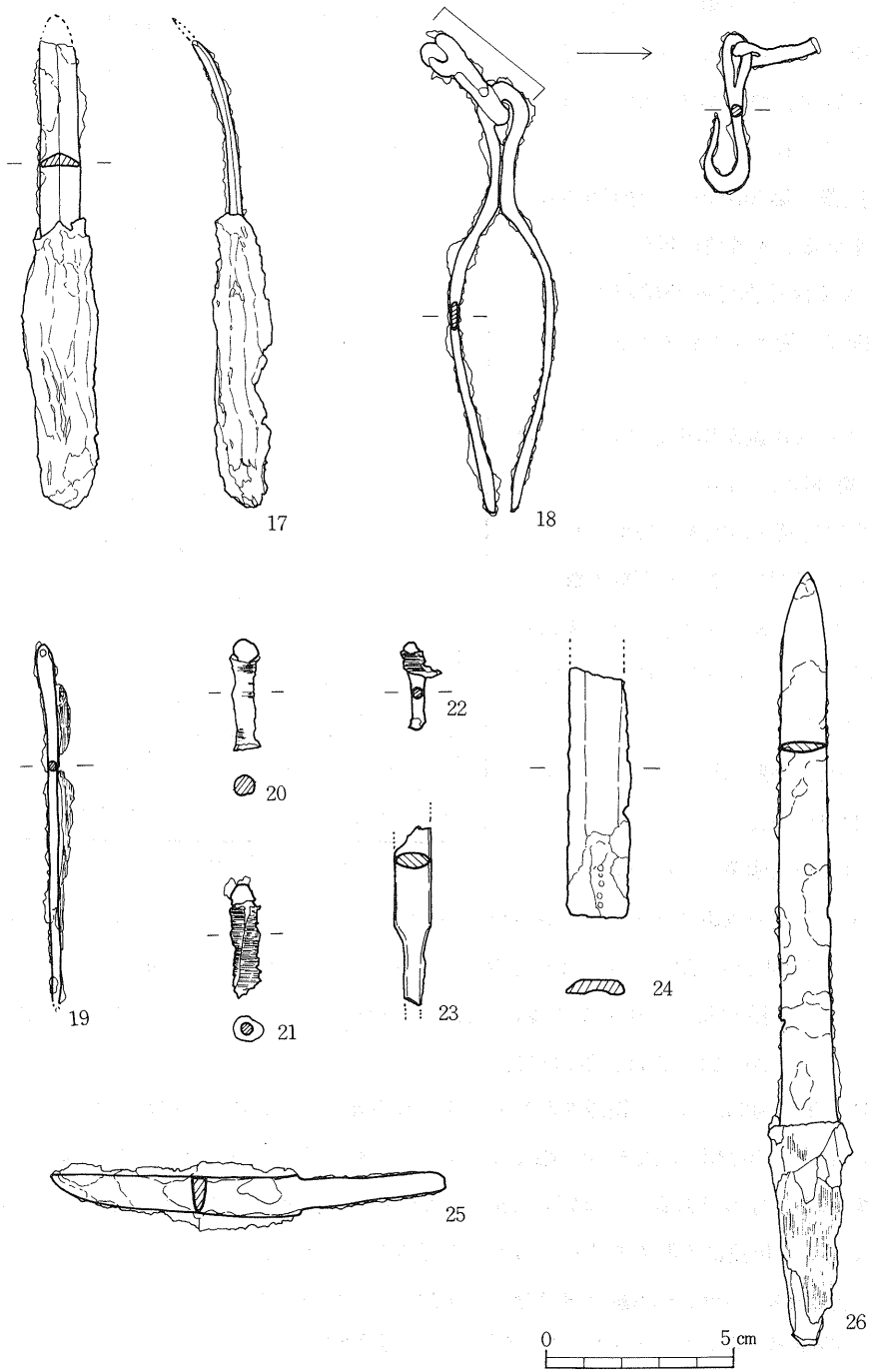
鑿子（毛抜状鉄器）（第29図18） 全長11.5cmで頭部が円形を呈し頭部が締め胴部がふくらみを持ち先端部に向って幅が狭くなっている。頭部にはS字状の金具が2ヶ連なって装着さ



第27図 10号地下式横穴墓
出土直刀実測図



第28图 10号地下式横穴墓出土鉄鏃実測図



第29图 10号地下式横穴墓出土鉄器・骨角器実測図

れている。宇野氏分類のⅡ a 類⁽²⁾に相当する。県内では延岡市浄土寺山古墳⁽³⁾、国富町六野原古墳群第 6 号墳⁽⁴⁾で類似品が出土している。

針状鉄器（第30図19） 全長9.8cm、幅3mmを計る。先端部は折れているが、頭部にはX線写真で孔が確認されている。周囲には鞘と思われる木質が付着している。

B群よりは鉄鏃が出土している。（第23図）（第28図7～10）

7は腸拵柳葉式の鉄鏃で矢柄の装着状況から見て、折れてはいるが無茎鏃になると思われる、8、9は方頭斧箭式の鉄鏃で細根である。10はB・C群より接合したものである。

C群よりは鉄鏃が出土している。（第23図）（第29図11～16）

11～14は腸拵柳葉式の鉄鏃であり、15、16は円頭斧箭式の鉄鏃である。全て有茎鏃で11、12、15、16には樹皮が巻きつけられていた。

鋌金具（第30図20～22）全長が3cm前後の小型品である。5号地下式横穴墓⁽⁵⁾や野尻町、大萩36号地下式横穴墓⁽⁶⁾より木片に装着されたものが出土しており、飾り弓の鋌金具を想定されている。20、21はA群、22はC群より出土している。

骨角器（第29図23、24） 鉄器等の間より骨角器の細片と思われるものが数点出土している。その中でも23は幅1cmで根元が細くなっており、野尻町大萩36号地下式横穴墓⁽⁷⁾出土の骨鏃と類似するものである。24は幅1.6cmで表面が平坦で、裏面の中央部に浅い凹みがある骨製品である。用途は不明であるが、刀装具の可能性も考えられる。

註 (1) 古瀬清秀「古墳出土の鏃の形態変遷とその役割」『考古論集』1977

(2) 宇野慎敏「鏃子考」『末永雅夫先生米寿記念献呈論文集』1985

(3) 鳥居龍三「上代の日向延岡」1935

表10 10号地下式横穴墓出土鉄鏃計測表

番号	現存長	身長	最大幅	矢柄の残存	備考
3	13.6 ^{cm}	4.0 ^{cm}	5.9 ^{cm}	木質布着	完形
4	11.9	2.3	3.8	樹皮巻	布付着
5	13.7	1.9	4.5	樹皮巻	布付着
6	7.5	7.4	4.4		布付着
7	6.2	6.2	3.5		
8	11.3	2.8	1.0		
9	8.4	—	0.5		
10	16.5	3.0	0.8	木質	
11	12.7	5.3	2.6	樹皮巻	
12	8.3	—	2.6	樹皮巻	
13	10.8	5.7	2.7		
14	9.0	5.5	2.7		
15	11.4	0.7	2.5	樹皮巻	
16	9.5	0.6	3.5	樹皮巻	

※ 身長は最大幅の線より先端部を計測した。

- (4) 瀬之口伝九郎「六野原古墳調査報告」『宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告第13輯』1944
- (5) 調査者（菅付和樹氏）の御教示による
- (6) 茂山 護「大萩地下式横穴36号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書第22集』昭和55年
- (7) 茂山 護「大萩地下式横穴36号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書第22集』昭和55年

小 結

市の瀬10号地下式横穴墓は、床面に敷石をし、壁面に石を立て、幅2.05m、長さ2.50mの妻入り長方形プランの羨道閉塞であり、壮年の男性2・不明の男性1・壮年の女性1が埋葬されていた。出土した須恵器は、第30図のように高坏A・B類がⅢA期に、高坏C類がⅢB期に、坏蓋A類がⅢB期に比定されるので、6世紀中頃に当地地下式横穴墓は造営された。第一段階は1号人骨（壮年の男性）が6世紀中頃にA群の鉄鏃と右袖部のⅢA期の須恵器と伴に埋葬され、第二段階は4・5号人骨（壮年の男性）がB群の鉄鏃と左袖部のⅢA期の須恵器と伴に埋葬される。第三段階は4・5号人骨が左袖部にかたづけられて頭位を逆にして2号人骨（不明の男性）と3号人骨（壮年の男性）がC群の鉄鏃と左袖部のⅢB期の須恵器と伴に埋葬された。竪坑に切られている土坑は、第三段階の追葬の時期に竪坑を掘り間違えた所産と推定される。副葬品に馬具を欠如していることは当地地下式横穴墓の階層の性格を暗示している。

地下式横穴墓の床面に敷石をし、壁面に石を立てる10号地下式横穴墓の構造は、市の瀬1⁽¹⁾・9号地下式横穴墓、綾町四反田1号地下式横穴墓⁽²⁾にも見られるが、市の瀬1号・四反田1号地下式横穴墓が平入りに対して、市の瀬9・10号地下式横穴墓は妻入りである。このタイプの平入りの地下式横穴墓を福尾正彦氏がⅡ-B類として横穴式石室との関係で捉えようとしており⁽³⁾、日向における横穴式石室が須恵器のⅢA期（6世紀中頃）より溯らないことからからもその影響と考えるのが妥当である。従来、宮崎平野部では6世紀前半を以て妻入りから平入りへの変化の中で捉えてきたが、当地地下式横穴墓群では6世紀中頃～後半まで妻入りが継続して造営されており、平入りと共存することは宮崎平野部の中においても地域性が存在することが明らかになった。

また、有蓋高坏の坏部にアワビが入っていたことは食物供献の具体的に残した事例であり、『記・紀』の「黄泉戸喫」⁽⁵⁾を推定させる。他地域では上ノ原横穴墓群⁽⁶⁾（大分県下毛郡三光村）でカラス貝・ハマグリなどが出土しているが、地下式横穴墓の例としては初見である。

玄室内における土器供献は、国富地方では高田原56-1号地下式横穴墓⁽⁷⁾出土の須恵器のⅠ期の隼に見られるように5世紀後半に成立しているが⁽⁸⁾、下北方地下式横穴墓群⁽⁹⁾や西都

原地下式横穴墓群¹⁰⁾では異なった様相を示しており、地域によって祭祀が一定でなかったことを示している。

- 註 (1) 石川恒太郎 「市ノ瀬の地下式古墳」 『地下式古墳の研究』 1973
- (2) 石川恒太郎 「綾町地下式古墳調査報告」 『宮崎県文化財調査報告書』 第14集 1969
- (3) 福尾正彦 「日向中央部における地下式横穴とその社会」 『古文化談叢』 第7集 1980
- (4) 日向では20数基確認されているが、現在のところ永山古墳（木城町、1981年町教育委員会調査）が最古である。
- (5) 小林行雄 「黄泉戸喫」 『考古学集刊』 第2冊 1949
- (6) 村上久和他 『上ノ原横穴墓群』 I～IV 1982～1985
- (7) 面高哲郎・北郷泰道他 「高田原地下式横穴発掘調査報告」 『国富町文化財調査資料』 第2集 1982
- (8) 六野原14号地下式横穴墓で「伽倻」系の有蓋高杯が出土しており、玄室内出土の可能性があるが、報告書では原位置について触れていない。
- (9) 下北方7・9号地下式横穴墓は周溝からI期の無蓋高杯を出土する一方、4号地下式横穴墓はI期の須恵器を竪坑供献している。
- (10) 西都原2・3・9・10号地下式横穴墓の玄室内からⅢB・ⅣA期の須恵器が出土している。

第三章 総括

市の瀬地下式横穴墓群は、表11のように10基発掘調査が行なわれ、今回6基について報告された。

5号地下式横穴墓は妻入り長台形プランで箱式石棺を有する。小型の仿製鏡を出土した地下式横穴墓は当例を含めて11基⁽¹⁾あり、小木原1号墳の平入り長方形プランを除くと、長さ4.0～5.6m×幅1.4～2.66mの妻入り長方形プランであり、5世紀後半から6世紀初頭に比定される。これに比較して、5号地下式横穴墓は長さが2.65mと短い。また箱式石棺を片側に寄せていることは造営段階から明らかに追葬を意図している。1号人骨（熟年の男、鏡1・刀1・刀子3・平根鎌4）と2号人骨（壮年の女、鏡1・剣2・貝輪3・斧1・尖根鎌）は頭位を逆にして互い違いに入れており、1号人骨埋葬後に2号人骨を追葬している。県内出土の鏡が5世紀の第2四半紀～6世紀の第1四半紀、U字形鋤先⁽²⁾の5世紀の第3四半紀～第4四半紀の年代観及び構造からすれば、第5号地下式横穴墓は5世紀の第4四半紀に比定され、当地下式横穴墓群の首長層に比定される。甲冑・馬具の欠如は、当地下式横穴墓の規

模の縮小化とあいまって、当地下式横穴墓群の性格を示すかもしれない。

6号地下式横穴墓は軒先を表現した方形プランで石棺状の屍床を有する。天井部が落ちており妻入りか平入りか不明であるが、石棺状の屍床・軒先を有すること、他の5・9・10号地下式横穴墓の構造から妻入りの可能性が大である。遺物は刀子1本だけであったが、石棺状の屍床と構造からすれば6世紀の第1・2四半紀に比定される。6号と8号は主軸を直交しており、周溝を含めて直径約10m墳丘が復元できる。

7・8号地下式横穴墓は奥行65～67cm、幅146～156cmの小形の平入り長方形プランの羨道閉塞で、副葬品の組み合わせは鉄鏃・刀子である。7号地下式横穴墓が尖根鏃3であるのに対して、8号地下式横穴墓は広鋒腸扶長三角形式鏃である、構造と副葬品の組み合わせから6世紀の第4四半紀に比定される。

9号地下式横穴墓は、床面に敷石をし、壁面に石を立てた妻入り方形プランで、熟年の男1・壮年の女1・小児2が埋葬されていた。天井部は平坦で棟を有する箱形の断面を呈する。北頭位の4号人骨（小児Ⅱ期・9才）が初葬で、次に1号人骨（熟年の男）・2号人骨（壮

表11 市の瀬地下式横穴墓地名表

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	形態 プラン	玄室規模 奥行×幅cm	閉塞	副 葬 品														人骨	備 考	文 献
							武器 武 具				装 身 具				農 工 具				馬 土 器				
							甲冑	剣	刀	鏃	鏡	勾玉	管玉	切玉子	小玉	耳環	刀子	斧	鏃	鋤			
1	市の瀬 1号	1207	深年字 市の瀬	平入り 長方形	140×270														1	貝輪 (イモガイ)			
2	2	〃	〃																				
3	3	〃	〃																				
4	4	〃	〃	平入り 長方形	240×442														0				
5	5	〃	深年 5109-1	妻入り 長方形	265× 短辺 86 長辺 171	羨		2	1	36	2								2	骨製品（ヘア ピン?）3 貝輪3（イモ ガイ） 鉄金具付木片 （弓残欠）1	本報告		
6	6	〃	〃	平入り 長方形	225×215	羨															石棺 (50×180)	〃	
7	7	〃	〃	平入り 長方形	67×146	羨				3											なし	〃	
8	8	〃	〃	平入り 長方形	65×155	羨				1											なし	〃	
9	9	〃	〃	妻入り 長方形	155×168	羨		1		5										壺 埴	4	玉11 骨出土3	〃
10	10	〃	〃	妻入り 長方形	250×205	羨		1	2	14										高 杯 腕	4	罎子1・針1 鉄金具	〃

年の女)・3号人骨(小児Ⅰ期・8才)が南頭位で追葬されている。剣1・腹挟柳葉式鉄鏃5・切子玉8・小玉295・耳環2・刀子3・土師器(甕・埴)が出土しており、特に4号人骨は小玉を295個有しており、丁寧な取り扱いがなされている。構造と遺物から6世紀の第3・4四半紀に比定される。

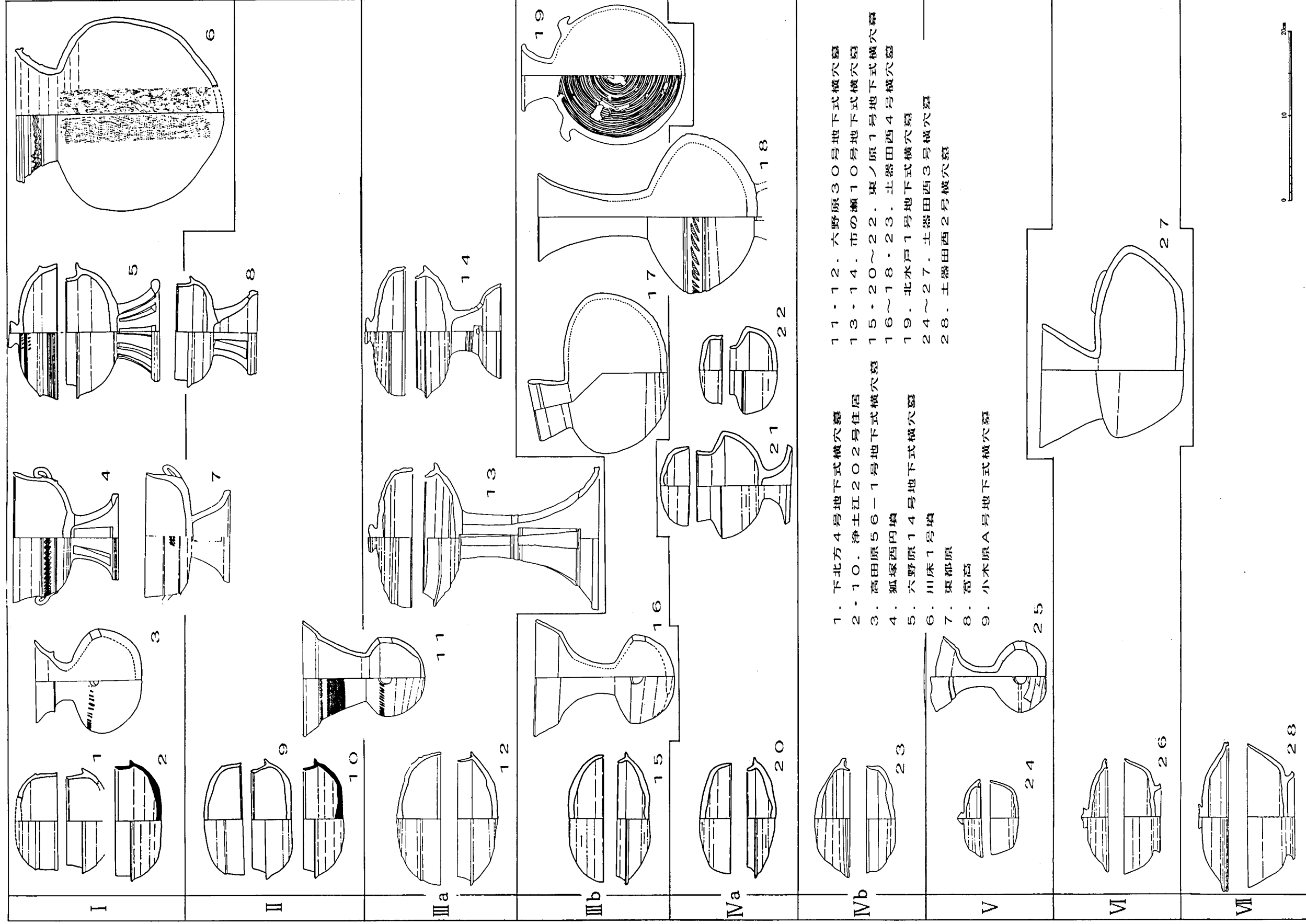
10号地下式横穴墓は、床面に敷石をし、床面に石を立てた妻入り長方形プランで、棟と軒先を有する家形の断面である。第1段階(6世紀第3四半紀)の南頭位の1号人骨(壮年の男)→第2段階の4・5号人骨(壮年の男)→第3段階(6世紀の第4四半紀)の北頭位の2号人骨(不明の男)と3号人骨(壮年の女)と追える。妻入りの地下式横穴墓が6世紀後半まで継続し、アワビ入りの有蓋高杯が出土したのは注目される。

以上まとめると、当地下式横穴墓群は5号地下式横穴墓の1号人骨(5世紀第4四半紀)→同2号人骨(5世紀第4四半紀)→6号地下式横穴墓(6世紀第1四半紀)→10号地下式横穴墓1号人骨(6世紀第3四半紀)→10号地下式横穴墓追葬人骨・7・8・9号地下式横穴墓(6世紀第4四半紀)となる。

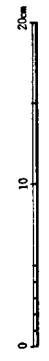
当地下式横穴墓群は、地下式横穴墓の構造が多種にわたっており、特に箱式石棺状の屍床を有し鏡を出土した5号地下式横穴墓は注目される。また妻入りの地下式横穴墓が追葬を意図して6世紀後半まで存続する⁽³⁾ことは、宮崎平野部の中でも構造が一元的に変化せず、地域性が存在することが明らかになると共に、妻入りと平入りという要素を過大に評価することへの再考を促した。

註

- (1) 福尾正彦氏が「日向中央部における地下式横穴とその社会」(『古文化談叢』第7集、1980)に鏡を出土した地下式横穴地名表を作成し9基載せており、桃木畑1号地下式横穴墓(1981年国富町教育委員会調査、珠文鏡1・剣1・刀子1・鉄鏃10数本)と市の瀬5号地下式横穴墓が追加される。
- (2) U字形鋤先出土の地下式横穴墓は茂山護氏が地名表を作成し9基載せており、宗仙寺9・10号地下式横穴墓が追加される。宮崎平野部の8基はすべて妻入りの長方形・逆台形・三角形であり、U字形鋤先を副葬する地下式横穴墓は5世紀の第3・4四半紀に限られる。
- (3) 六野原30号地下式横穴墓は長さ3.70m、幅2.10mの妻入り長方形プランで屍床を有する。屍床内に2体の人骨があり、出土状態から明らかに追葬であり、竪坑のセクションと一致する。竪坑上部供献と推定される須恵器のⅢA期の杯蓋・身・甕は、地下式横穴墓の構造からすれば追葬時の竪坑供献の可能性が高い。

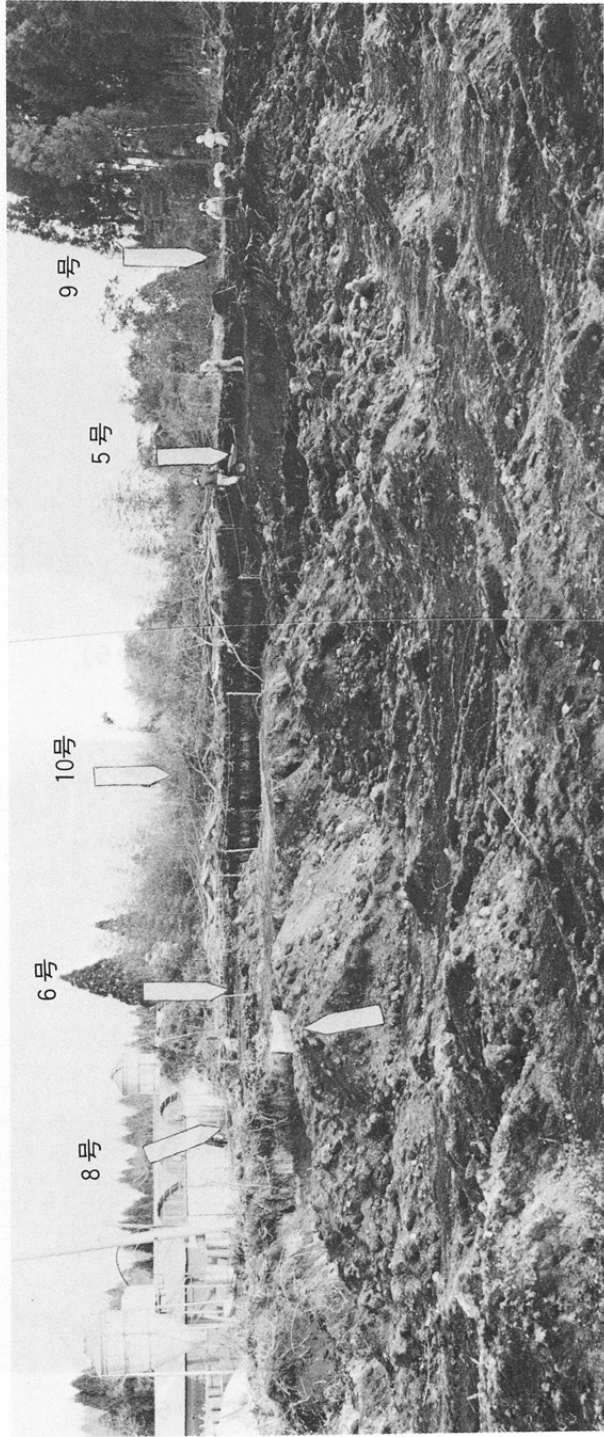


1. 下北方4号地下式横穴墓
 2・10. 浄土江202号住居
 3. 高田原56-1号地下式横穴墓
 4. 狐塚西内墳
 5. 六野原14号地下式横穴墓
 6. 川床1号墳
 7. 東都原
 8. 富高
 9. 小木原A号地下式横穴墓
 11・12. 六野原30号地下式横穴墓
 13・14. 市の瀬10号地下式横穴墓
 15・20~22. 東ノ原1号地下式横穴墓
 16~18・23. 土器田西4号横穴墓
 19. 北水戸1号地下式横穴墓
 24~27. 土器田西3号横穴墓
 28. 土器田西2号横穴墓



第30図 宮崎平野部の須恵器編年図(案)

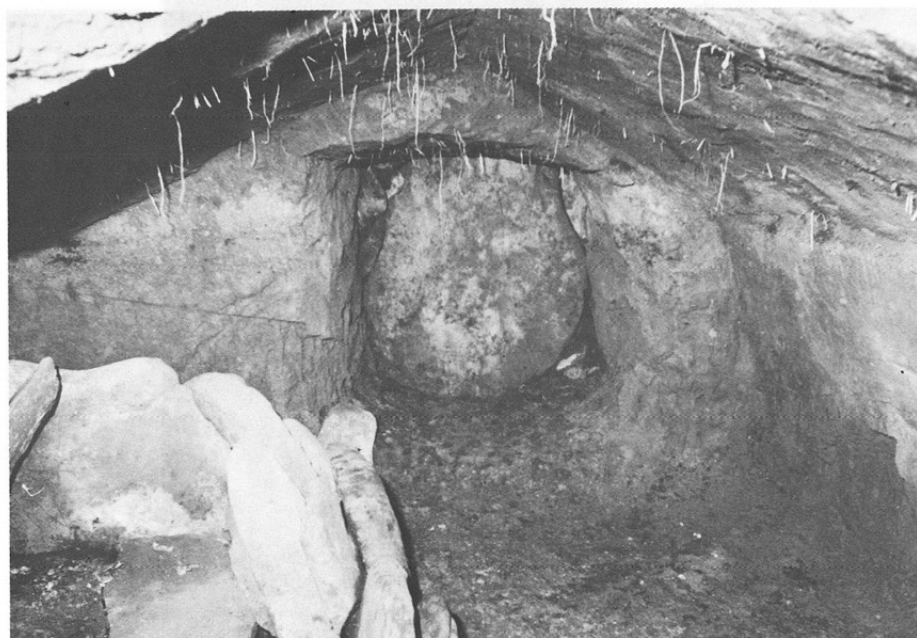
圖 版



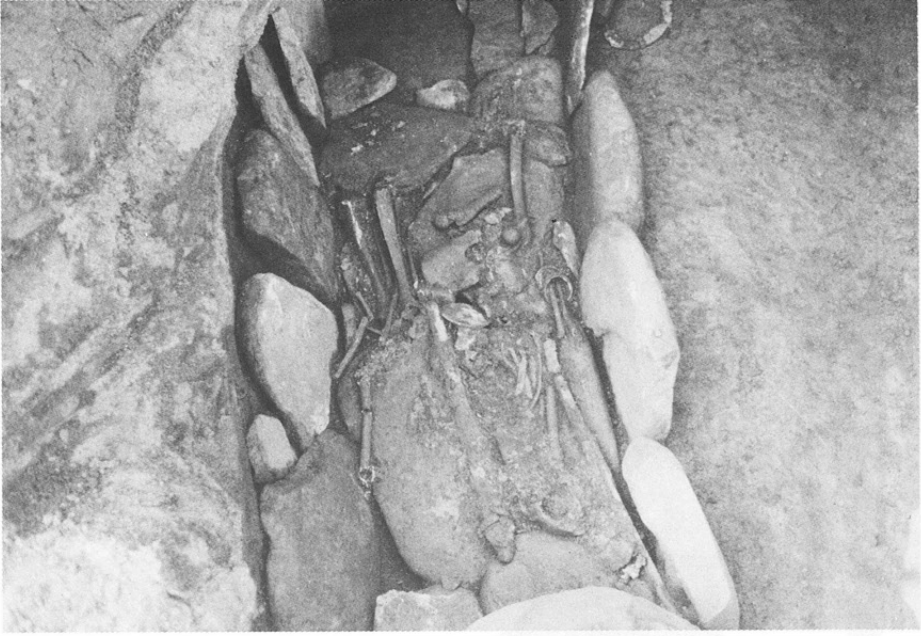
図版1 遺跡近景 (北西から)



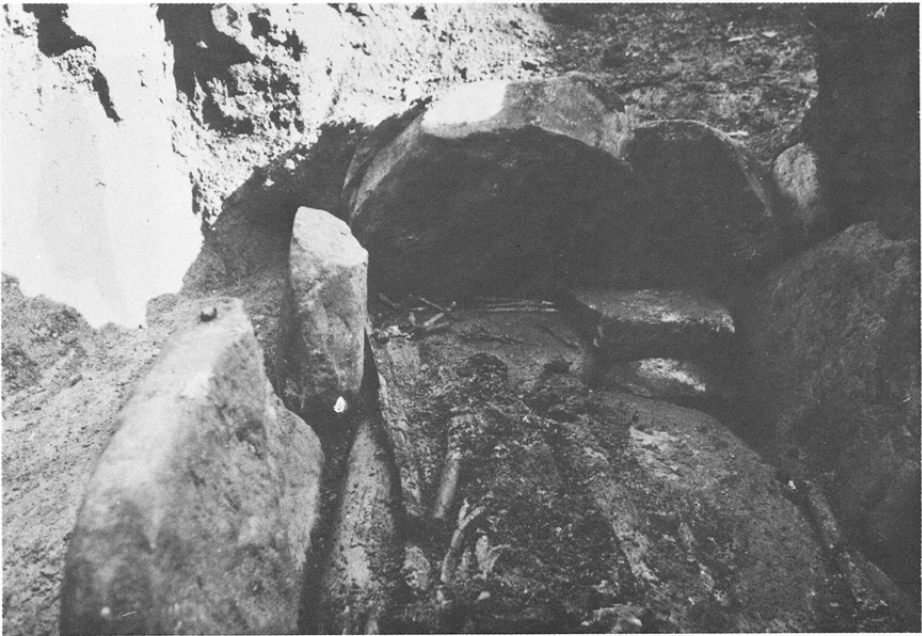
5号地下式横穴墓羨道閉塞状況（西から）



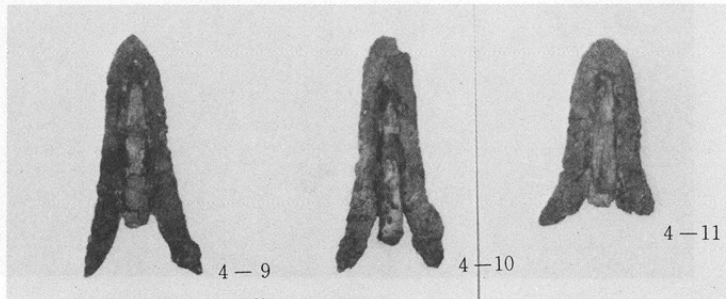
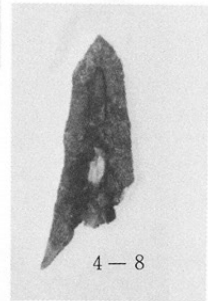
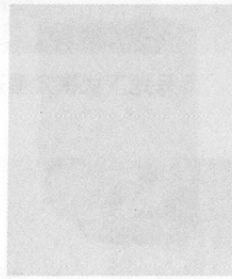
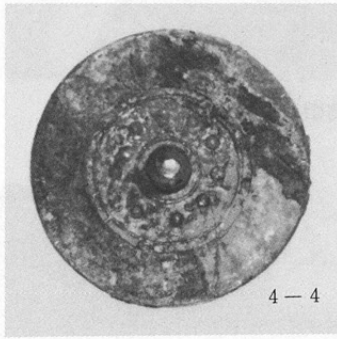
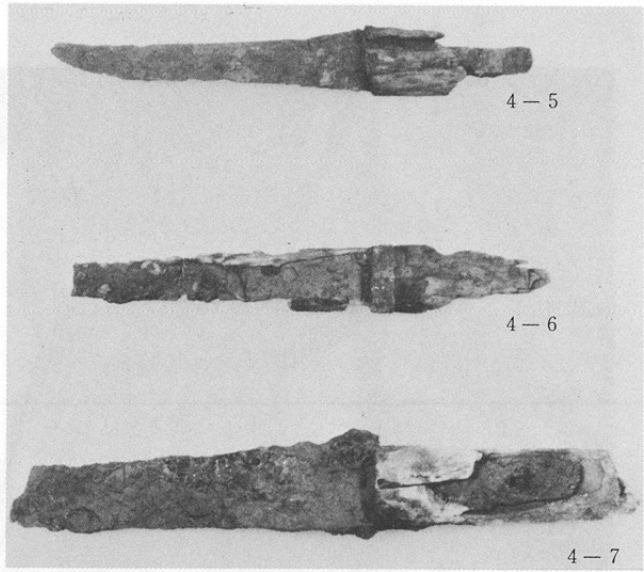
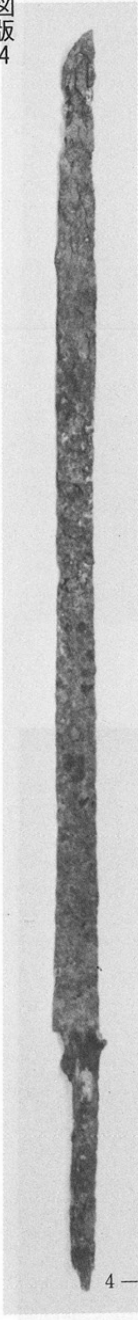
同羨門部閉塞状況（玄室から）



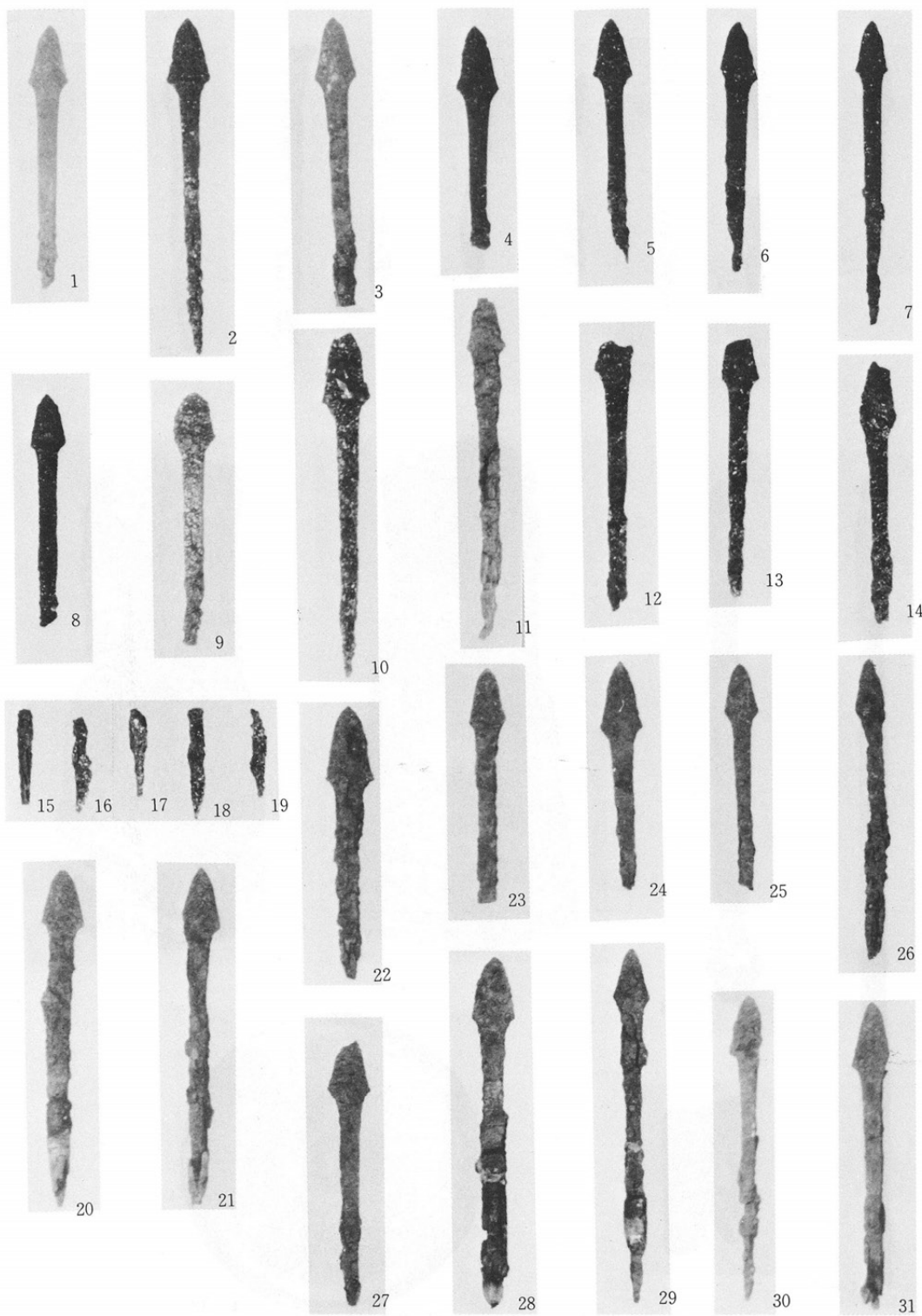
5号地下式横穴墓遺物出土状況（奥壁側から）



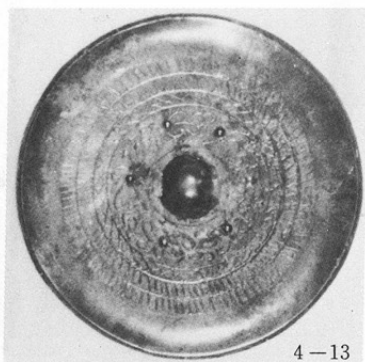
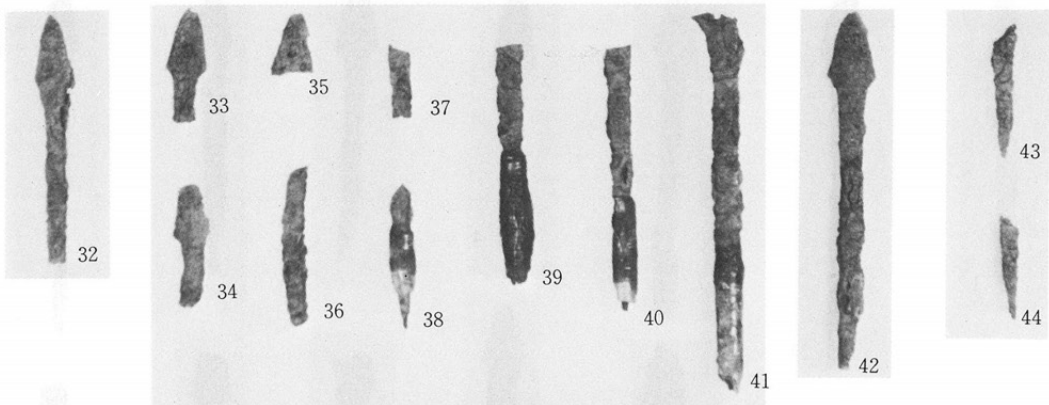
同遺物出土状況（玄門側から）



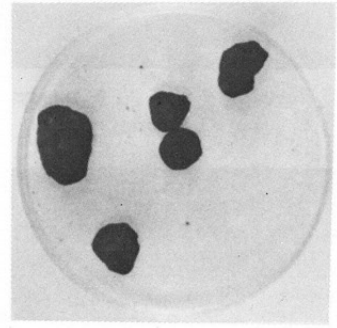
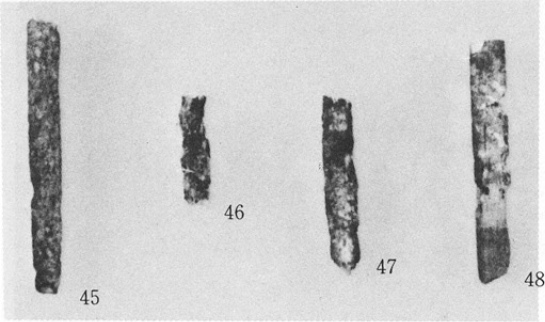
5号地下式横穴墓出土遺物(1)



5号地下式横穴墓出土遺物(2)



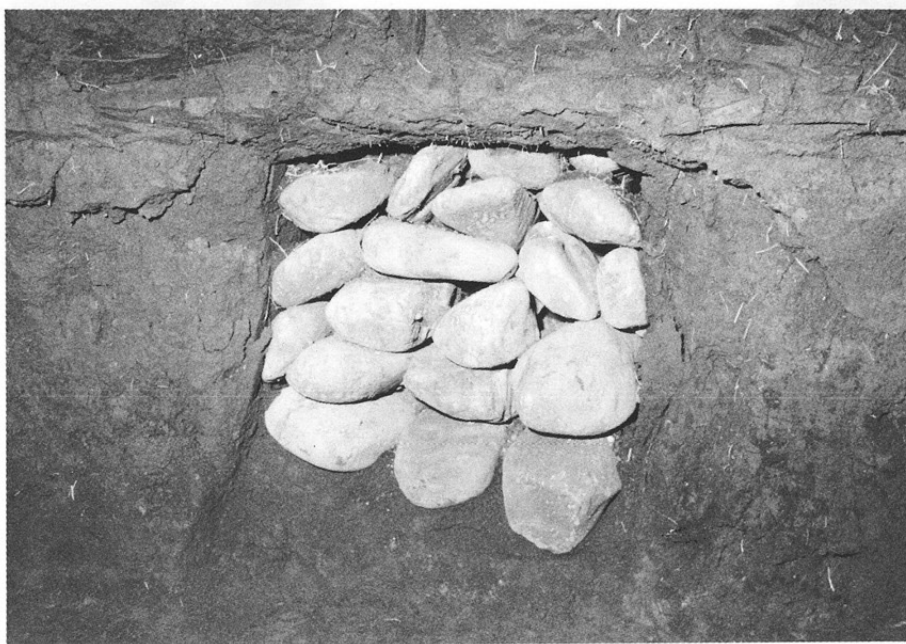
5号地下式横穴墓出土遺物(3)



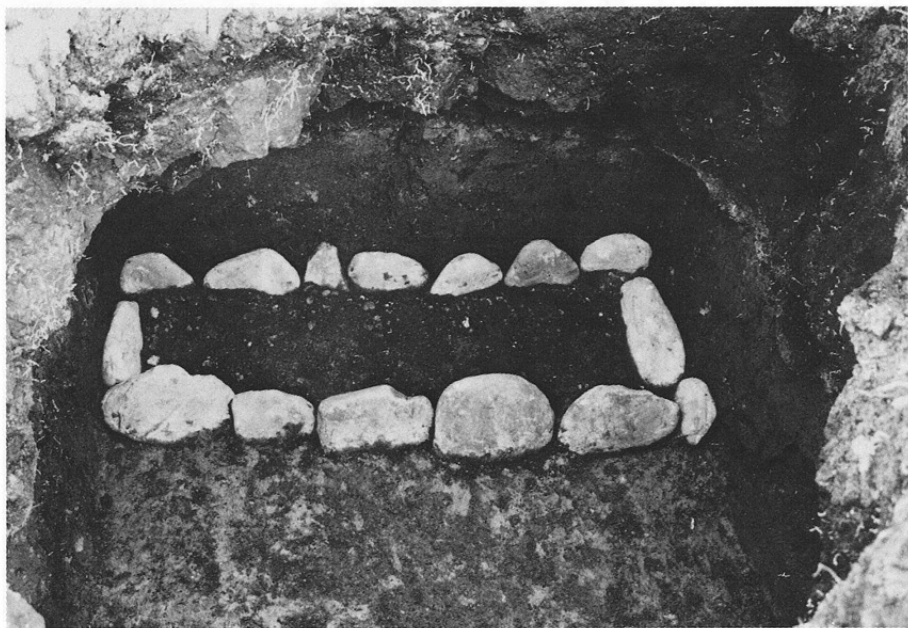
5号地下式横穴墓出土遺物(4)



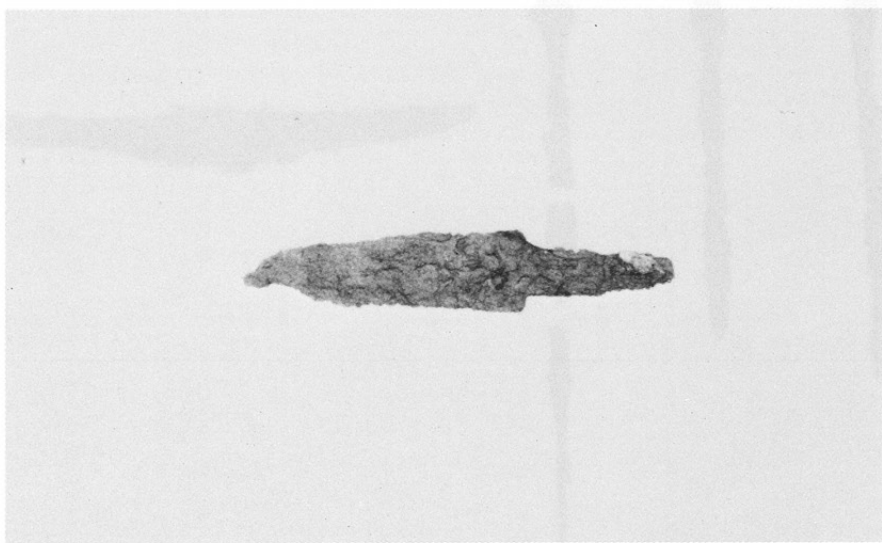
6号地下式様穴羨道閉塞状況（西から）



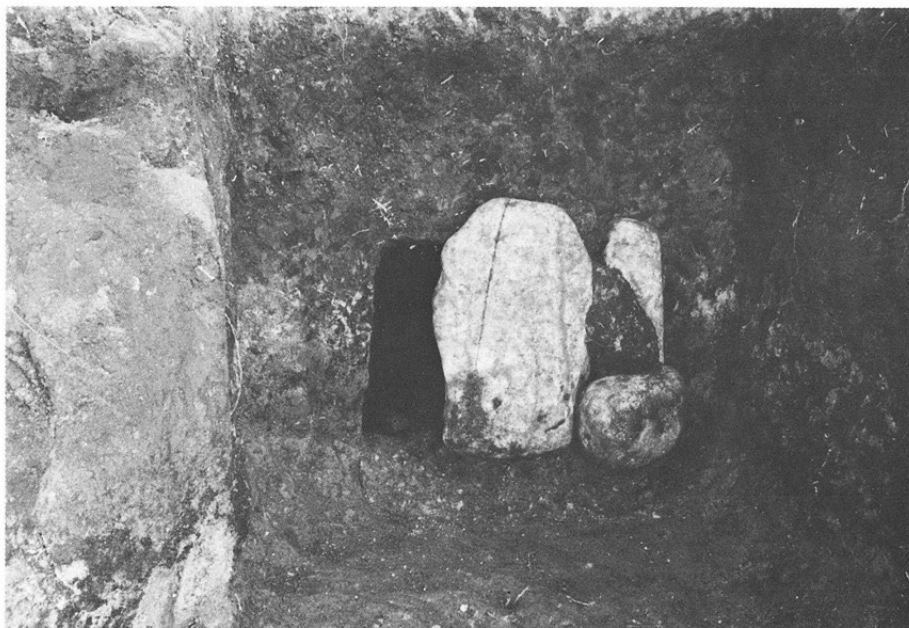
同羨門部閉塞状況（玄室から）



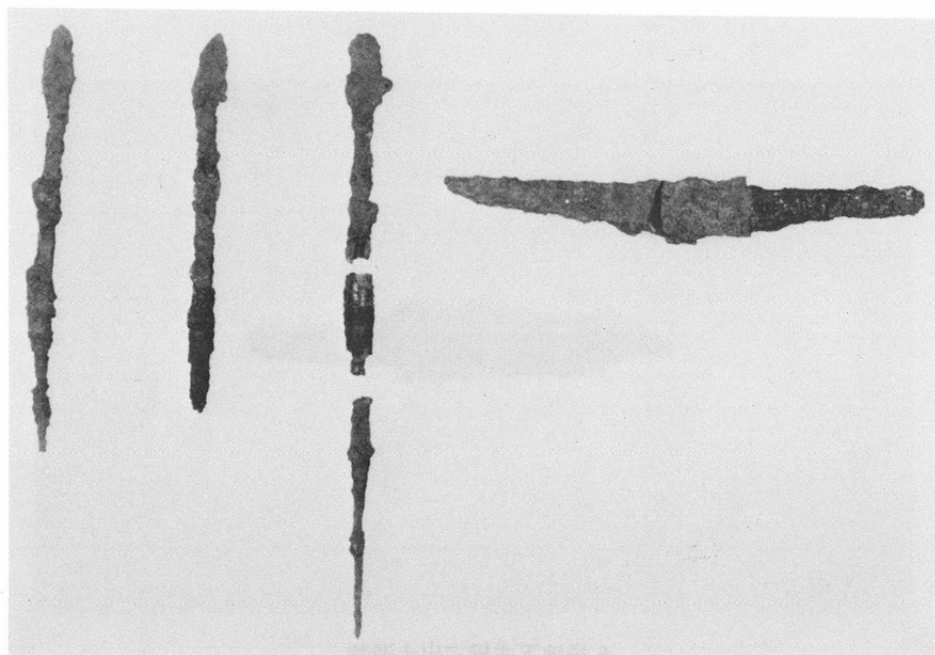
6号地下式横穴石棺状屍床状况



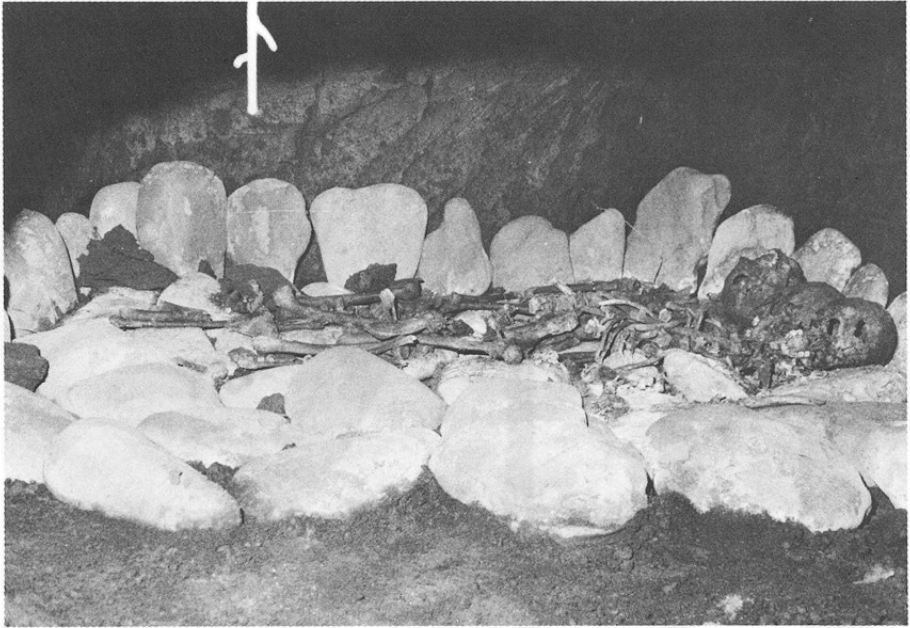
6号地下式横穴出土遺物



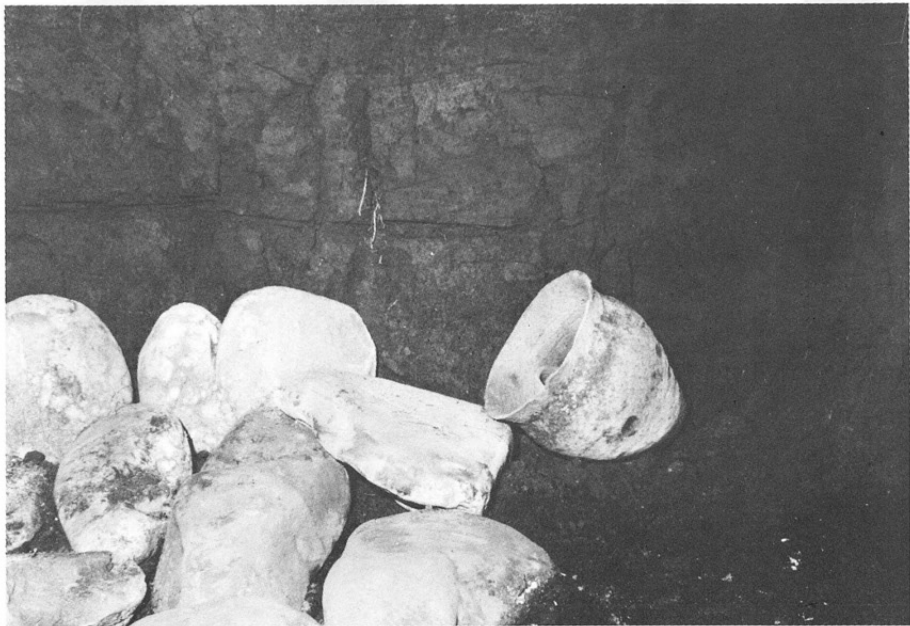
7号地下式横穴墓羨道閉塞状況（西から）



7号地下式横穴墓出土遺物



9号地下式横穴墓玄室内状况



9号地下式横穴墓土器副葬状况